

2017 年度 修士論文

佐岡地区中後入・有谷の空間的特質

Considerations on the spatial quality of Naka-gonyu and Aratani Village in Saoka

2018 年 1 月

高知工科大学大学院
工学研究科 基盤工学専攻
社会システム工学コース 1205091

大道 直紀

指導教員 渡辺 菊眞
副指導教員 高木 方隆

要旨

佐岡地区中後入・有谷の空間的特質

社会システム工学コース

1205091 大道 直紀

本稿は、佐岡地区の中後入と有谷を対象領域とし、その空間的特質を明らかにすることを目的としている。空間的特質とは、空間現況とそこに至るまでの変遷、空間構成とその変遷、さらに空間認識の変遷を含んだ総体を指す。

中山間地域での居住者の生活において、里山の利用は欠かせないものであった。河川からは田畑や生活に必要な水が引かれ、山林は建築資材や生活資源を提供してくれる場であるとともに、畏敬する対象でもあり、そこには神社や祠、先祖を祀る墓地が配されていた。このように里山には、生活とそれを支える思想があった。

しかし、現代の日本における里山は、人口流出による過疎化、生業の変化に伴って、放棄され管理されていない農地や森林が増加し、里山の様相は大きく変容してしまう。また、高知県では、江戸時代以前から続く集落の消滅さえ発生しており、これは他の地域では見られない現象である。

対象領域の中後入と有谷は、高知県中部を流れる物部川の北岸に位置し、ともに里山を有し、かつ隣接する2地区である。両地区は1960年代頃から過疎化や高齢化が本格的に進行し、小集落の幾つかは既に消滅、あるいはそれに近い状況にある。また、農地に目を転じると、多くは杉の植林により姿を消し、わずかに残存していた農地もまた耕作放棄地になってしまったものが多い。このような里山において、いかに生業をなし、聖地や葬地がいかに配され、そこにはどんな思想があったのかを記録する必要が急務であり、またどのような過程を経てこれらが現在に見るかたちへと変遷したかも辿る必要がある。

本稿では以下のプロセスにより考察をすすめていく。中後入と有谷両地区において、かつて里山が豊かに機能していたころの空間（原型空間）を起点に、現在みる空間（現在型空間）までの変遷を明らかにする。次いで、原型空間と現在型空間の空間構成ダイアグラムを提示し、その特質を把握する。最後に空間構成ダイアグラムの分析を通じて空間認識ダイアグラムを導出する。

空間認識を含む空間的特質を考察することで、空間記録だけでなく、その空間を支える観念、すなわち各時代の生活観や他界観の在り方も把握し、逆に、観念から具体的な空間を導く道筋を知ることができる。里山において、空間認識を含む、空間における「変わるもの」と「変わらないもの」を、複合的に知ること、そのことにより、来るべき未来の里山整備のための手がかりを示したい。

Abstract

Considerations on the spatial quality of Naka-gonyu and Aratani Village in Saoka

Infrastructure Systems Engineering Course

1205091 Naoki Omichi

This purpose is a discussion on the spatial qualities of the Saoka area in Naka-gonyu and Aritani. Spatial characteristics are spatial configurations that can be seen from the current space and its transition, or space recognition.

Utilization of Satoyama was indispensable in the life of residents in the inter-mountainous area.

However, in contemporary Japan in Satoyama, abandoned and uncontrolled agricultural land and forest increase, the appearance changes greatly. In Kochi Prefecture, even disappearance of villages that have continued from before the Edo period has occurred.

Naka-gonyu and Aritani districts, we will clarify the transition to the space when Satoyama once functioned abundantly and its current space, reveal the factors forming the spatial characteristics of each district.

By considering the nature of the space, not only the spatial record but also the ideas that support the space, that is, the way of view of the view of life and the view of the other world are grasped, and conversely, clues to get to know the path leading from the idea to the space are obtained be able to. Also, it is possible to comprehensively know what kind of space creates the presence or absence of spatial change, magnitude of magnitude, and whether it produces "changing things" and "unchanged" in space including spatial recognition become.

要旨	1
序章	11
0-1.背景	12
0-2.目的	13
0-3.既往の研究	14
0-4.研究の構成	15
0-5.研究の方法	16
第1章 里山の空間と変遷.....	18
1-1.里山の定義	19
1-1-1.里山とは.....	19
1-1-2.里山の構成要素.....	20
1-1-3.里山の歴史.....	21
1-2.里山の空間構成と空間認識	24
1-2-1.里山の空間構成モデル.....	24
1-2-2.里山の空間認識モデル.....	25
1-3.里山の空間構成と空間認識	28
1-3-1.近代以前の里山の空間構成と空間認識.....	28
1-3-2.近代の里山の空間構成と空間認識.....	28
1-3-3.現代の里山の空間構成と空間認識.....	29
第2章 佐岡地区の概要	31
2-1.佐岡地区	32
2-1-1.地理的環境.....	32
2-1-2.佐岡地区の歴史.....	33
2-2.中後入	34
2-2-1.中後入の概要.....	34
2-2-2.里山としての中後入.....	35
2-2-3.中後入の聖地.....	36
2-3.有谷	37
2-3-1.有谷の概要.....	37
2-3-2.里山としての有谷.....	38

2-3-3.有谷の聖地.....	38
第3章 佐岡地区の空間と変遷	40
3-1.佐岡地区の空間	41
3-1-1.地形の構成.....	41
3-1-2.街路と水路の体系.....	42
3-1-3.土地利用の分布.....	48
3-1-4.聖地の分布.....	48
3-2.佐岡地区の変遷.....	50
3-2-1.1910年当時の佐岡地区.....	50
3-2-2.1945年当時の佐岡地区.....	52
3-2-3.1970年当時の佐岡地区.....	54
3-2-4.1970年以降の佐岡地区.....	56
第4章 中後入・有谷の空間と変遷	58
4-1.中後入の空間	59
4-1-1.地形の構成.....	59
4-1-2.街路と河川・水路の体系.....	61
4-1-3.聖地・葬地の分布.....	64
4-1-4.土地利用の分布.....	67
4-2.有谷の空間	69
4-2-1.地形の構成.....	69
4-2-2.街路と河川・水路の体系.....	71
4-2-3.聖地・葬地の分布.....	74
4-2-4.土地利用の分布.....	77
4-3.中後入の変遷	79
4-3-1.街路と水路の変遷.....	79
4-3-2.土地利用の変遷.....	92
4-4.有谷の変遷	98
4-4-1.街路と河川・水路の変遷.....	98
4-4-2.土地利用の変遷.....	112
4-5.中後入・有谷の空間と変遷の比較考察	118
第5章 中後入・有谷の空間構成.....	120
5-1.中後入の空間構成	121

5-1-1.西ノ谷	122
5-1-2.中ノ谷	124
5-1-3.東ノ谷	126
5-1-4.中後入	128
5-2.有谷の空間構成	130
5-2-1.ムカイ	131
5-2-2.スズハラ	132
5-2-3.オドリバ	133
5-2-4.イチドウ	134
5-2-5.ヌタ	136
5-2-6.有谷（谷尾根空間）	138
第 6 章 中後入・有谷の空間認識	139
6-1.中後入・有谷の空間と変遷のまとめ	140
6-2.中後入・有谷の空間構成のまとめ	141
6-3.中後入の空間認識	142
6-3-1.近代以前の空間認識	142
6-3-2.近代の空間認識	142
6-3-3.現代の空間認識	143
6-3-4.空間認識の相関	144
6-4.有谷の空間認識	146
6-4-1.近代以前の空間認識	146
6-4-2.近代の空間認識	146
6-4-3.現代の空間認識	147
6-4-4.空間認識の相関	148
6-5.イチドウ・ヌタの空間認識	149
6-5-1.近代以前の空間認識	149
6-5-2.近代の空間認識	149
6-5-3.現代の空間認識	150
6-5-4.空間認識の相関	151
第 7 章 終章	152
7-1.成果と課題	153
7-2.里山居住に向けて	154

主要参考文献一覧	155
付録	157

図目次

第1章

図 1-1 里山の範囲	19
図 1-2 里山の土地利用変遷	23
図 1-3 里山の原風景モデルの変換	24
図 1-4 里山の空間構成モデル（左：谷地形 右：尾根地形）	25
図 1-5 里山の空間認識モデル	26
図 1-6 同心円状の空間認識モデル（左：近代以前、中央：近代、右：現代）	27
図 1-7 近代以前の里山の空間認識モデル	28
図 1-8 近代の里山の空間認識モデル	29
図 1-9 現代の里山の空間認識モデル	30

第2章

図 2-1 佐岡地区大字図	33
図 2-2 中後入境界図	35
図 2-3 須賀神社	36
図 2-4 金峯神社	36
図 2-5 有谷境界図	37
図 2-6 竈戸神社	38
図 2-7 聖神社	39
図 2-8 日吉神社跡	39

第3章

図 3-1 佐岡地区字界図 （1/35000）	41
図 3-2 1910 年当時の佐岡地区街路図	43
図 3-3 1945 年当時の佐岡地区街路図	44
図 3-4 1970 年当時の佐岡地区街路図	45
図 3-5 2016 年現在の佐岡地区街路図	46

図 3- 6	佐岡地区の河川図	47
図 3- 7	佐岡地区の聖地分布図	49
図 3- 8	1910 年当時の佐岡地区土地利用図	51
図 3- 9	1945 年当時の佐岡地区土地利用図	53
図 3-10	1970 年当時の佐岡地区土地利用図	55
図 3-11	2016 年現在の佐岡地区土地利用図	57

第 4 章

図 4- 1	中後入地形図 (S=1/8000)	60
図 4- 2	中後入街路網 (S=1/8000)	62
図 4- 3	中後入水路網 (S=1/8000)	63
図 4- 4	中後入聖地分布図 (S=1/8000)	65
図 4- 5	中後入葬地分布図(S=1/8000).....	66
図 4- 6	中後入現土地利用図 (S=1/8000)	68
図 4- 7	有谷地形図 (S=1/15000)	70
図 4- 8	有谷街路図 (S=1/15000)	72
図 4- 9	有谷水路図 (S=1/15000)	73
図 4-10	有谷聖地分布図 (S=1/15000)	75
図 4-11	有谷葬地分布図 (S=1/15000)	76
図 4-12	有谷現土地利用図 (S=1/15000)	78
図 4-13	1945 年当時の中後入街路網 (S=1/8000)	80
図 4-14	1945 年当時の中後入西ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)	81
図 4-15	1945 年当時の中後入中ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)	82
図 4-16	1945 年当時の中後入水路網 (S=1/8000)	83
図 4-17	1970 年当時の中後入街路網 (S=1/8000)	85
図 4-18	1970 年当時の中後入水路網 (S=1/8000)	86
図 4-19	2016 年現在の中後入街路網 (S=1/8000)	88
図 4-20	2016 年現在の中後入西ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)	89
図 4-21	2016 年現在の中後入中ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)	90
図 4-22	2016 年現在の中後入水路網 (S=1/8000)	91
図 4-23	1945 年当時の土地利用図 (S=1/8000)	93
図 4-24	1970 年当時の中後入土地利用図 (S=1/8000)	95

図 4- 25	2016 年現在の中後入土地利用図 (S=1/8000)	97
図 4- 26	1945 年当時の有谷街路網 (S=1/15000)	100
図 4- 27	1945 年当時の有谷ムカイ付近の街路網 (S=1/5000)	101
図 4- 28	1945 年当時の有谷ヌタ付近の街路網 (S=1/8000)	102
図 4- 29	1945 年当時の有谷水路網 (S=1/15000)	103
図 4- 30	1970 年当時の有谷街路網 (S=1/15000)	105
図 4- 31	1970 年当時の有谷水路網 (S=1/15000)	106
図 4- 32	2016 年現在の有谷街路網 (S=1/15000)	108
図 4- 33	2016 年現在の有谷ムカイ付近の街路網 (S=1/5000)	109
図 4- 34	2016 年現在の有谷ヌタ付近の街路網 (S=1/8000)	110
図 4- 35	2016 年現在の有谷水路網 (S=1/15000)	111
図 4- 36	1945 年当時の有谷土地利用図 (S=1/15000)	113
図 4- 37	1970 年当時の有谷土地利用図 (S=1/15000)	115
図 4- 38	2016 年現在の有谷土地利用図 (S=1/15000)	117

第 5 章

図 5- 1	中後入の空間 (上 : 1945 年、下 : 2016 年)	121
図 5- 2	西ノ谷の空間構成 (原型)	122
図 5- 3	西ノ谷の空間構成 (現在型)	123
図 5- 4	中ノ谷の空間構成 (原型)	124
図 5- 5	中ノ谷の空間構成 (現在型)	125
図 5- 6	東ノ谷の空間構成 (原型)	126
図 5- 7	東ノ谷の空間構成 (現在形)	127
図 5- 8	中後入の空間構成 (原型)	128
図 5- 9	中後入の空間構成 (現在形)	129
図 5- 10	有谷の空間 (上 : 1945 年、下 : 2016 年)	130
図 5- 11	ムカイの空間構成	131
図 5- 12	スズハラの空間構成	132
図 5- 13	オドリバの空間構成	133
図 5- 14	イチドウの空間構成 (原型)	134
図 5- 15	イチドウの空間構成 (現在形)	135
図 5- 16	ヌタの空間構成 (原型)	136

図 5- 17	ヌタの空間構成（現在形）	137
図 5- 18	有谷（谷尾根地域）の空間構成	138

第 6 章

図 6- 1	近代以前の空間認識図（中後入（西ノ谷））	142
図 6- 2	近代の空間認識図（中後入（西ノ谷））	143
図 6- 3	近代の空間認識図（中後入（中ノ谷・東ノ谷））	143
図 6- 4	現代の空間認識図（中後入（西ノ谷））	144
図 6- 5	現代の空間認識図（中後入（中ノ谷・東ノ谷））	144
図 6- 6	近代以前の空間認識図（有谷（谷尾根空間））	146
図 6- 7	近代の空間認識図（有谷（谷尾根空間））	147
図 6- 8	現代の空間認識図（有谷（谷尾根空間））	147
図 6- 9	近代の空間認識図（イチドウ）	149
図 6- 10	近代の空間認識図（ヌタ）	150
図 6- 11	現代の空間認識図（イチドウ）	150
図 6- 12	現代の空間認識図（ヌタ）	151

序章

0-1. 背景

中山間地域での居住者の生活において、里山を含む里地の利用は欠かせないものであった。河川からは田畑や生活に必要な水が引かれ、山林は建築資材や生活資源を提供してくれる場であるとともに、畏敬する対象でもあり、そこには神社や祠、先祖を祀る墓地が配されていた。このように里地には、生活とそれを支える思想があった。

しかし、現代の日本における中山間地域は、人口流出による過疎化、生業の変化に伴って、放棄され管理されていない農地や森林が増加し、山林の様相は大きく変容してしまっている。また、高知県の中山間地域では、江戸時代以前から続く集落の消滅さえ発生しており、これは他の地域では見られない現象である。本研究の対象地である高知県香美市の佐岡地区においても例外ではない。

対象地の佐岡地区に属する中後入と有谷は、高知県中部を流れる物部川の北岸に位置する、互いに隣接する2地区である。この地区には、それぞれ幾つかの小集落が内包されている。この両地区は1960年代頃から過疎化や高齢化が本格的に進行し、小集落の幾つかは既に消滅、あるいはそれに近い状況に追い込まれている。また、農地に目を転じると、多くは杉の植林により姿を消し、わずかに残存していた農地もまた耕作放棄地になってしまったものが多い。このままだと、これまで各集落で培われて来た里地での生業、そしてそれを精神的に支えていた聖地や葬地の在り方、さらにその前提となる自然観や宗教観など、その多くが継承されることなく、姿を消してしまうであろう。これら集落の里地において、いかに生業をなし、聖地や葬地がいかに配され、そこにはどんな思想があったのかを記録する必要があるのではなかろうか。また、どのような過程を経てこれらが現在に見るかたちへと変遷したかも辿る必要があるのではないか。

これまで、中山間地域の里山や里地を対象にした研究では、そこに植生している生態系に着目し、その保全や改善に焦点を当てることが主流であった。そのため里山の空間整備手法もまた、里山の生態系を優位においている。その一方で里山やそれを含む里地の空間構成やその変遷に焦点を当てるものはほとんどない。しかし、里山、里地には、生態系としての価値だけでなく、自然景観の価値、住居形式や耕地空間さらには聖地や葬地を含む地域空間に見る文化性、歴史性などの価値もまた極めて重要だと考える。このような空間的価値を把握することには大きな意味があるであろう。そしてこの把握は空間的価値を考慮した里山整備手法に反映させるための大きな手がかりとなるであろう。

0-2. 目的

本研究は、佐岡地区の中後入と有谷を対象にし、その空間的特質を明らかにすることを目的としている。空間的特質は以下の3つの段階を経て明らかにしていく。

段階1：中後入と有谷両地区において、かつて里山が豊かに機能していたころの空間（＝原型空間）と、その現在の空間（＝現在型空間）までの変遷を明らかにする。

段階2：中後入と有谷両地区において、原型空間と現在型空間の空間構成ダイアグラムを提示し、同時に空間構成ダイアグラムの分析を通じて空間認識ダイアグラムを導出する。

段階3：中後入と有谷地区の空間認識ダイアグラムから、それぞれの地区の空間的特質を形成している要因を明らかにする。

段階1において、中後入と有谷両地区の空間とその変遷を明らかにすることは、失われつつある中山間地域の生活容態や空間を記録に残すことも意味している。

段階2において、空間構成ダイアグラムの分析から空間認識ダイアグラムを導出することで空間記録だけでなく、その空間を支える観念、すなわち生活観や宗教観（他界観）の在り方を把握し、逆に、観念から空間を導く道筋を知るための手がかりをも得ることができる。

段階3において、両地区の空間的特質を、空間認識をもとに考察するが、このことにより、こういった空間が空間変遷の有無や程度の大小を生むのか、そして、空間認識を含む、空間における「変わるもの」と「変わらないもの」を生むのかを、複合的に知ることが可能になる。

中後入と有谷の空間的特質を明らかにすることで、里山が持つ空間的特質を継承し、その後の空間整備指針を策定する「手がかり」を得ることができるものと思われる。しかしながら、本研究においては空間整備指針を具体的に示すことは避ける。特定の整備指針を定めるのではなく、未来において、この地区に誰かが改めて住む時が来た場合、この地区の空間整備をしていくための「道しるべ」となることに期待するにとどめたい。

0-3. 既往の研究

里山を対象にした研究は、里山の生物多様性を含め生物資源に焦点を当てたものがほとんどであり、それをもとに空間整備や地域創成の指針を示している。武内和彦等による里山環境に関する研究（2001 年）では、里山の二次的自然の変遷と現状についてその変容メカニズムの分析を行っている。また、この分析をもとに里山の生物多様性に注目し、その維持・保全と活用について、事例を交えてその意義についても論じている。里山を含む中山間地域の歴史的民俗学研究としては、楠瀬慶太による高知県香美市の葦生槇山風土記（2009 年）がある。ここでは香美市の葦生と槇山を対象にヒアリングおよび文献調査を行い、古文書に見られる地名の現地比定をはじめ、歴史的景観の復元や消え行く村の記憶を記録している。この研究では、主に村々の生業の様態に比重を置いて調査が行われ、消え行く過疎集落の記憶を引き継いでいくことが意図されている。里山の空間に焦点を当てる研究は少なく、特に里山内の聖地や葬地を含む空間的考察は例をみない。

日本の集落や地域空間に関する研究は枚挙に暇がない。空間構成から空間認識を導き出す研究としては、宇杉和夫による日本の空間認識と景観構成による研究（2003 年）が挙げられる。宇杉は、生活空間の目標に応じた空間認識・景観構成を設定し、それを元にした日本空間の原型の提示を行っている。地域空間における葬地の研究としては、高橋俊也による京都における墓地の立地に関する研究（2007 年）がある、ここでは近代以降の京都の墓地の立地と市街地の変遷をあわせて分析することで、都市空間に見る他界観とその認識の変化を明らかにしている。

本研究では、里山を対象にその空間的特質を考察する。ここで言う里山は集落の背後にある狭義の里山だけでなく、集落や農地、聖地や葬地も含む広義の里山である。里山の空間的特質を明らかにすること、さらにその対象に聖地や葬地を含むことは本研究独自の視点である。また聖地や葬地の空間構成だけでなく、その構成に見る地域の人々の空間認識やその認識を支える他界観を空間と結びつけて考察することもまた、本研究独自のものである。かつて日本人の生業と他界観は密接な関わりを持っていた。里山においてもそれは例外ではない。里山の空間認識や他界観を論じることで、里山の空間の特質だけでなく、その精神的意義をも論じることができる。里山の空間研究をするに当たり極めて重要だと考える。

0-4. 研究の構成

序章では、研究の背景、目的、構成、方法、そして既往の研究について書き記す。

第1章では、まず、里山里地空間の概要について説明する。次に、里山が持つ初原的な構成を明確にし、里地の原型を定義する。次にさらに日本人の他界観を把握し、里山の空間構成と照らし合わせながら両者を連結することで、里山の空間構成と他界観の関係をダイアグラム化する。さらに里山の変遷を「森林史」から明確にし、その変遷を含めたダイアグラムを示す。

第2章では、文献や聞き取り調査によって佐岡地区全体やその内部にある大字・集落に関する概要を把握する。

第3章では、佐岡地区の空間を、空間構成要素の配置や分布から明らかにする。具体的には地形、街路、水路・河川、聖地、土地利用という5つの要素に焦点を当てる。次に、その変遷についても示す。

第4章では、対象を中後入と有谷に絞り、前章と同じく空間構成要素の配置や分布を明らかにするとともに、その変遷について記述する。さらに2つの領域での比較を行い、その共通点と差異についてまとめる。

第5章では、中後入と有谷のそれぞれの空間について、空間構成ダイアグラムを作成するとともに、その変遷についても示す。また各集落のダイアグラムを複合することで、各領域の空間的特質を明らかにしたい。

第6章では、中後入と有谷の空間的特質をもとに、そこから読み取れる空間認識ダイアグラムを示す。空間認識は、第1章で示した里山の他界観ダイアグラムを基本にし、そこに両地区固有の特質を加えることで明らかにする。

0-5. 研究の方法

本研究では、対象地域の地物の変遷と他界観を考察するにあたって、以下に示すように、1. 文献調査、2. 地図の分析、3. 現地調査、4. ヒアリング調査という四種の手法に基づき分析を行った。調査結果は GIS（地理情報システム）で統合した。

(1) 文献調査

文献調査では、1. 里山の歴史を含む研究資料、2. 葬地や集落の他界観についての資料、3. 佐岡地区の歴史に関する史料、の大きく 3 種の調査を行った。1 と 2 の文献調査では日本における普遍的な里山空間とその変遷の把握、さらにその背景にある他界観などの精神的背景を知ることとで地区固有のものと、日本の普遍的なことを比較的に考察するための素地をつくることを意図している。

(2) 地図の分析

まず、明治時代から現在に至るまでの佐岡地区全体の地物の変遷調査を行った。調査は、縮尺五万分の一 1907（明治 40）年の仮製地形図（参謀本部陸軍部測量局発行）、縮尺五万分の一の 1945（昭和 20）年の仮製地形図（参謀本部陸軍部測量局発行）と国土地理院発行の航空写真、縮尺二万五千分の一の 1967（昭和 41）年の国土地形図（国土地理院発行）、1970（昭和 20）年の国土地理院発行の航空写真、2016（平成 28）年のゼンリン住宅地図と国土地理院発行の航空写真を資料とした。なお、1967 年当時と 1970 年の地物の状態は相似するとして、同等の年代のものとして扱った。

(3) 現地調査

現地調査では、調査対象とする街路、水路・河川、集落、聖地・葬地の悉皆調査を行う。調査には、対象地域の地図、ロガー、三色ボールペン、カメラ、方位磁石を持参し、聖地・葬地の立地や方位、現況の記録を行い、適宜記録写真を撮っておく。現地調査は 2016 年 7 月から 2017 年 12 月までの間に行った。

(4) ヒアリング調査

ヒアリング調査では、その対象者を、年齢については 1945 年当時の佐岡地区について知る 70 代後半以上、居住地としては当時佐岡地区在住であった住民の方に限定した。ヒアリング内容は、1. 街路・水路などの地物の変遷、2. 生活容態と聖地・葬地の関わりなどである。ヒアリン

グは対象者を複数にし、その内容を比較検証すること、当時の史料を照らし合わせることで整合性をはかった。

調査は2016年11月から2017年11月までに、10名の方にご協力を頂いた。

(5) GIS 統合

本研究ではGIS（地理情報処理システム）を活用しながら研究を進める。調査対象となる地物の位置情報や属性情報を与えることで、他のGISデータと照らし合わせながら空間解析をデータとして保存・管理しておくことで、GISを用いた今後の研究に活用できるようにする。

第 1 章 里山の空間と変遷

1-1. 里山の定義

1-1-1. 里山とは

本研究における里山は、人里近くに存在する二次林や二次草地、その周囲にある農地、集落、水辺や、それに属する地物、さらには聖地と葬地を含めた領域のことを指す。地形的観点から言うと、里山を形成する地形には「谷地形」と「尾根地形」があり、それぞれを「谷の里山」、「尾根の里山」とする。

そもそも「里山」という言葉の起源は、1759 年（宝暦 9 年）の木曾材木奉行補佐格の寺町兵右衛門が筆記した「木曾山雑話」の「村里家近き山をさして里山と申し候」と記されている所に由来する。しかし、里山の名称が現代でよみがえったのは 1960 年代前半頃とみられる。森林生態学者の四手井綱英は「この語はただ山里を逆にただけで、村里に近い山という意味として、誰にも分かるだろう。そんな考えから林学で用いる『農用林』を『里山』と呼ぼうと提案した。」と当時のことを述懐している。

このように、人間の手によって管理された自然、すなわち「二次自然」であることは、大多数が認めるところであり、このことを基本にしつつ、さらには集落も含めるなど、現代ではかなり多義的な言葉となっている。しかし、聖地や葬地を含んで里山を定義しているものはない。

集落において、人々の心のよりどころとなる聖地や葬地は極めて重要な空間要素であり、これらも一体のものとして捉えられるべきであると考えます。

そこで本稿では、集落背後の林地のみならず、そこに農地、宅地に加え、さらに、その空間構成において重要な聖地・葬地も含めた地域を里山とする。図 1-1 では、本稿で用いる里山の概念を地形、土地利用と関連づけて、模式的に示している。

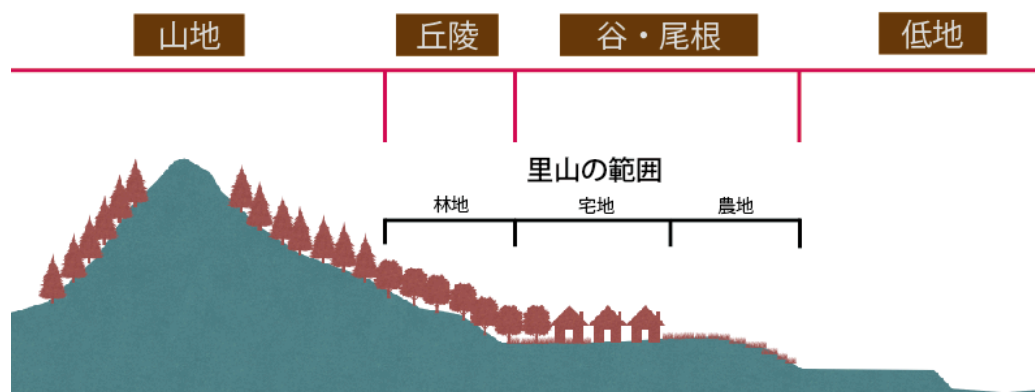


図 1-1 里山の範囲

1-1-2.里山の構成要素

本研究における里山は、以下の 6 つの要素によって構成される。

二次林

二次林とは、薪炭林と農用林の 2 つによって構成される林地である。薪炭林とは、薪や炭を生産するための林であり、十数年に 1 回の伐採によって維持される。農用林は、伝統的な農業に不可欠な堆肥をつくるために必要な落枝・落葉、低木・下草を集めるための林である。これらの林は人為的に成立した林であり、まとめて「二次林」と呼ぶことにした。

農地（畑地・水田・草地）

本稿では、畑地と水田と草地は同一の空間として扱う。狭義での土地利用はそれぞれ異なるが、ここでは広義の農地として調査した。

街路

街路は、領域間の接続を行うのはもちろんのこと、領域の境界線としての機能を有している。いずれにしても街路は重要な空間の骨格である。道路幅員の広狭のよりその種類は細分化されるが、ここでは全ての道を街路と定めている。

河川・水路・ため池

日本では近代に至るまで、農業とくに水田稲作の発展とともに、河川、水路、ため池が保全されてきた。それらは治水と農業的土地利用の枠組で有機的な関連がある。

集落

集落は家屋をはじめとする生活空間の中心として位置づけられる。本稿では、家屋群を含む一連の広がりを集落としている。

聖地・葬地

本研究における聖地は氏子神社とする。集落の構成員は氏神神社を畏敬する空間の中心に据えて自らの環境を捉えていたからである。「八幡」は一般的には神社に含まれるが、対象地域の「八幡」は先祖神を指すので、これを区別するものとする。

葬地は、ある一定の領域で区切られた墓（墓石、墓碑）を有する土地とする。葬地では、土手や塀などで区切られたある一定の土地に、墓が単独で置かれているものもあるが、ほとんど

が群を成して構成されている。このため、本研究ではある程度の墓のまとまりであっても一つの葬地として見なす。

また、祠には祖先霊を祀っているものや墓塔である五輪塔が添えられるものも存在する。祠が単独で置かれているようなものは、聖地の構成要素としてあつかう。

1-1-3.里山の歴史

本研究の里山の変遷では、以下の三つの時代に大別して論じられる。

- ・近代以前の里山（江戸時代以前）
- ・近代の里山（江戸時代～昭和 20 年代）
- ・現代の里山（昭和 30 年代～現在）

一般に江戸時代は近世、明治・大正時代を近代とするが、ここでは里山の様態が大きく変わる時代区分として上記のように分類した。

・近代以前の里山

日本における里山は一万年前の縄文時代前期あたりから小規模ながら作られていたことが確認されている。当時の里山は、原生林に植生している多種多様な森林材産物を採取する選択的利用以外の土地利用方法が多数を占めていた。そのなかでごく一部では、集落のための木材供出、漆やクリなどの落葉広葉樹の半栽培の手入れを行ってきた。また、狩猟や、縄文土器に使用される森林土壌のある場としても利用されていた。弥生時代になると、稲作文化が中国から伝搬し、以来水田のための土地開発が行われる。水田は谷間上部や扇状地の上方で開き、次第に麓へと造成された。古墳時代・奈良時代は集落や都市の成立による建材に木材が搬出されるようになった。奈良時代～平安時代は都市の建設や記念建造物の建設が相次ぎ、都市の出現とともに周囲の山林の木材供出による森林乱伐が起こった。これにより畿内の里山の森林の相当部分が失われ、600～850 年は日本の森林が荒廃した第 1 期とされている。この森林伐採が横行する状況から、畿内では留山などの大規模な伐採禁止のルールづくりを制定した。また、その他の里山の利用として瀬戸内沿岸の里山では製塩の燃料のために使用される木材や、中国地方の里山では窯業による燃料の生産地としていた。

戦国時代になると、戦争に使用する柵や居城に木材が使用される。土佐でも長宗我部氏による戦争のための柵などに木材を大量に使用されたことが確認されている。その後、長宗我部政權にあった土佐は豊臣政權の中心地である畿内に大量の木材を供出していた。このように、土

佐国における里山の利用によって、徳川政権初期の頃には土佐の山林は禿山であったといわれ、土佐全体の天然林はほぼ残存していなかったとみられている。この森林の荒廃は土佐だけでなく日本全国で見られ、この時期を日本の森林の荒廃した第2期とされている。

また、この当時、長宗我部地検帳によると、佐岡地区には既に佐岡本村、大後入の河川を中心とする地域に人々が多く住み着いていたと見られている。

縄文時代から人々は里山の資源を利用してきた。その利用方法の多くは里山に自然に植生している生物の狩猟・採取であった。また当時は、山と海は人間の生活に多くの恵みをもたらしてくれるだけでなく、畏怖・畏敬の存在でもあった。このような背景から、人々は山や森、海などを、人知を超えた異界として敬い、そこを中心にして、その縁辺に寄り添うような生活をしていたと考えられる。

・近代の里山

江戸時代中期に入ると、都市は拡大し建築用材としての木材の需要が高まり、日本全国で荒廃した里山への植林が開始される。土佐国では、森林を伐採していた領域にシイやカシなどの広葉樹を天然下种植林と言われる方法で植林する。これが、現在の高知における二次林の始まりである。二次林は薪炭用の資材として昭和期まで使用される。また、スギやヒノキなどによる植林も行われてきたが、明治期と昭和期の二回に分けて本格的に行われることになる。

この時代では、石垣造成の技術が発展し極めて長い水路を引くことが出来るようになる。このことにより河川から離れた尾根の地域にも集落が形成される。この土木技術の発展によって、斜面にも棚田を造成することが可能となる。佐岡地区では急峻な地形を多く持つ有谷や中後入、大後入などの農地が拡大することになる。

また、江戸時代では、里山は「入会地」として村落共同体のものとして共有されてきた。土地の自然資源を集落の人々は無償で利用できた。そして、そのような里山は村ごとに独特の掟が定められ、厳重に管理することで植生崩壊を防いでいた。しかし、明治維新後には、「入会地」であった数多くが官有地または個人所有となる。

近代の里山では、林地と農地と集落の結びつきが強化される。このような三位一体の関係性が今日の里山の景観の原型を形成している。それゆえに、本研究では、このような近代の里山を原型として設定する。

・現代の里山

第二次大戦後の里山は、世界的なエネルギー源の変化や農業形態の変化によって大きく土地利用が変化する。それが、今日の里山の利用価値を落とし、荒廃する原因となった。

1960 年代頃から高知県の里山内の集落は過疎化、高齢化が進行する。人々が都市に拠点を移すと、今までの農地を管理することが難しくなり、休耕田が多くなってくる。特に棚田で形成されている農地は石垣管理の負担も考えなければならないことから、この流れが更に加速する。更に、「林業基本法」（1964 年）の策定による大規模な針葉樹林の植樹が全国的な動きとなり、特に生産性の無い畑地や水田は杉林、ヒノキ林に置きかえられる。更に、人工の減少と高齢化により人工林、及び二次林の管理も農地と同様に行き届かなくなり、荒れ果ててしまう。

里山の時代区分		土地利用の変化									
現代	1945	平成時代	都市の拡大の沈静化			集落・農地の縮小	造林地の整備・育成	森林放置による荒廃	森林材の選択的利用		
		昭和時代	都市の拡大			集落・農地の縮小	大規模拡大造林	山野の農用利用	森林材の選択的利用		
近代	1603		都市の拡大		集落・農地の新田の開発		建築用材の植林		山野の農用利用	森林材の選択的利用	
		大正時代	都市の拡大		集落・農地の新田の開発		建築用材の植林		山野の農用利用	森林材の選択的利用	
		明治時代	都市の拡大		集落・農地の新田の開発		建築用材の植林		山野の農用利用	森林材の選択的利用	
		江戸時代	都市の拡大		集落・農地の新田の開発	建築用材の伐採	建築用材の植林	山野の農用利用		森林材の選択的利用	
近代以前		戦国～鎌倉時代	都市の分散化		集落・農地の荘園の開発		建築用材の伐採	山野の農用利用	森林材の選択的利用		
		奈良～平安時代	都市の成立		集落・農地の荘園の開発		建造物・産業利用のための伐採	森林材の選択的利用			
		古墳時代	集落の成立	稲作	古墳造成による大規模伐採		森林材の選択的利用				
		弥生時代	稲作	森林材の選択的利用							
		縄文時代	森林材の選択的利用								

図 1- 2 里山の土地利用変遷

1-2. 里山の空間構成と空間認識

1-2-1. 里山の空間構成モデル

宮家は「日本の民俗宗教」において、農村の原風景を空間構成モデルとして示している（図1-3左）。宮家によると、原風景は基本的に聖性を持ち、我々に安らぎを与えるものであるとしている。また、原風景としての日本の集落は、自然の中に超自然的な論理を想定し、人・死者・神霊の居場所である家屋・墓・祠堂を配置することによって、俗なる空間とともに聖なる空間を生み出している。里山の原風景モデルは、この農村の構成モデルを元に作成した。

村落の原風景の構成は、居住領域を中心に里山の空間要素の配列と同順序で並んでいる。里山の土地利用を具体的に示すと、集落のある宅地、水田などの農地、森林・二次林などの林地、その他に分類できる（図1-3右）。なお、林地は生活空間の内にある空間と異界を形成する空間の二種がある。農村の原風景を構成する「ノ」の空間を生活空間の内にある林地に、「ヤマ」「タケ」を異界の林地に読み替えることとする。

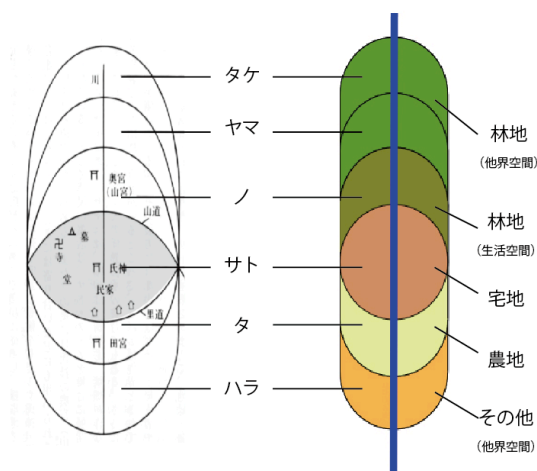


図 1-3 里山の原風景モデルの変換

（左：村落の原風景モデル（日本の民俗宗教より） 右：土地利用を含めた変換後の里山の原風景モデル）

また、里山には、「谷の里山」と「尾根の里山」の二種がある。谷と尾根はそこから視認できる景観の違いはもちろんのこと、そこに流れる水（河川＋水路）の在り方も大きく異なる。具体的には谷には河川が流れ、尾根には河川から引き込んだ水路を流れている。よって、里山の空間構成モデルは谷と尾根の2種を示すこととする。なお、空間構成の考察にあたっては、集落単体だけでなく、隣接する集落とあわせた複合的な空間構成モデルを作成する。

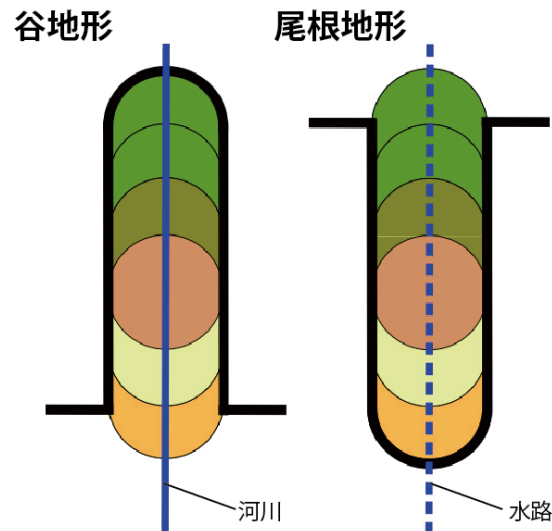


図 1- 4 里山の空間構成モデル（左：谷地形 右：尾根地形）

1-2-2.里山の空間認識モデル

里山の空間認識であるが、認識の主体は里山の居住者（＝集落の人々）とする。居住者にとって、どのような空間要素を中心に据え、その中心にどのような空間を縁辺に意識していたのかを空間認識モデルとして示す。宇杉和夫の「日本の空間認識と景観構成」では、空間の認識においては、1.中心が設定され、2.そこから同心円的に広がる周縁領域があり、3 中心から周縁に向けて波打つ波動があるとされる。以下では中心、周縁、波動の3つの概念について改めてまとめる。

a. ‘中心’ ‘中心’とは、価値の根源としての存在・場所として人間が認めるものである。中心は宇宙軸（宇宙や神や他の見えない存在）とも関連しており、前近代までの山や海に中心をみなしていた時代では、中心を宇宙軸が垂直に貫いていた。

b. ‘周縁’

中心の外側に広がる領域のことである。前近代の山と海が中心であった時代においては、周縁は山と海の間にあり、生活空間がここで営まれていた。中心の対概念であるが、‘中心’と‘周縁’との合間には、一般に階層的・段階的秩序を持ち、同心円の円環的な特性を持つ。

c. ‘波動’の意味

‘波動’は‘中心’から‘周縁’に向って広がってくることを指す。

先に示したように周縁は階層的・段階的な秩序を持つが、その中心から周縁へと向う同心円的構成の動きが波動である。図 1-5 が里山の同心円状の空間認識モデルを示している。左図は宇杉の「日本の空間認識と景観形成」で用いられているモデルだが、‘周縁’と‘波動’の表示が曖昧である。そこで本研究では、独自で作成した右図を空間認識モデルとして用いる。右図では、‘中心’から発せられる同心円状の動きが‘波動’で、右図のベクトルは‘波動’が同心円状に動く様を加筆している。また、‘波動’によって階層的に作られた領域を‘周縁’とする

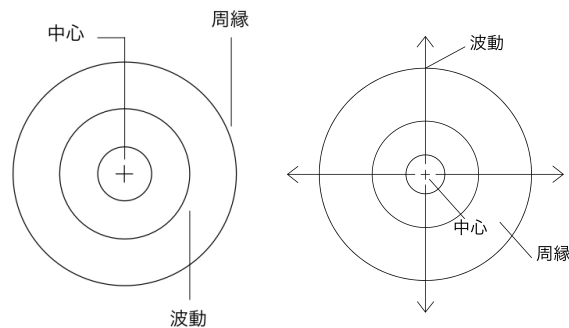


図 1-5 里山の空間認識モデル

空間認識は、‘中心’をどこに据えていたかが重要である。‘中心’には、‘自然中心’‘家中心’の二つの位置付けが考えられる。

① ‘自然中心’・・・全体を包んでいる自然に中心を認める。

家や人間は地域の事象は、‘自然を中心とする’空間内にある。

日本の近代以前にはこの自然に中心を認める心性があった。

② ‘家中心’・・・‘家’の中に、宇宙につながる中心を認める。

‘人間中心’の反映である、と捉えることができる。

人間—家—都市—地域—世界の階層的空間構造となる。近代以後はこの構造を持ち、現代においては家が中心ではあるもののそこに宇宙軸は存在せず、周辺環境も無縁の領域と化す。

里山の空間認識は上記に従い、自然中心の認識から家中心の認識へ、さらには家中心で周辺が無縁と化す3つの認識モデルで示される（図 1-6）。

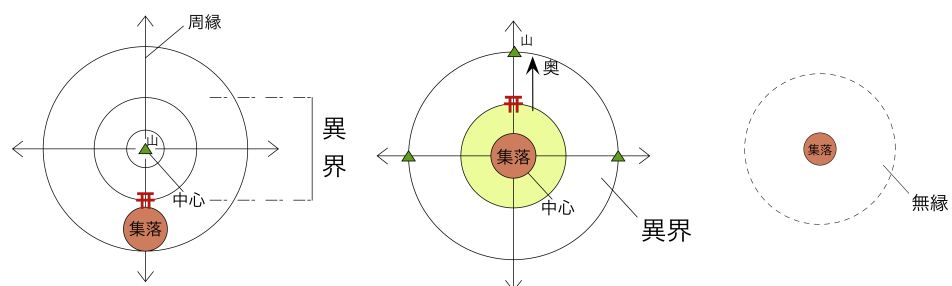


図 1- 6 同心円状の空間認識モデル（左：近代以前、中央：近代、右：現代）

1-3. 里山の空間構成と空間認識

1-3-1.近代以前の里山の空間構成と空間認識

宇杉は、日本古来では神聖な対象とされる、‘山’と‘海’を結ぶ‘山と海の空間軸’を基本としている。そのなかで里山は、山を自然の中心としていた。‘中心’としての山は人々が恐れ敬う異界であり、異界が中心であることが特徴として挙げられる。‘中心’から‘波動’が発せられ、‘中心’の影響をもつ‘周縁’の中に集落があるという認識である。人々の生活空間は、曖昧ながらも‘周縁’の中に設定され、山の影響をもつ‘周縁’が生活空間の全体をなし、中心に寄り添っていた。空間構成モデルと空間認識モデルを重ね合わせると以下のように図解される。

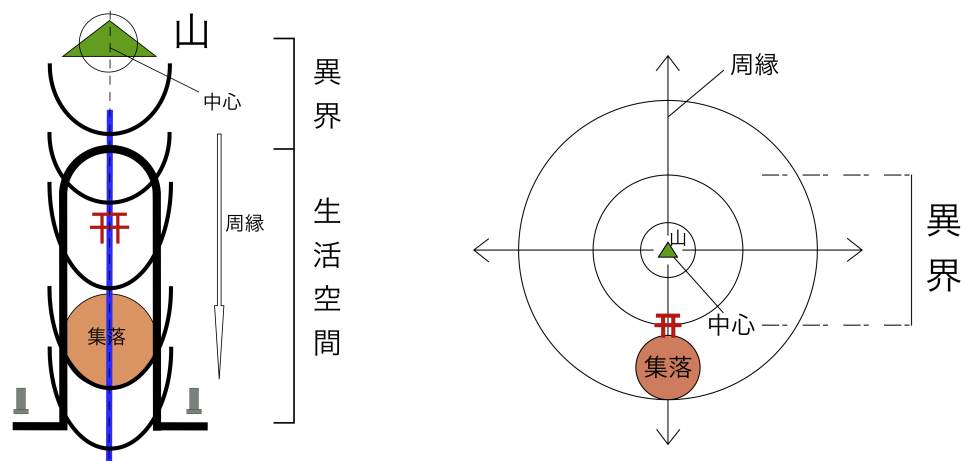


図 1-7 近代以前の里山の空間認識モデル

(左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図)

1-3-2.近代の里山の空間構成と空間認識

近代の里山は‘中心’を‘自然中心’から‘家中心’に移す。すなわち、‘中心のある空間’を人々の生活の拠点である集落に設定した。集落という‘中心’から発せられる‘波動’が広がり、‘周縁’の空間を発生させる。その‘周縁’の及ぶ範囲を生活空間としている。近代以前に‘中心’としていた山は、異界でありながら、生活空間が果てるその‘奥’という位置づけに変転する。空間構成モデルと空間認識モデルを重ね合わせると以下のように図解される。

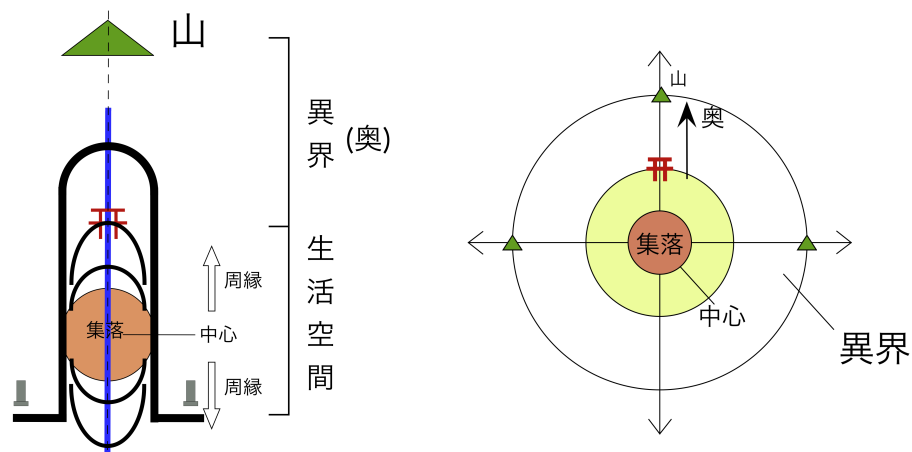


図 1- 8 近代の里山の空間認識モデル

(左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図)

1-3-3.現代の里山の空間構成と空間認識

集落を‘中心’とする生活空間の概念は継承されつつも、居住者の生業が生活空間の範囲外（土地と結びつかない生業）となったために、認識される生活空間は極端に狭くなる。近代では生活空間と異界との境界に聖地を設定していたが、土地利用の変遷によって聖地との接続が困難となる。このことは、聖地を介して異界の奥深さを認識することが出来ていた近代とは異なり、その先が人々の認識から離れていくことで、集落以外は全て無縁の空間となる。生活空間が極点に狭くなった現代の生活空間は、その土地に寄り添うものがなくなり、人々が地域にいる意味を失い、結果として集落から離れて暮らすことを誘導してしまう。

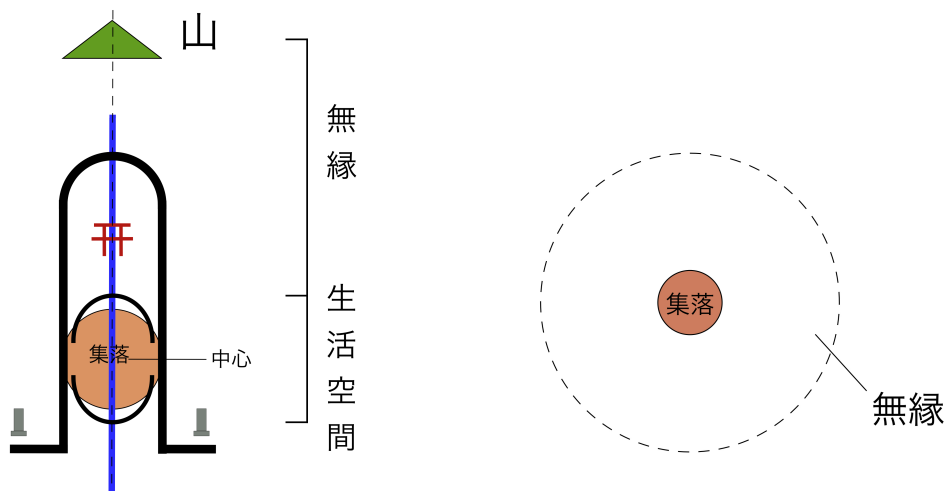


図 1- 9 現代の里山の空間認識モデル

(左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図)

第 2 章 佐岡地区の概要

2-1. 佐岡地区

2-1-1. 地理的環境

佐岡地区（旧佐岡村）（133.7183,33.6392）は、香美市土佐山田町東部物部川の西側、北岸に位置し、佐野、大平、本村、中後入、西後入、大後入、有谷、佐竹の8つの大字からなる。

佐岡地区の東南側端を流れる物部川は、高知県香美市の白髪山（標高 1,770m）を水源とする河川であり、山間部を仏像構造線に従い西に流れたあと佐岡地区付近から南に進路を変えて太平洋へと注ぐ一級河川である。佐岡地区には物部川の支流が幾つか流れている。本村から中後入、西後入を経由して大後入に至る後入川、有谷から中後入中ノ谷にかけて流れるテンヤ川、有谷の中心を主に流れる有谷川、佐竹地区の東端を流れる天王川（白川）、本村と佐野の境目を流れる仁井田川、大平の中心地から佐野へと流れる紺屋川、嶋田川の二本の河川がある。

土地条件図によると佐岡地区の区分は、山地、丘陵または台地の縁などの斜面地（山地斜面等）、約1万年前より古い時代に形成された段丘・台地（更新世段丘）、台地・段丘や扇状地などの表面に形成された浅い流路跡や浸食谷（凹地・浅い谷）、河川流量の低下によって陸化した平坦地（*河岸平野）の大きく四つに分けられる。

佐岡地区の中後入・有谷・大後入・佐竹・西後入の土地利用条件面積は山地斜面が領域のほとんどを占めている。中後入・大後入・西後入は後入川によって形成された急峻なV字谷を中心に、後入川から更に分岐する支流によって形成されたV字谷が後入川に垂直に組まれた地形が特徴となっている。また、V字谷を形成する河川の一部はあるまとまった面積を有する凹地となっており、畑地や水田、集落が形成されていることが特筆される。

佐岡地区の本村・佐野の土地利用条件面積は更新世台地による平らな地形がまとまって形成されている。このような土地条件は水野確保が難しく、特に佐野は水の確保が困難であるため多くのため池を有している。

佐岡地区の大平は紺屋川によって形成されていた河岸平野は水田として利用され、支流によって形成された凹地には集落が集まっている。

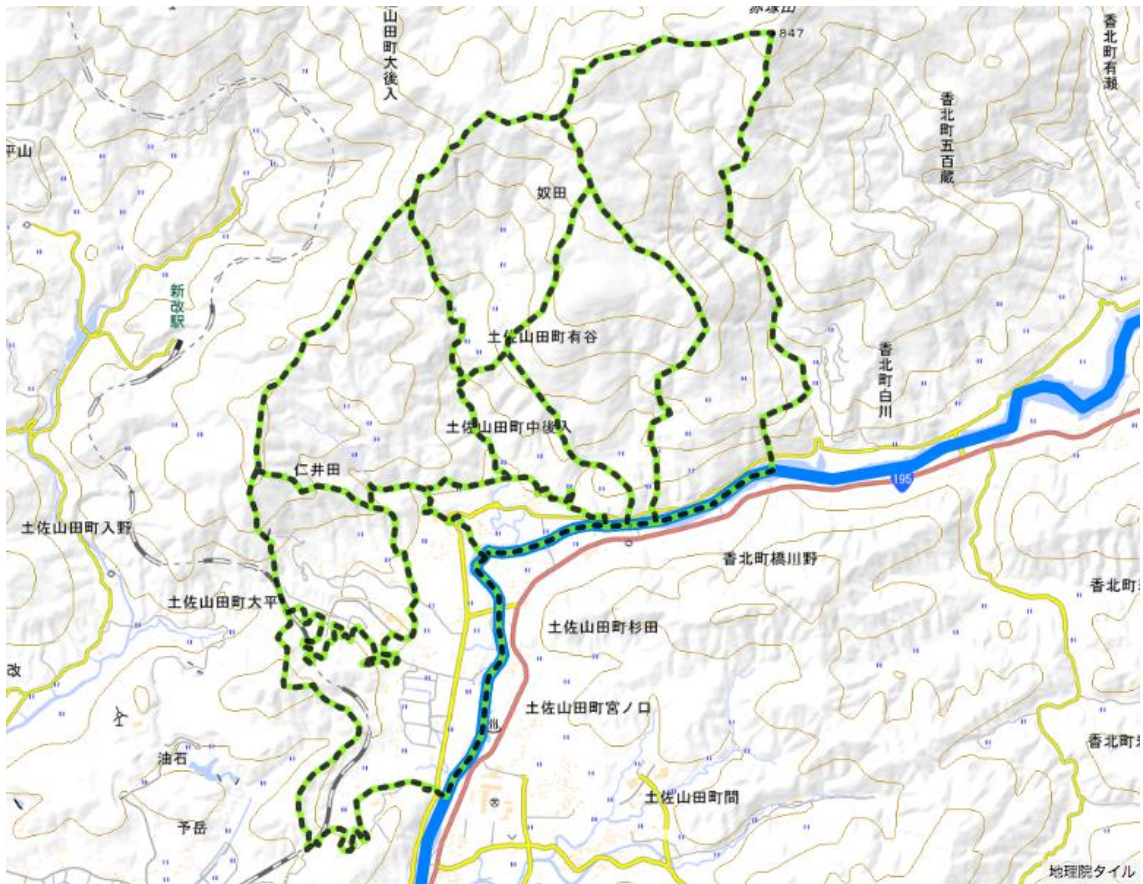


図 2- 1 佐岡地区大字図

2-1-2.佐岡地区の歴史

佐岡地区は、元々多数の村落に別れていたが、廃藩置県により各村落を合併して佐岡村と称する。昭和 29 年に町村合併により土佐山田町に合併する。更に、平成 18 年（2006）には土佐山田町が香美郡香北町・物部村と新規合併し市制を施行し、香美市となった。

佐岡地区の成り立ちは日当りの良い物部川沿いの平坦地佐野、本村が早くに開け、次第に大平、後入、有谷、佐竹方面に開発が進んでいったことは、元禄の地検帳に記されている。また、明治 7 年調査の大後入、日吉神社（山王権現）に文治 2 年（1186 年）の棟札が存在したという記録があり、また、平氏の落人と伝えられる門脇姓が同地方には多いことなどから、山の手地区にも一部は相当早くから開拓されていたものと思われる。

地名の起りは、南の半坂山（133.7105,33.6191）を北に向かって超えるとき、物部川は右に、連なる丘陵は左に望まれる故に佐岡の地名が生まれたとも伝えられている。また、後入の地名は入植の遅れたことを示すとも、平坦地から奥（後方）へ入りこんでいるからだとも考えられている。

平成 11 年には佐岡の自然の恵みを活用し、木材の研究施設として高知県森林総合センター（133.7127,33.6320）が大平に置かれている。また、山間の佐竹、大後入からは太平洋や平野部の美しい夜景を展望することができる場所もある。旧佐岡小学校（133.7183,33.6385）で行われている夏恒例の佐岡祭りは、地域住民、特に子供たちの楽しみ、思い出の場となっている。

1960 年代頃から地区内は過疎化、高齢化が本格的に進行し、中山間地域では休耕田が多くなっており、更に国策である「林業基本法」（1964 年）の策定による大規模な針葉樹林の植樹がきっかけとなり、特に生産性の無い畑地や水田は杉林、ヒノキ林に置き換えられた。その結果、現在の耕地面積は 1945 年当時より大幅に減少している。

2-2. 中後入

2-2-1. 中後入の概要

中後入は、佐岡地区の中央部に位置する中山間地域である。東側は有谷川による谷地形を有している。また、西端に後入川が流れており、そこから数本の支流によって V 字谷が形成されている。北から西ノ谷、中ノ谷、東ノ谷の三つの集落に別れている。

室町時代には、中後入村・大屋敷村・河内（川内）村・遅越村などがあった。大屋敷村を除く三ヶ村には、土居・名本屋敷があり名手が居住していた。その関係で現在も集落に氏神（村社）が存在している。また、明治時代の西ノ谷の集落は氏子が 9 戸存在していたとされていたとされ、実質中後入の中心的な役割を担っていた。



図 2-2 中後入境界図

2-2-2.里山としての中後入

かつて、農地は水田による稲作や柑橘系の栽培、蚕の養殖と飼育に必要な桑の栽培を主な生業としていた。河川のない地域でも山地で生殖していた樫や椎などの広葉樹を燃料として伐採しては植樹するサイクルが機能していた。伐採した樫や椎は山麓に点在する炭窯で木炭に変えていた。集落からこのように、炭窯は山地の生業の拠点として機能していたと見られている。

現在は、一部の農地で自家用の畑作が行われている以外に農地が使用されることはない。また、使用されなくなった農地の大部分が 1960 年~1970 年代にかけてスギ林に置き換えられている。昔から林地とされていた場所は、現在でも広葉樹が残っているが、すでに生業として椎や樫が使用されることはなく、そのまま管理されず放置されている。

2-2-3.中後入の聖地

現存する氏神

須賀神社 村社 牛頭天王 (133.7236,33.6409)

須賀神社は中の谷・東の谷に属する人々が氏子としており祇園牛頭天王を祀っている。神仏習合の時代には、本地佛（寺では本尊）は薬師如来で、旅に出るときには参拝して出発していた。鳥居は木造で京都市八坂神社の様式を留めており、境内には樹齢数百年、目通り廻り 3m くらいの『一位檜』がある。



図 2- 3 須賀神社

金峯神社 村社 座王権現 (133.7186,33.6470)

金峯神社は西の谷の人々が氏子としており、江戸末期に現在の地に遷宮した。神仏習合時代は座王権現宮と名乗り、奈良県吉野郡吉野町鎮座の金峯神社より勧請したと思われる。鳥居はコンクリート造であり、幣も独特の切型で、山嶽信仰の名残が受け継がれている。



図 2- 4 金峯神社

2-3. 有谷

2-3-1.有谷の概要

有谷は、スズハラとオドリバによって形成された尾根地形の集落、ムカイによって形成された谷集落、離れた場所にイチドウ、ヌタという集落に分かれている。

室町時代には、有谷村・秋友村・一同村が在ったことが確認されている。

明治時代から有谷の中心のスズハラは、現在も有谷公民館を有している。現在、イチドウとヌタは廃集落となっている。

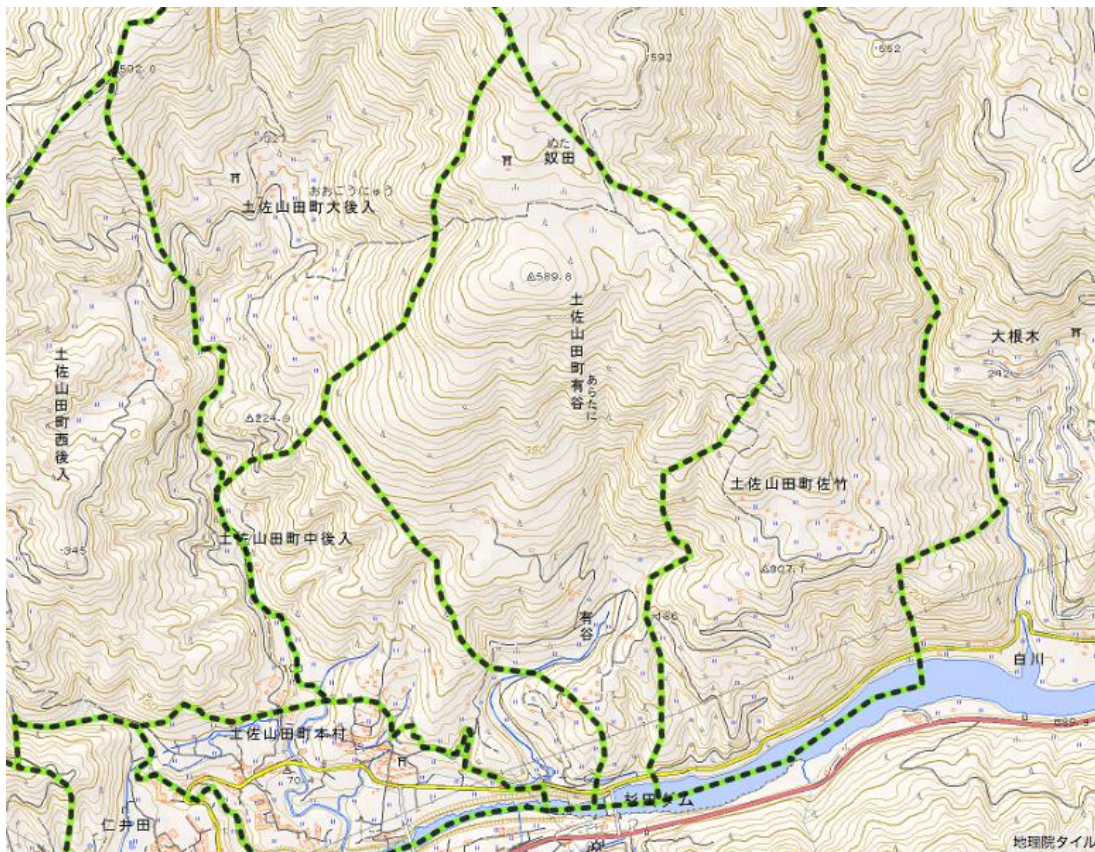


図 2- 5 有谷境界図

2-3-2.里山としての有谷

かつて、ムカイ・スズハラ・オドリバ・イチドウ・ヌタの人々は、江戸時代に棚田を造成し、稲作を生業としていた。その水田の規模は中後入に比べて広大で、ヌタの水田は、人工に比べて耕地面積が広く、年に数回有谷の他地域からの応援があったとされている。対して、林地での産業はイチドウ、ヌタの一部を除いて行われていない。

現在は、かつてからは耕作面積が削減されたが、ムカイ、スズハラ、オドリバなどの有谷川の水系に属している地域は水田として現在も利用されている地域が多い。しかし、イチドウとヌタは集落に人が居なくなったことからそもそも農業する人が居なくなり、ほとんどの農地が失われている。ヌタ周辺は、1960 年~1970 年代にかけてスギ林に置き換えられていく。そのため、林地の生業が針葉樹を住宅用健在に利用するなどの林業と変貌を遂げている。

2-3-3.有谷の聖地

竈戸神社 村社 八面荒神 (133.7322,33.6453)

竈戸神社は有谷村に属する集落の人々が氏子としており、神仏習合の時代には八面荒神宮と名乗り、竈の神の荒神信仰に、仏教・修験道の三宝荒神信仰が結びついたものである。

秋友村には、王子権現（秋友氏の氏神）が在ったとされている。



図 2- 6 竈戸神社

聖神社 村社 比尻権現 (133.7269,33.6454)

聖神社は一同村に属する人々が氏子としており、寺院（現阿弥陀堂）の鎮守神として現在地に並んで建って居たとされている。神仏習合の時代には比叡権現と名乗り、中世に『聖』が高野山から高野聖が来住し開山したとされる説が在るが定かではない。



図 2- 7 聖神社

（日吉神社 村社 山王権現）（133,7261,33.6561）

日吉神社には奴田に属する人々が氏子としており、天和（1681～1683）年頃白川村の天王川上流から用水路を開通し水田化して居住し 1710 年以後に、大後入の日吉神社より勧請して現在地に祀ったとされている。日吉神社は総本山を滋賀県大津市坂本の日吉大社とする、比叡山の山岳信仰と神道・天台宗が習合した神仏習合の神を祀っている。



図 2- 8 日吉神社跡

第 3 章 佐岡地区の空間と変遷

3-1-1.地形の構成

佐岡地区は物部川から 20m ほどの崖の上に台地を形成している。標高 70~90m 辺までがこの地形に該当する。特に、本村と佐野の 2 大字は域内のほとんどをこの地形が占めている。また、物部川は急峻な崖の下にあるため、台地の上からは水面を見ることが出来ない。

41

3-1-2.街路と水路の体系

佐岡地区全体の骨格を担っているのは、県道 218 号線である。かつては山田往還と称し、古くから山田と物部との間の陸の交通路として利用された物部川流域の最主要交通路であった。現在の佐岡地区の各集落へ接続する主要街路は、全て県道 218 号線から伸びている。しかし、車社会となった現在は、物部川流域の最主要交通路は対岸の国道 195 号線に譲っている。国道 195 号線のある対岸と佐岡地区は 2 本の橋で接続している。

佐岡地区の東南側端を流れる物部川は、高知県香美市の白髪山（標高 1,770m）を水源とする河川であり、山間部を仏像構造線に従い西に流れたあと佐岡地区付近から南に進路を変えて太平洋へと注ぐ全長 71km の一級河川である。流域面積は 508km² に及ぶ。進路を変える付近は古くから仁井田巻と呼ばれるほど、付近の物部川の流速があることが知られている。物部川は佐岡地区の最も低い集落の更に 20m ほど崖下を流れており、昔は河川のから流れてくる水を生業に利用することが出来なかった。

佐岡地区には物部川に流れている数本の河川が接続し、佐岡地区の生業に利用する水源は、これらの河川から取水していたと言われている。白川はかつて天王川、目木川とも呼ばれ、佐竹の山間を水源とし、佐竹の東の字界を南に流れ、旧香北町白川で合流する全長 3.8km の河川である。有谷川は、かつて稲葉川と呼ばれ、有谷中部の山間部を水源とし有谷を南に流れ、中後入東部を経由し合流する全長 1.7km の河川である。有谷川は途中で広大な谷を形成しており、付近に 4 つの集落を有している。後入川は、大後入北部を水源とし、屈曲しながら南に流れ、西後入・中後入・本村を経由し合流する全長 3.8km の河川である。後入川はテンヤ川と呼ばれる河川を有している。仁井田川は、西後入西部を水源とし東西方向に流れ、佐野と本村の間を経由し合流する全長 2.1km の河川である。物部川との合流点は仁井田巻となっている。紺屋川は、大平の集落の奥を水源とし、東南方向に流れ佐野で合流する全長 2.4km の河川である。嶋田川は大平の集落の西側を水源とし、佐野の南側を経由し合流する全長 2.4km の河川である。嶋田川は途中で佐野の南から北東方向に向かって流れてくる馬流川と合流する。

佐岡地区の水路網の特徴として、各大字が属する河川から取水することで、多数の小さな水路網が築かれていることが挙げられる。その特徴と異にする杉田改良区は、杉田ダムから取水しており、台地形の田畑を中心に水を供給している。さらに、佐野ではため池が多数分布し、台地形の水を得られにくい土地の特徴を示している。

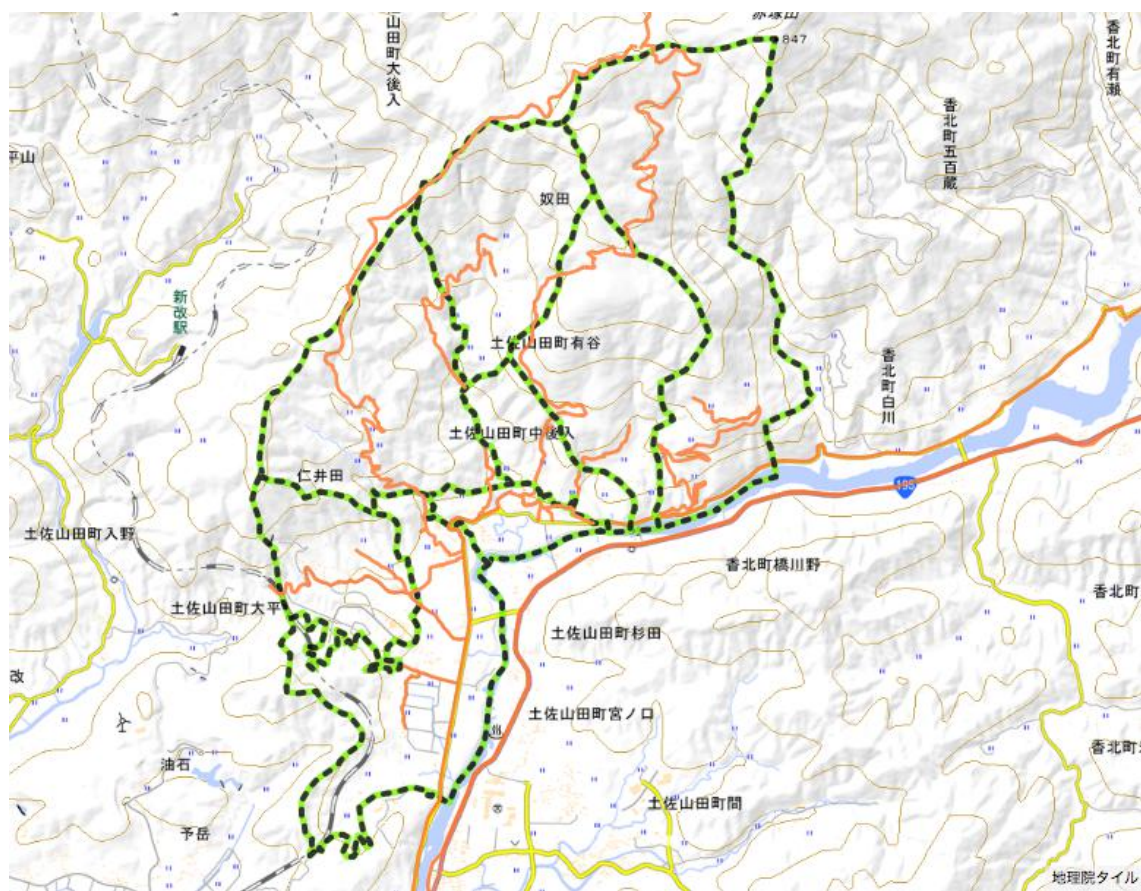
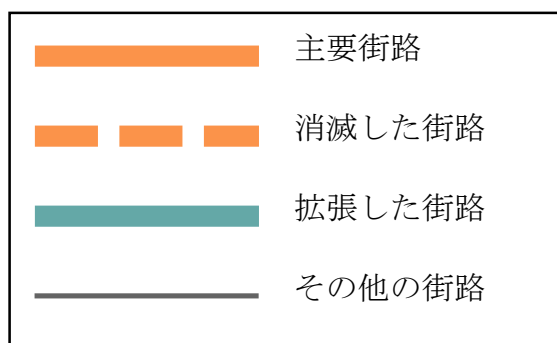


図 3-2 1910 年当時の佐岡地区街路図



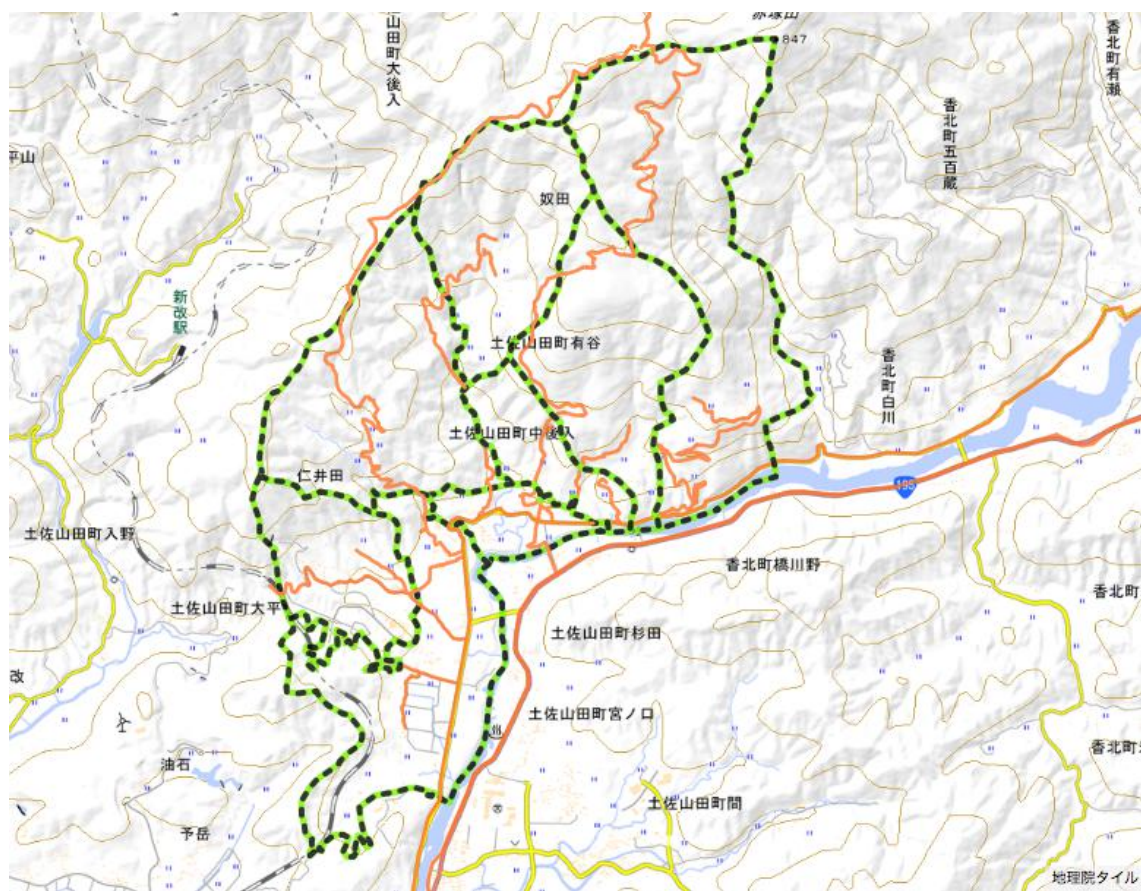
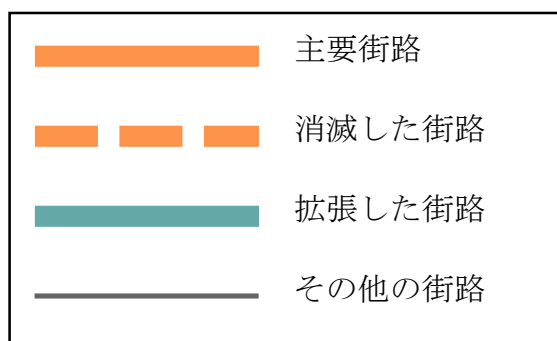


図 3- 3 1945 年当時の佐岡地区街路図



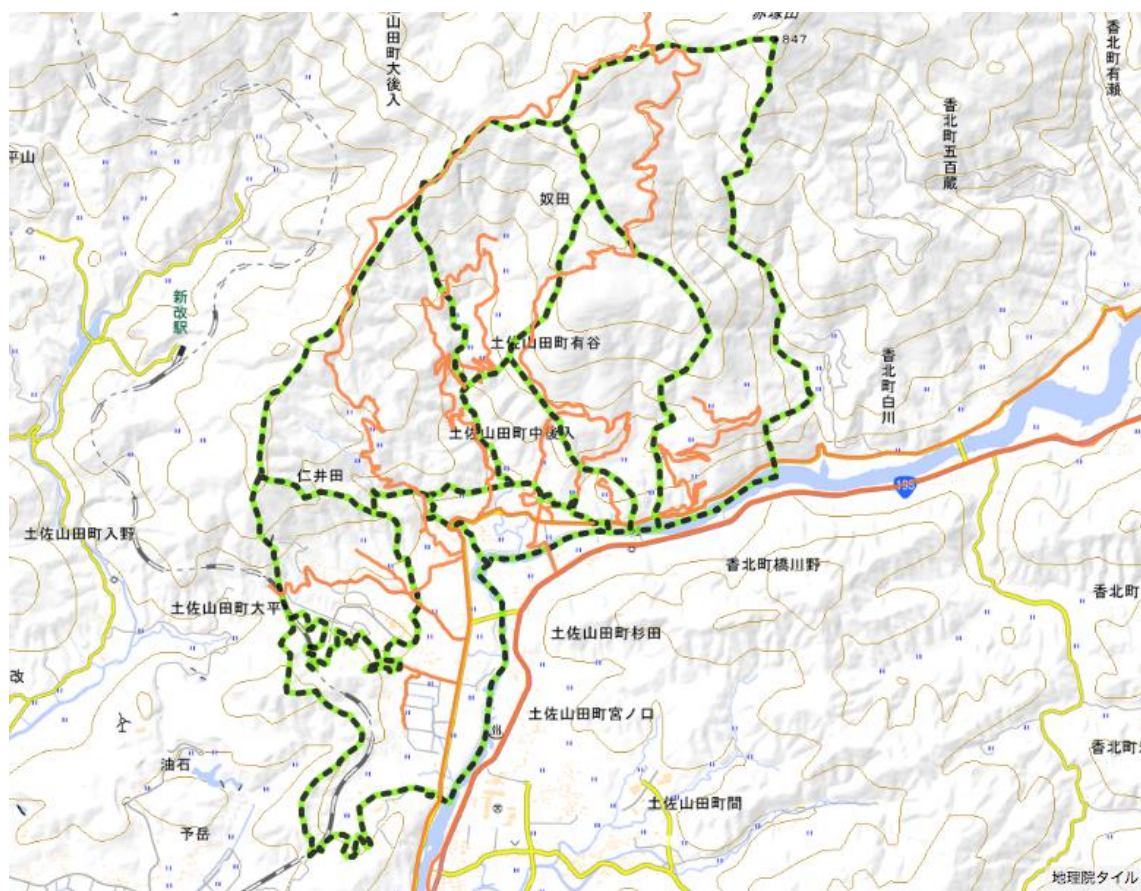
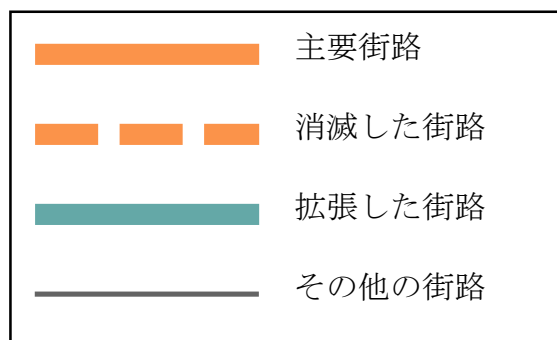


図 3- 4 1970 年当時の佐岡地区街路図



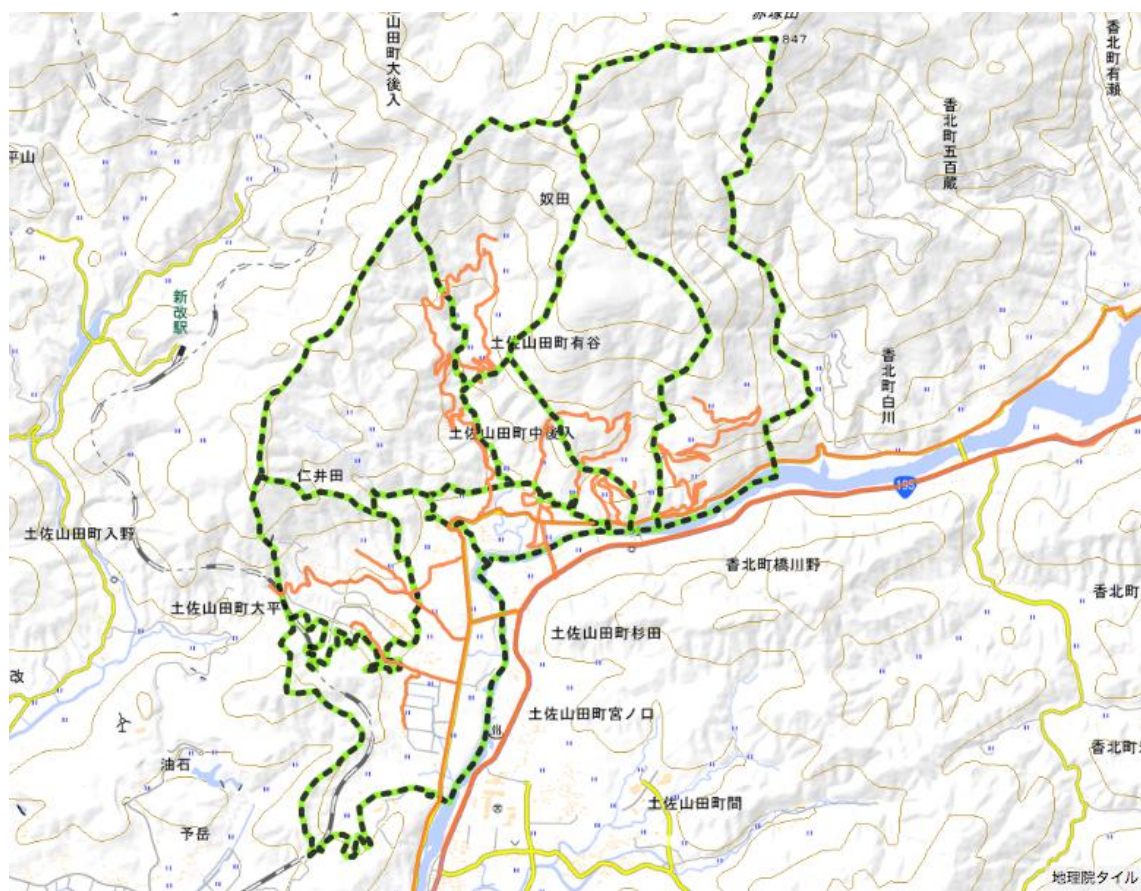
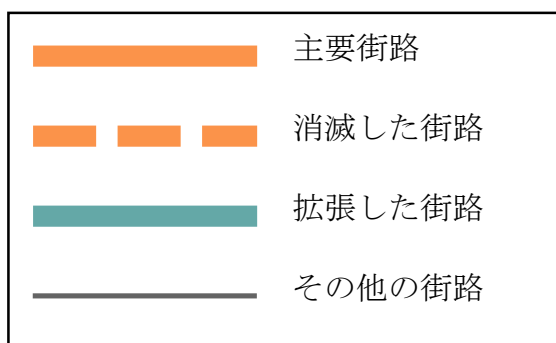


図 3- 5 2016 年現在の佐岡地区街路図



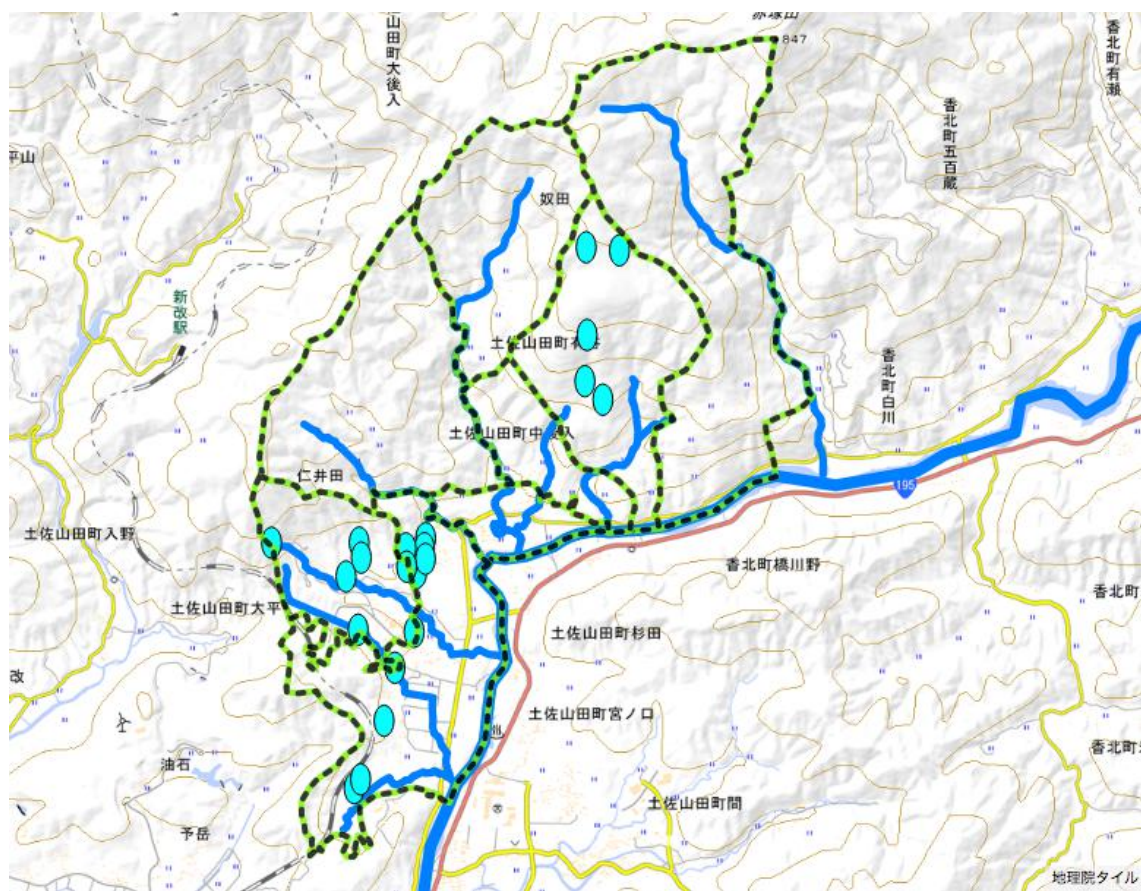
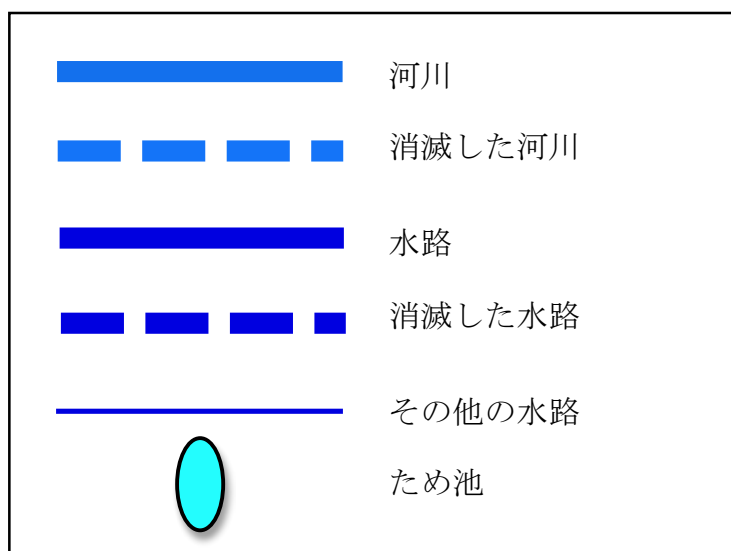


図 3- 6 佐岡地区の河川図



3-1-3.土地利用の分布

現在の佐岡地区は、台地形を有する大字の集落では、県道沿いや、山岳地形と台地形の間に集落の分布が多い。県道沿いの集落は、街道に面して商業に有効であり、山岳地形と大地主の間の集落は地下水を得られやすい。山岳地形の集落は、尾根と谷の二つの地形で形成される集落に分かれるが、どちらも急峻な地形の中、数少ない平地に集まることが多い。

山間部の集落は台地形の土地は田畑に利用されている。かつては、台地形は河川が地面よりも下を流れているため、水が得られなかった。そのため、佐野のような台地形で、かつ広大な農地を有している場合は、ため池を造成し水不足に対応している。また、かつては水が比較的 unnecessary 大根畑であった。現在は、杉田改良区によって物部川から水を供給しているため、畑から水田へ土地利用が変化している。急峻な山間部の農地は、平地が少ないため、棚田を造成している。

山間部のほとんどが林地となっており、現在はほとんど管理されていない。天然林はほとんどなく、古い樹木は江戸時代中期から後期にかけて植林された二次林である。このような植樹に由来する樹木はシイ、カシなどの広葉樹が多く、薪炭用の材料として使用しては植林を繰り返していた。昭和中期になると、建材用などに用いるためのスギ、ヒノキの植林が加速する。人口減少もあって、古い二次林および新しい針葉樹林で構成される林地はほとんど管理されず放置されていることが多い。

3-1-4.聖地の分布

佐岡地区の神社は、佐岡町村史によると、1870 年に制定された政府大教宣布の詔による社格より、高い方から順に、郷社、村社、無格社の 3 分類に分けられる聖地が存在している。郷社は府県社に次ぐ郷邑の産土神で、一地方にわたって崇敬される中心的神社のことを指している。旧佐岡村の中心となる郷社の星神社は、佐岡地区の中でも最も規模が大きく、佐岡地区の地鎮守とされていた。また、村社は郷社の一つ下の社格であり、各集落の氏神として鎮座し、共有の宇宙と祀っていた。また、無格社は村社の更に下で、ただ神饌幣帛料が供進されることや境内地の地租免除の特典はない神社のことである。

更に八幡宮などの、土地神とは異なる本社に属した小社を摂社・末社と呼び、戦前の旧官国弊社においては、摂社は末社の上位とされている。図 3-7 は、佐岡地区の聖地を示した図である。上記の聖地の中で、村社までを記している。

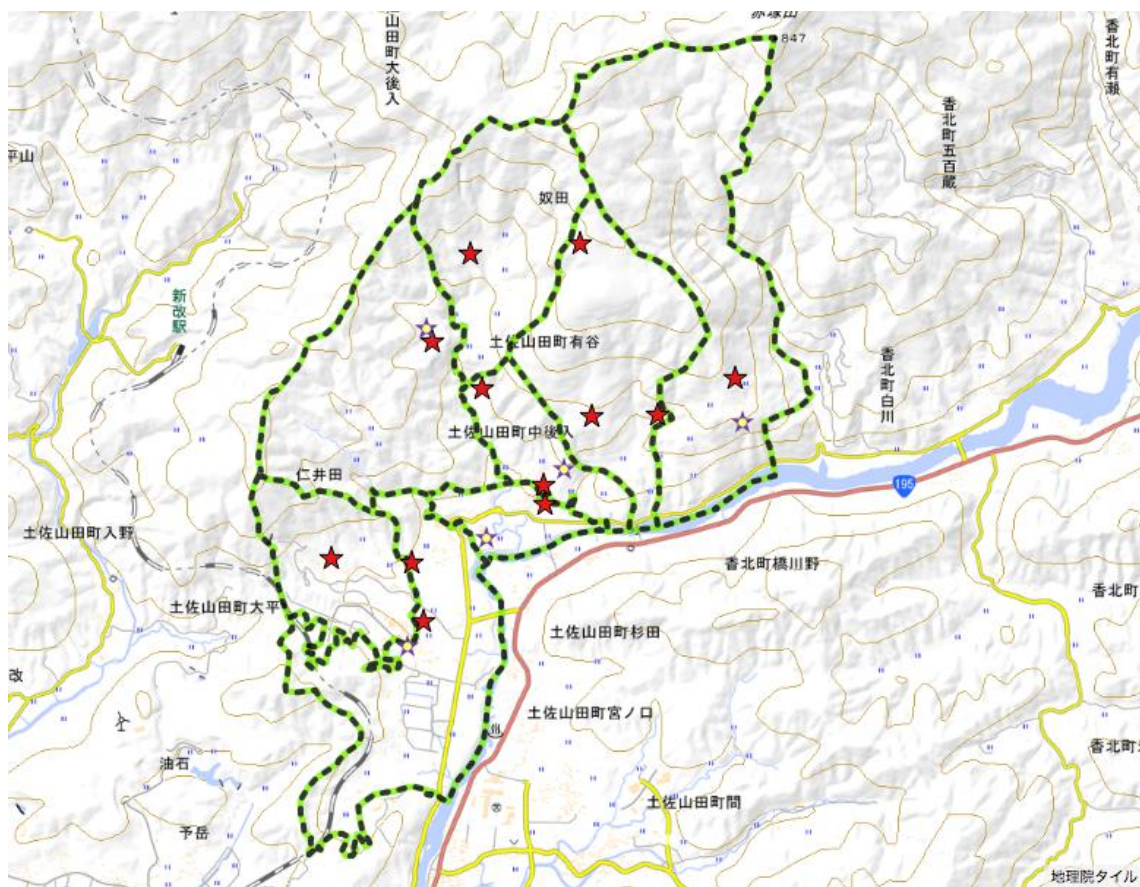
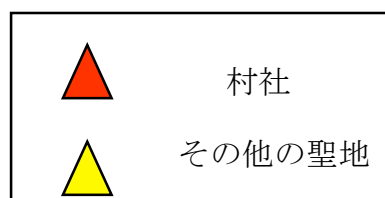


図 3- 7 佐岡地区の聖地分布図



3-2. 佐岡地区の変遷

3-2-1. 1910 年当時の佐岡地区

県道 218 号線が物部川に沿って流れている。当時は山田往還（菰生往還ともいう）と呼ばれていたこの道路は、まだ国道 195 号線が物部川に橋が開通していなかったため、物部川流域の物資は佐岡地区を行き来していた。佐岡地区の交通は主に、山田往還から各大字へ街路が伸びている。特に中後入・有谷を経由して北部の西又村（現在の土佐山田町西又地区）へ至る西又道、佐野仁井田から大平を経て大法寺村（現在の土佐山田町大法寺地区）へと至る大法寺道は、佐岡地区と外の地区への交通の役割を果たしていた。また、佐岡地区と物部川を挟んで対岸の杉田地区は 20m ほどある崖を下り、渡り舟で渡っていた。

また、当時の土地利用は、谷地形では東を広大な桑・カボチャなどの畑と水田を山田往還を隔てて有する佐野、山田往還の両側に広大な水田を有していた本村の違いが見られる。中後入・大後入・西後入・佐竹・有谷・大平の山岳地形の谷尾根双方に広大な水田や桑畑が見られる。また、山岳地形は山地が広がっている。林地は南向きで、比較的緩やかな斜面を有している地形に生えているのは針葉樹、それ以外の急峻な地形に生えているのは広葉樹が多い。当時の施設については、佐岡小学校、佐岡村役場などの村の中心的な機能は本村に集結していた。

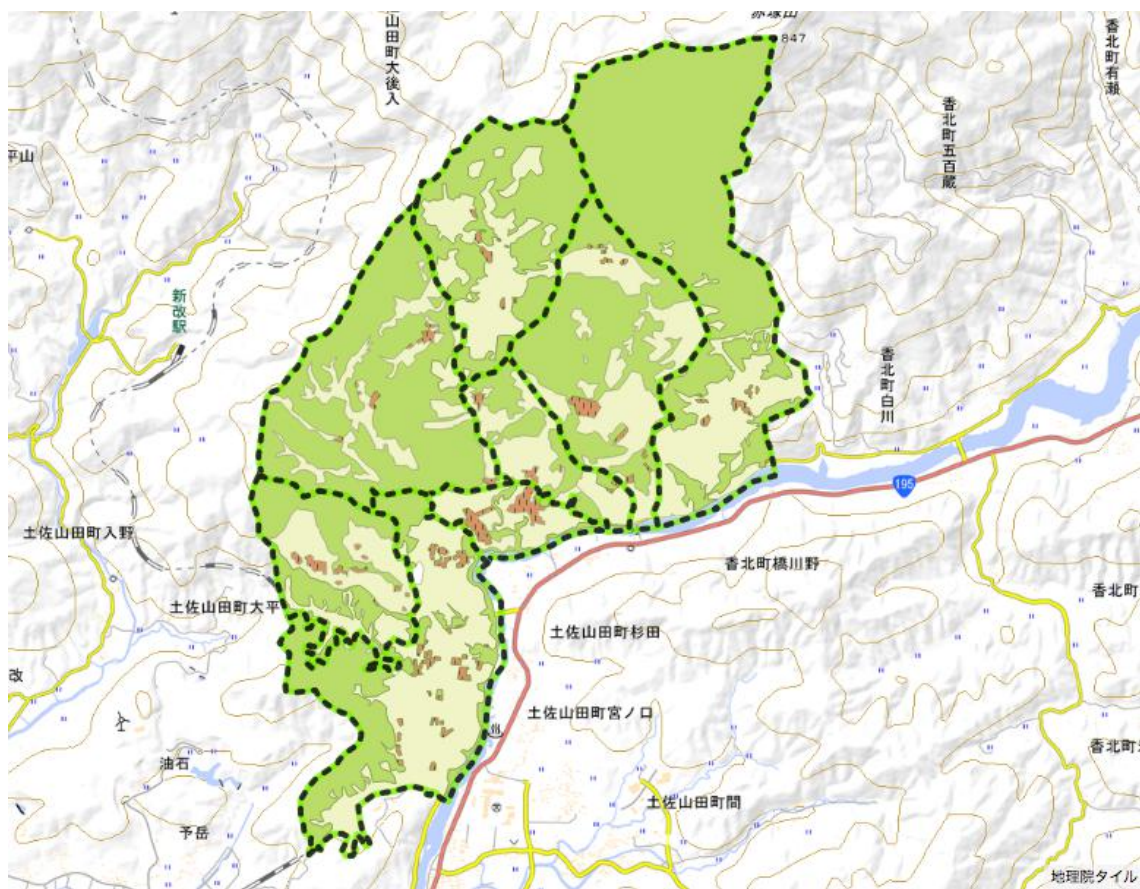
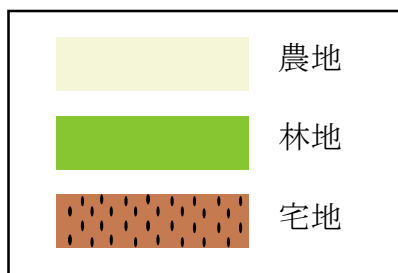


図 3- 8 1910 年当時の佐岡地区土地利用図



3-2-2.1945 年当時の佐岡地区

山田往還の一部が経路変更となる。1910 年当時は中後入と本村の間を貫いていたが、昭和 8 年には現在の本村南側に面したところに経路変更がなされている。物部川流域の上流では、木材を搬出していたことから、物部川を使って、上流の大栃から佐岡地区の南にある神母ノ木まで、舟で運搬していた。このように物部川流域の物流は舟が一部担うことになる。さらに、舟運によって運ばれる物資および通行人は行きを川で下り、帰りを対岸の国道側から帰っていくため、山田往還の交通量が減少することになる。

当時の土地利用自体に変化はほとんど見られない。この時期までは桑畑が広く栽培されていたが、徐々にその数を減らしていた。戦中は佐岡小学校付近が軍人の駐屯地となり、周辺の邸宅は納屋の一部などを貸していた。また、1945 年は山田や高知市に働き手を求めて人口流出が発生し、地区全体の人口が減少してきつつある時期でもある。

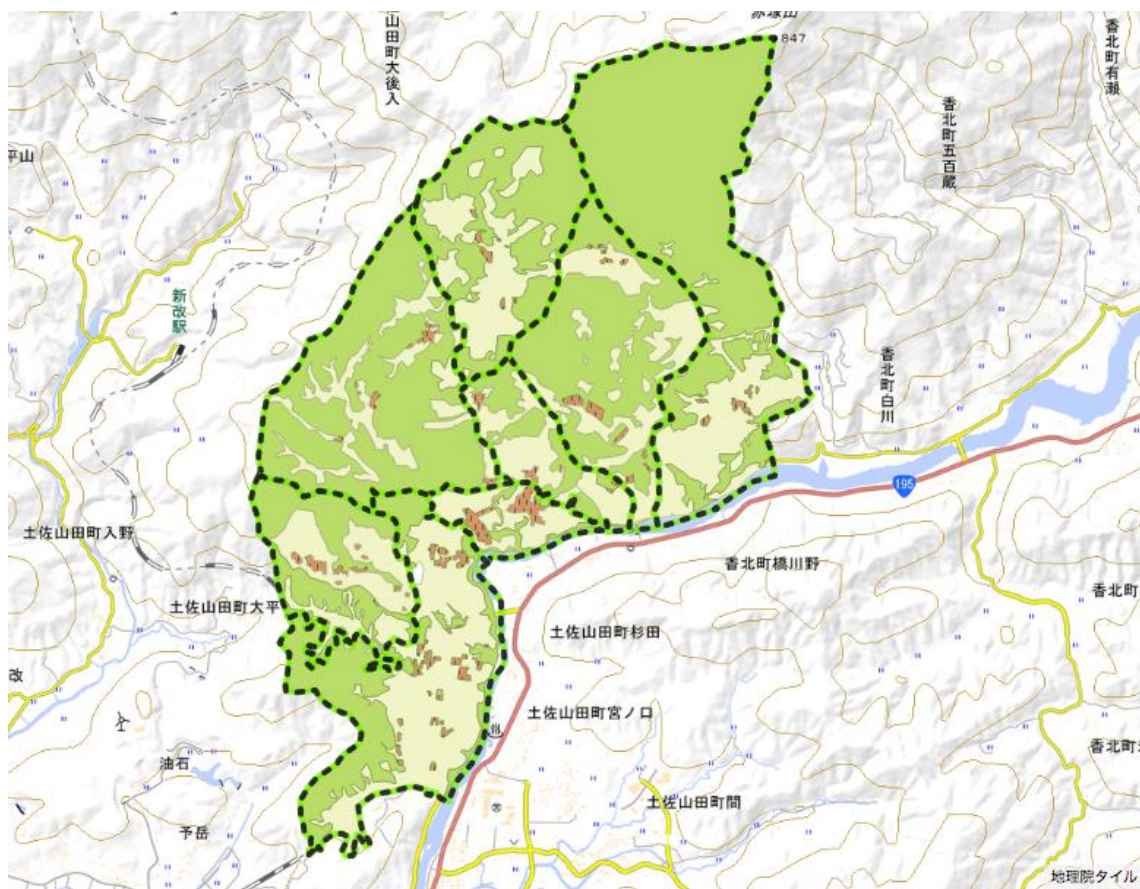
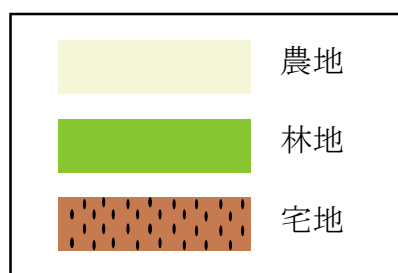


図 3- 9 1945 年当時の佐岡地区土地利用図



3-2-3.1970 年当時の佐岡地区

モータリゼーションの流れが佐岡地区でも影響を受けることになる。今まで渡り舟で連絡していた神母ノ木は橋がかけられたことで陸の物資の流通は本格的に国道側に移行した。谷地形では、既存の道路幅員の拡張がこの時期によく見られていた一方、大後入などの山岳地形では、乗用車の通行に合わせた新規街路の建設がよく見られた。また、渡り舟で連絡していた物部川対岸の交通は、新規で橋が建設され、人が直接物部川に降りること無く対岸に連絡できるようになる。

杉田ダムが建立されると、新規に杉田改良区が建設される。この水路によって谷地系は水の確保が容易になる。これが、主に水を比較的必要としない畑地から、水を多く使用する水田に変わっていく。かつて、佐岡地区でよく見られていた桑畑は、1970 年代にはほとんど見る事が出来なくなった。その一方、山岳地形の凹地や尾根に形成されていた農地は順々に林地に置き換えられていく。戦後に発生した人口流出によって地区全体の人口は戦後に比べ半分ほどに減少する。それに伴い、宅地面積も減少している。

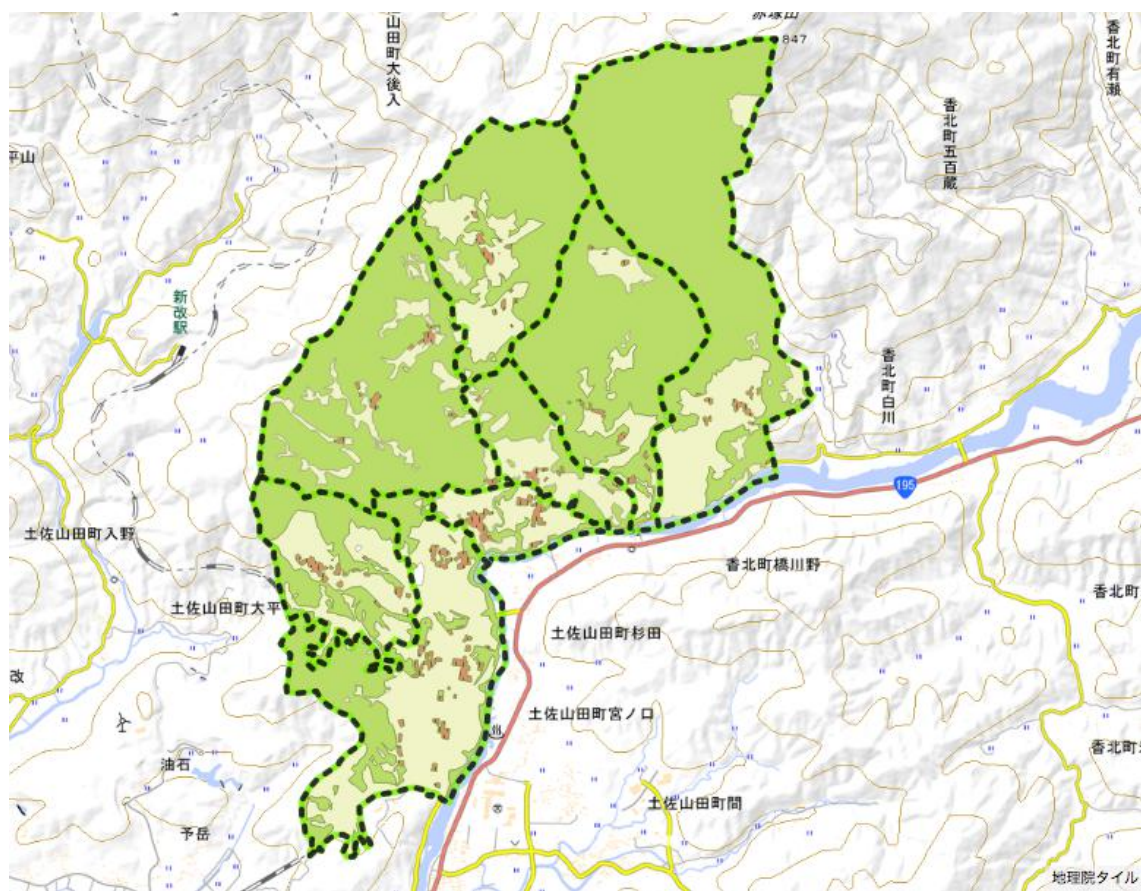
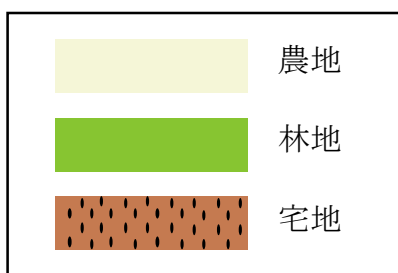


図 3- 10 1970 年当時の佐岡地区土地利用図



3-2-4.1970 年以降の佐岡地区

1970 年あたりに見られた街路を使用する主な対象が、歩行者から乗用車に移行したことで、もともと歩行者のみ通行可能な街路は順次消滅している。また、管理できない小水路も同様に消滅している。佐岡地区を通る県道 218 号線と国道との間に二本の橋が建設され、乗用車で直接佐岡地区に乗り入れることが出来る。

戦後から続く人口減少が 1970 年以降も続き、佐岡地区内の中山間部では集落消滅の例が出てくるようになる。山岳斜面で見られた棚田の景観は、その多くを林地に置き換えられたことでほとんど見られないようになる。さらに、その林地が農地と同様に人口減少によって管理することが困難になり、ほとんどの土地が荒れている。佐岡小学校の廃校のように、人口減少は地区内の施設に大きな変化が見られた。また、大平の南部が森林センターの開設による大規模な開発を受け、植生や施設建設による地形変化のほか、紺屋川の河川改修、調整池の開発など、景観が大きく変化した。

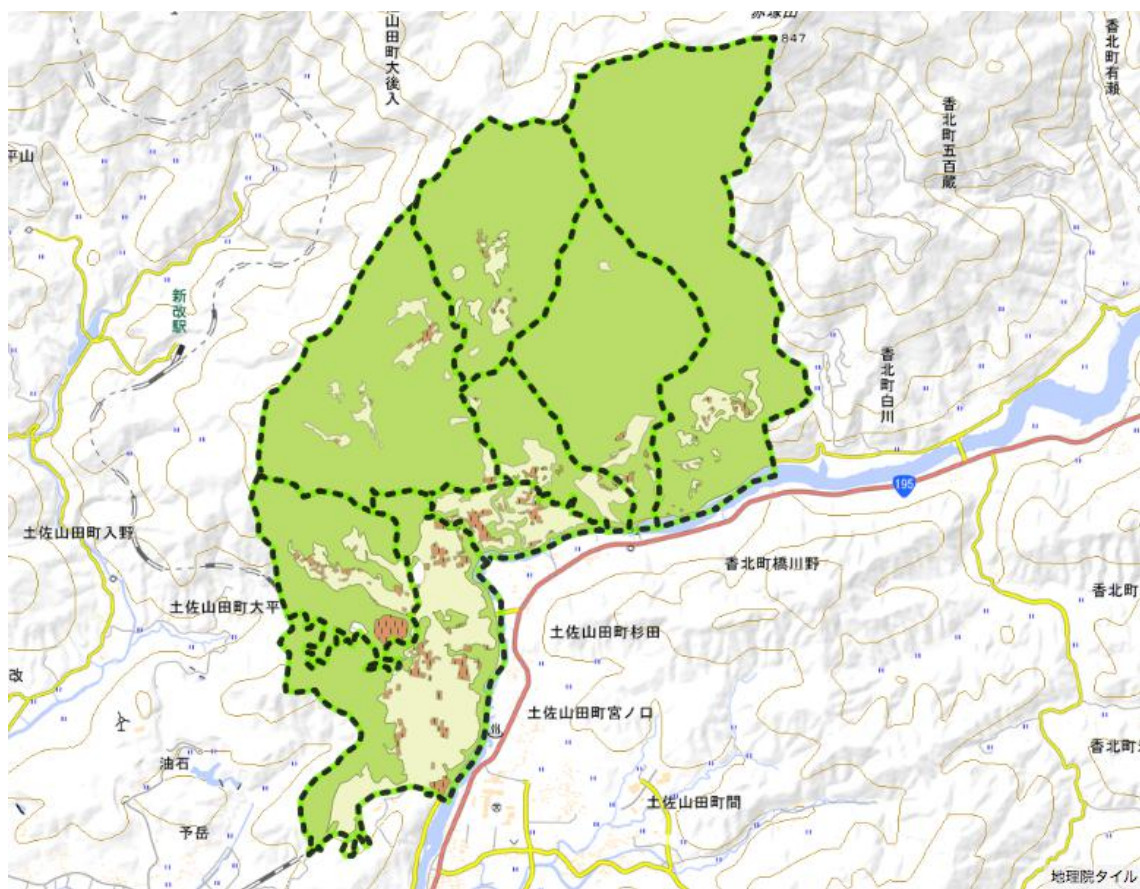
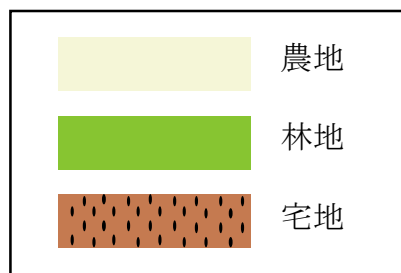


図 3- 11 2016 年現在の佐岡地区土地利用図



第 4 章 中後入・有谷の空間と変遷

4-1. 中後入の空間

4-1-1. 地形の構成

中後入は、後入川とその支流によって形成された V 字谷によって構成されている西ノ谷、後入川とテンヤ川に挟まれなだらかな台地形となっている中ノ谷、有谷川に属し V 字谷が形成されている東ノ谷に大きく分かれる。また、図 4-1 に示している通り、各集落同士を望むことは出来ない。

西ノ谷は、標高 100m 前後の辺りを後入川が流れており、そこから 250m の辺まで後入川支流によって形成された V 字谷が形成されている。そのようなことから、西ノ谷は平地が少なく、農地にするには非常に難しい条件を有している。

中ノ谷は、本村にかけて広がる平らな尾根地形である。西ノ谷とは異なり、尾根部は緩やかで平らな斜面が形成されている。対して、河川付近は急峻な斜面となっており、中ノ谷の集落から真下の後入川を望むことは出来ない。中後入における中ノ谷は特異な地形で、有谷川によって急峻な地形を持つ西ノ谷、東ノ谷とはその性質を画す。

東ノ谷は、有谷川によって形成された V 字谷が形成されている。東ノ谷は有谷川をはさんで南側は独立した小山を形成している一方、北側は斜面で有谷のスズハラに隣接する尾根が見えている。

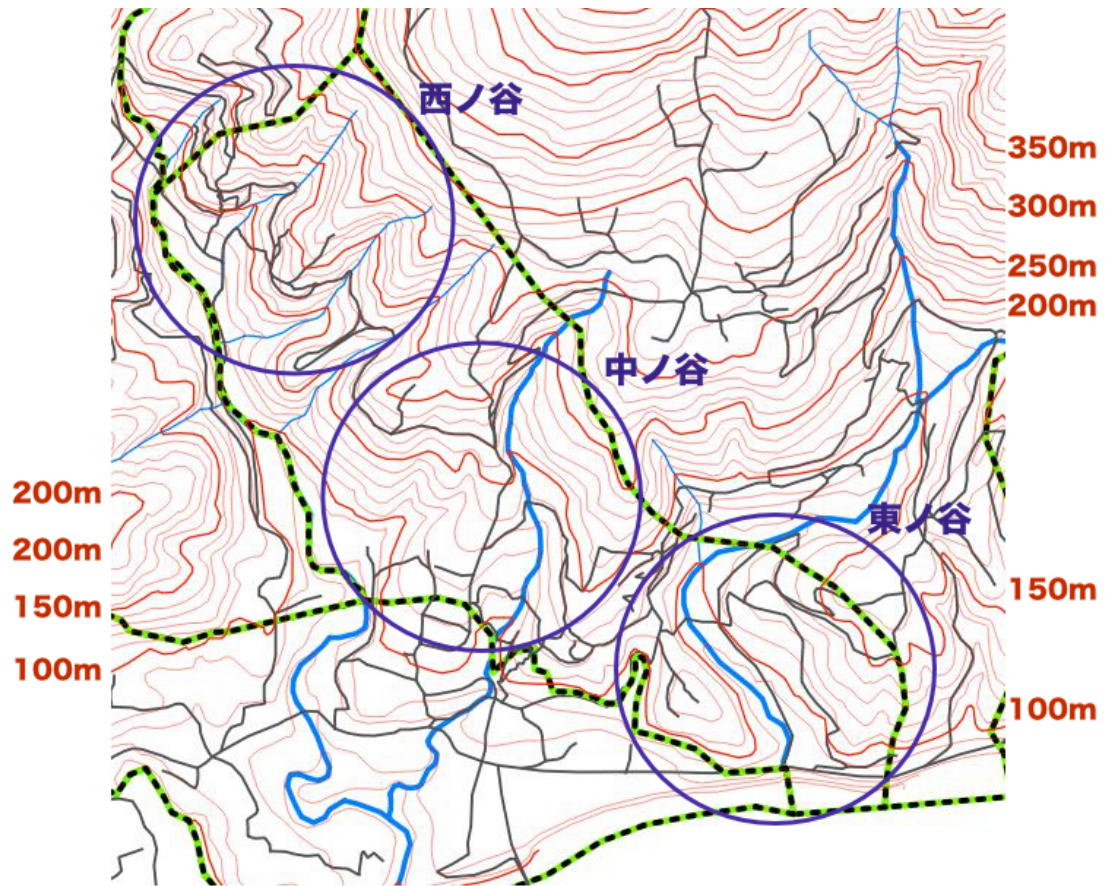


図 4- 1 中後入地形図 (S=1/8000)

4-1-2.街路と河川・水路の体系

現在の主要街路は、本村沿いの県道 218 号線を起点とし、各集落へと伸びている、車での通行が可能な街路に加え、各集落同士を結ぶ街路の二つに分かれる。車での通行な街路は、それぞれの街路同士が接続することは無く、別の集落に一旦県道に入らないと行けないようになっている。幅員は、軽自動車が行き来可能な幅員（幅 2.5m 程度）である。

また、かつて主要街路であったが、現在は消滅しているものも地区内には存在する。西ノ谷から中ノ谷に抜ける街路は、現在管理されず獣道となっているが、かつては後入川からの水路を併設しているうえに、集落間の連絡路としても機能していた。さらに、当街路から分岐するかたちで墓地へ行くことが出来る。

主な河川は、後入川、テンヤ川、有谷川である。西ノ谷、中ノ谷は後入川水系で、東ノ谷は有谷川水系に属する。後入川は流量も多く、流域圏の水田に水路を介して水を供給している。1945 年当時は流域圏に 4 本もの支流が流れていたが、現在は西ノ谷の集落を貫く 1 本のみが活動している。テンヤ川も流量は少なくないものの後入川ほどではなく、分岐する水路は存在しない。テンヤ川は面している斜面地の水田にのみ水を供給している。有谷川は、後入川ほどの流量を有し、流域圏の水田への水の供給を担っている。

また水路は、かつては後入川を起点に西ノ谷から三本の水路が中ノ谷方面に流れていた。現在は、そのうち一番下流から取水している一本のみが活動している。

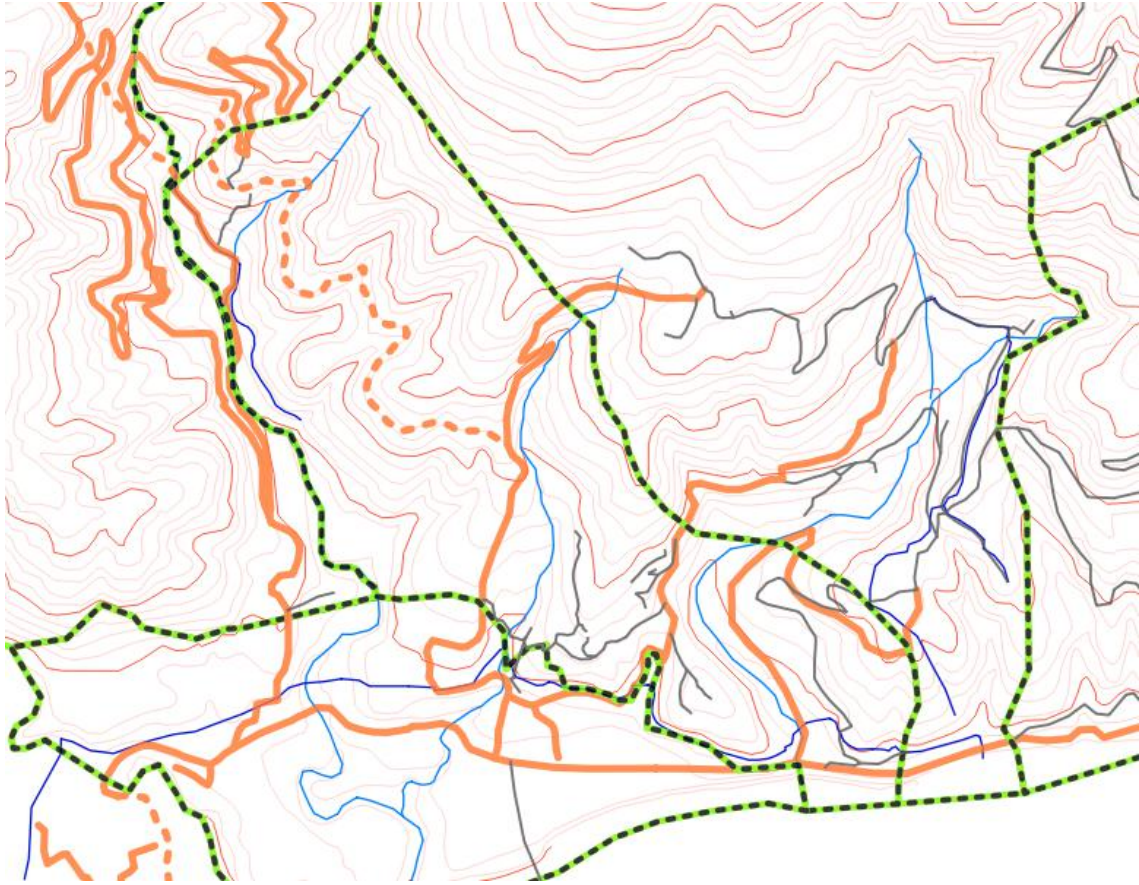
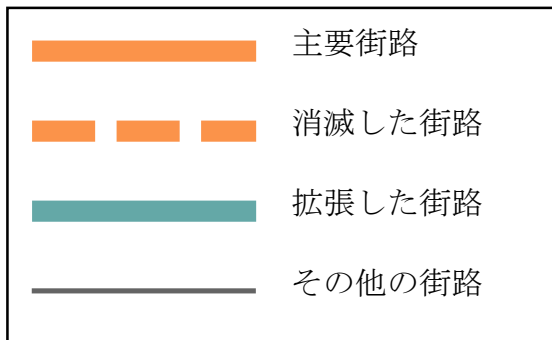


図 4- 2 中後入街路網 (S=1/8000)



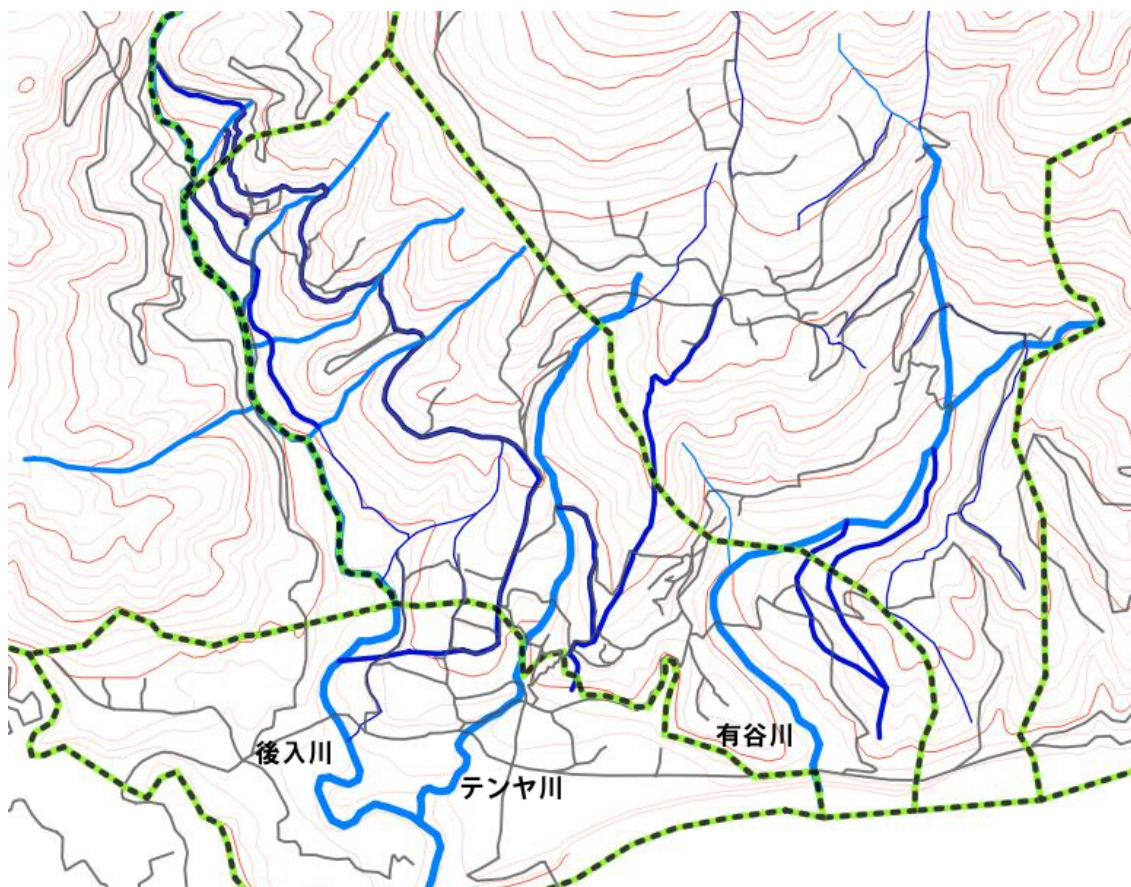
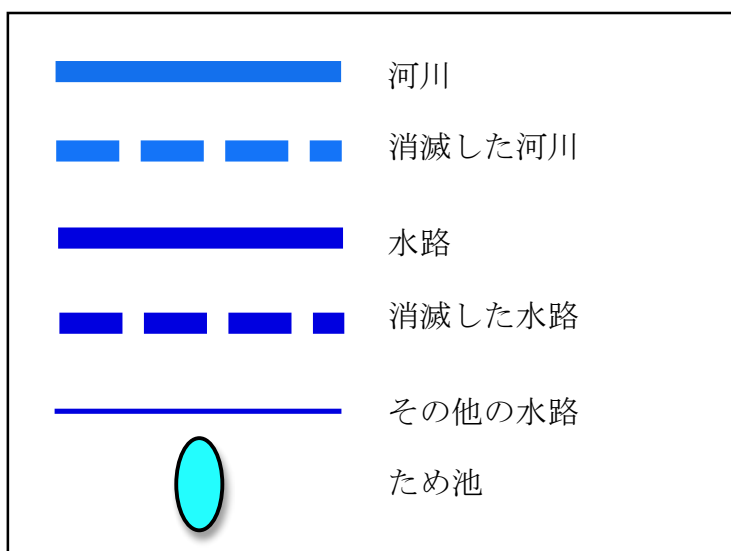


図 4- 3 中後入水路網 (S=1/8000)



4-1-3.聖地・葬地の分布

中後入の聖地は、西ノ谷の集落から 10m ほど標高が高い位置に金峯神社が設置されている。配置の状況を図 4-4 に示すとおり、西ノ谷から続く里道から境内に侵入する。鳥居は一基で、コンクリート製である。急斜面を自然の岩によって造成された石段によって本殿に至る参道をもつ。かつては後入川支流の側に建てられていたが、洪水が度々発生したため、江戸時代末期に現在地に造替された。西ノ谷における水分型の神社配置となっており、生業の元となる水を神聖化している意図が読み取れる。

須賀神社は、中ノ谷の集落からテンヤ川をわたったところに位置している。星神社から境内に入るルート、配置の状況を図 4-4 に示すとおり、中ノ谷から境内に入るルート、東ノ谷方面から境内に入るルートと多様なルートを持つ。鳥居は一基で、朱色の木製である。

中後入の西ノ谷に属する墓地群は、合計で五カ所有り、図 4-5 に示す通り、墓地 A1~A4 と命名する。墓地 A1~A4 の特徴として、かつて主要であった里道跡から伸びていたとみられ、標高 170m~180m 付近に見られる。しかし、A2~A4 は廃墓となっている。また、墓地の向きはその全てが南向きを向いている。

中ノ谷における六カ所ある墓地群を、北から順に墓地 B1~B5 とする。中ノ谷における五カ所ある墓地群のうち、墓地 B1 は西ノ谷の延長線上に、B2、B3、B4 は集落の中心部に、B5 は中ノ谷の集落から東側に立地している。かつ、墓地の向きはほぼ南を向いている。

東ノ谷における五カ所ある墓地群を図 4-5 に示す通り北から順に墓地 C1、C2 とする。東ノ谷に属する墓地群は、有谷方面に向いて伸びる街道に面している墓地 C1 と、東ノ谷の集落から対面に立地する墓地 C2 の二つの類型に分かれる。かつ、墓地の向きはほぼ南を向いている。C1 はほぼ南面を向いているが、C2 は南面から 30 度東に振れた向きをしている。

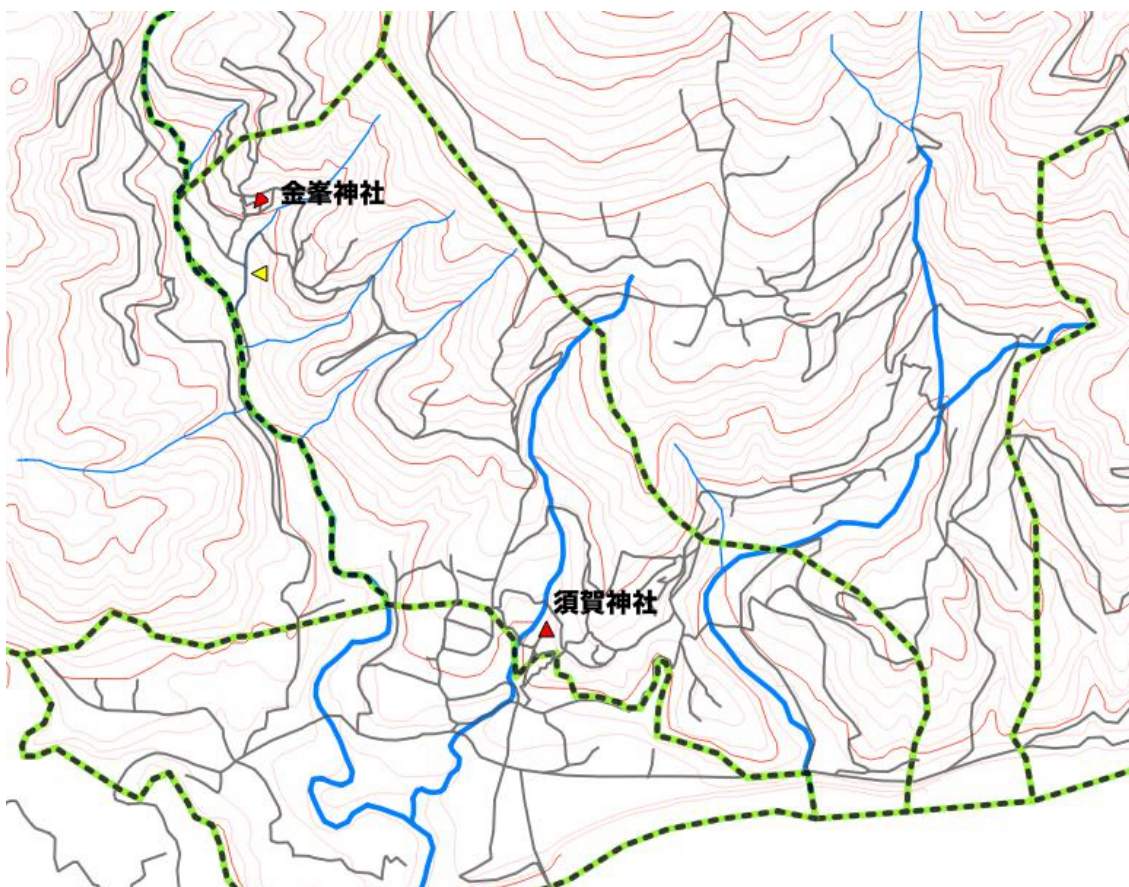
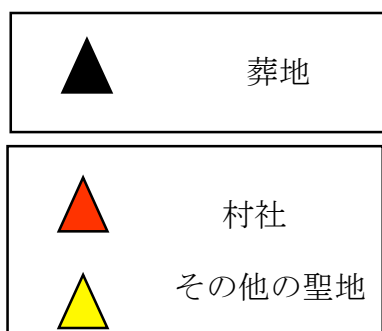


図 4- 4 中後入聖地分布図 (S=1/8000)



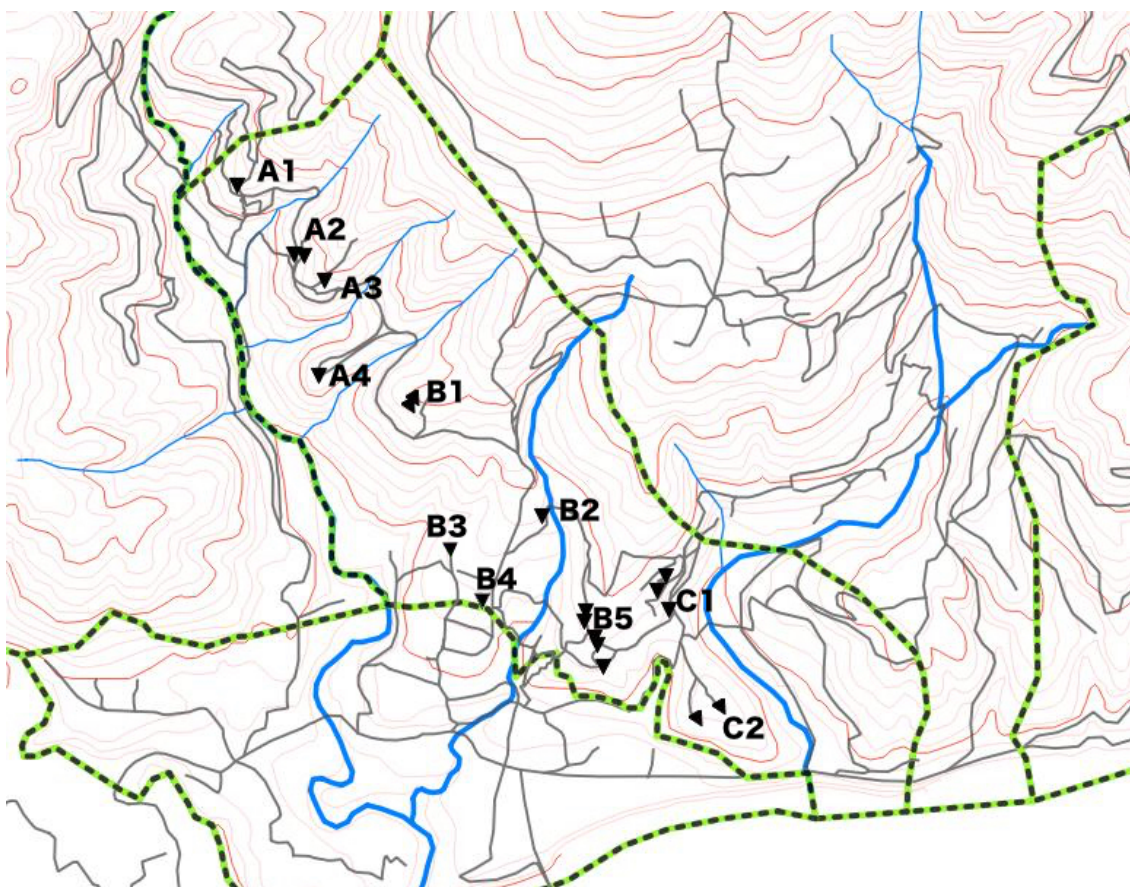
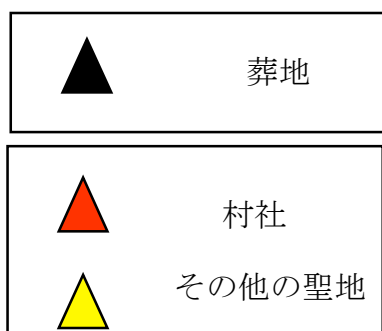


図 4- 5 中後入葬地分布図(S=1/8000)



4-1-4.土地利用の分布

西ノ谷の集落の周辺以外は、ほぼ林地である。林地は杉林が多く、その次に竹林が多い。西ノ谷の集落は現在 2 戸あり、それぞれ離れている。支流に面している宅地の南面は農地となっている。しかし、農地は現在放棄されているところも多く、草地となっているところもしばしば見受けられる。林地の中に金峯神社の境内があり、西ノ谷の集落からはその存在を認識することが出来ない。また、かつての農地であった場所が林地に置き換わっている場所が、杉林の中に石垣がある景観が見られる。

中ノ谷は南から中ノ谷の集落、農地、林地という構成となっている。集落は本村の集落と接続しており、その境目は見つけられない。なだらかな土地は宅地として利用され、農地はその北、西、東側の斜面に石垣を造成して作られている。

東ノ谷は、基本構成として、有谷川を底辺に農地、林地となっている。東ノ谷は斜面地にあるので、斜面地に棚田を造成して農地としている。有谷川の北斜面には農地と林地の間に集落が、南斜面には林地の中に墓地が存在している。

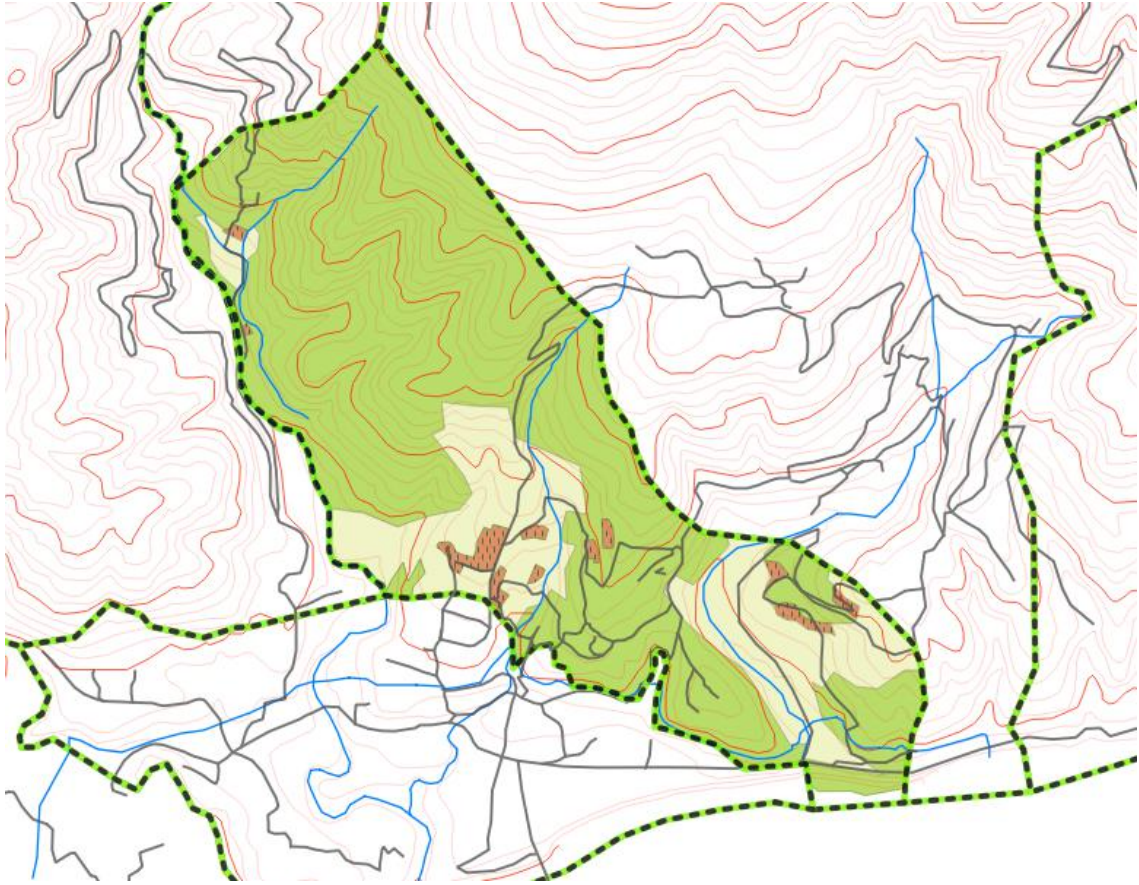
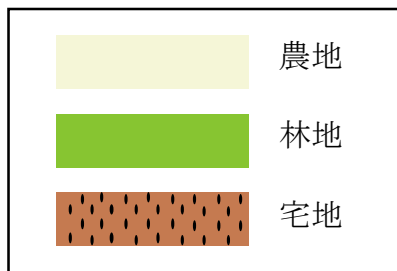


図 4- 6 中後入現土地利用図 (S=1/8000)



4-2. 有谷の空間

4-2-1. 地形の構成

有谷は、字の南部は有谷川によって形成されたが作った V 字谷で構成されているムカイという谷の領域、東ノ谷から延長されたうえに尾根上に存在しているスズハラという尾根領域、スズハラが有する尾根の延長上に立地するオドリバ、ムカイの北部に位置し台地となっているイチドウと呼ばれる領域、北部には標高 550m で盆地状の開けたヌタという領域に大きく分かれる。

ムカイは、有谷川が中央に大きな谷地を形成されている。領域中央で二つの河川が合流するため、それぞれの扇状地が合流した谷となっているため、急峻な地形ではない。そのため、領域内では空がかなり開けているように感じられる。

スズハラ、オドリバは、尾根地形であり、尾根には平らで小さな平地が形成されている。平地上には集落が形成されている。ムカイからはひじょうに近い、台地上から望むことができる。

イチドウは、有谷川にもテンヤ川にも属していないならかな斜面を有する領域となっている。その地形的特徴から、どの領域も望むことはできない。

ヌタは、標高 550m 地点に盆地状の土地が形成されている。自然による河川は流れていないが、北の山麓からの雨水が流れてきており、盆地の底は湿地帯のような状態になっている。地質は石灰層となっており、特に西端は土壌の被覆が薄く、石灰岩が露出している。

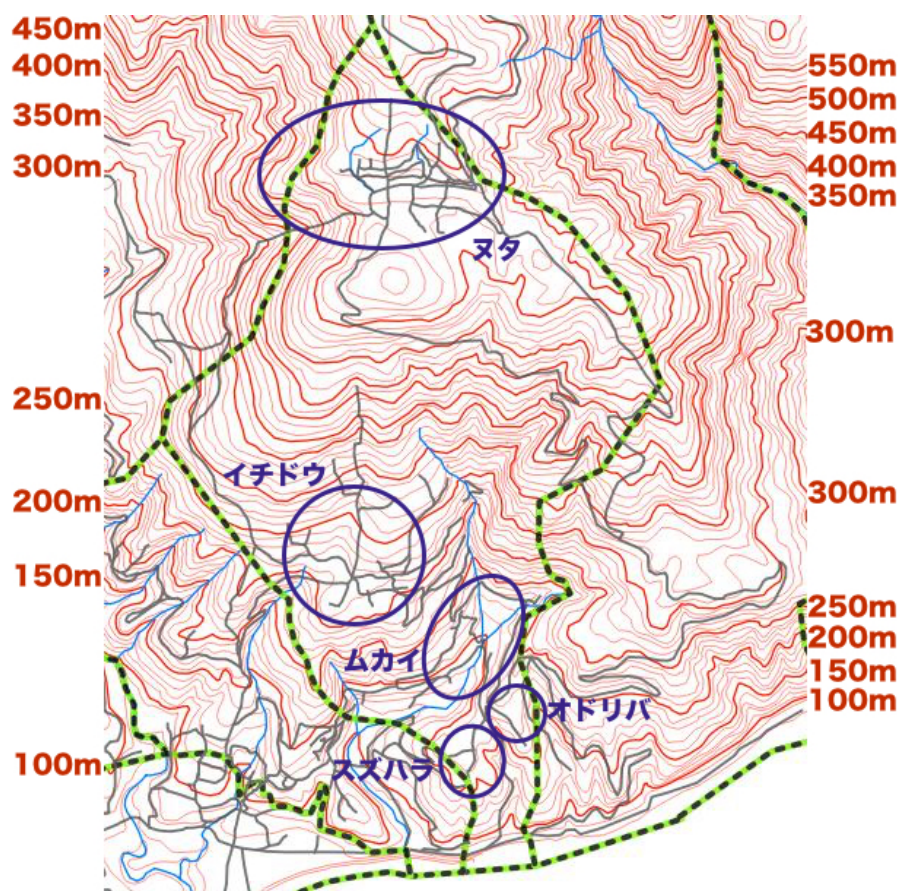


図 4- 7 有谷地形図 (S=1/15000)

4-2-2.街路と河川・水路の体系

現在の主要街路は、乗用車の通行可能なルートと歩行者のみ通行可能なルートに分別できる。東ノ谷からスズハラを通過してムカイまで通る街路、ムカイからイチドウに向かう街路、スズハラからオドリバ、更には佐竹方面に向かう街路、佐竹からヌタに向かう街路、以上の主要街路は乗用車の通行可能な街路である。多くの主要街路はコンクリート舗装、かつたびたび幅員拡張され、軽自動車が通行可能な程度の幅員を有している（幅員 2.5m）。また、ヌタへと向かう街路は、有谷北部の林地のための林道として開発された道路で、舗装はされていないが、幅員は広い（幅 3.5m）。しかし、勾配が急なため、四駆の乗用車のみ通行が可能である。また、ムカイからオドリバに向かう街路、ムカイから本村に向かう街路、以上の主要街路は舗装されていない、かつ歩行者しか通行できない街路である。しかし、ムカイからオドリバに向かう街路は現在も生き続けている水路を併設し、かつ村社の竈戸神社に向かうための重要な交通路として機能を有している街路もある。しかし、かつての主要な目的から外れている街路が多い。

主な河川は、有谷川である。有谷川は現在こそ後入川ほどの流量は無いが、れっきとした流域圏を持ち、現在も多数の水路を抱えている。有谷川は源流を佐竹側とヌタ側にもつ。佐竹側に源流を持つ方は竈戸神社を有している。有谷川には現在 2 本の水路が存在し、標高の上からウワユ、シモユと呼ばれる水路が、有谷川から台地形にある集落であるオドリバやスズハラの人々の生活用水や農業用水に利用されている。

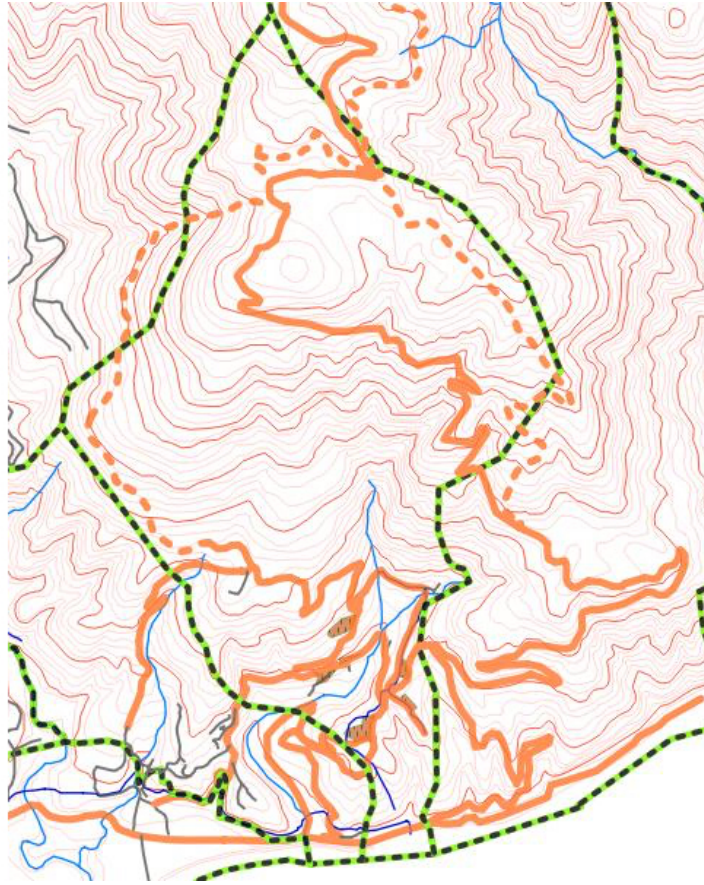
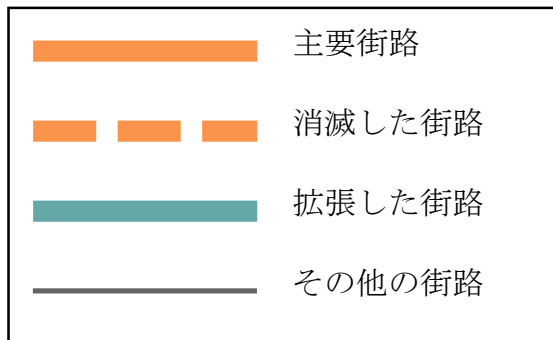


図 4- 8 有谷街路図 (S=1/15000)



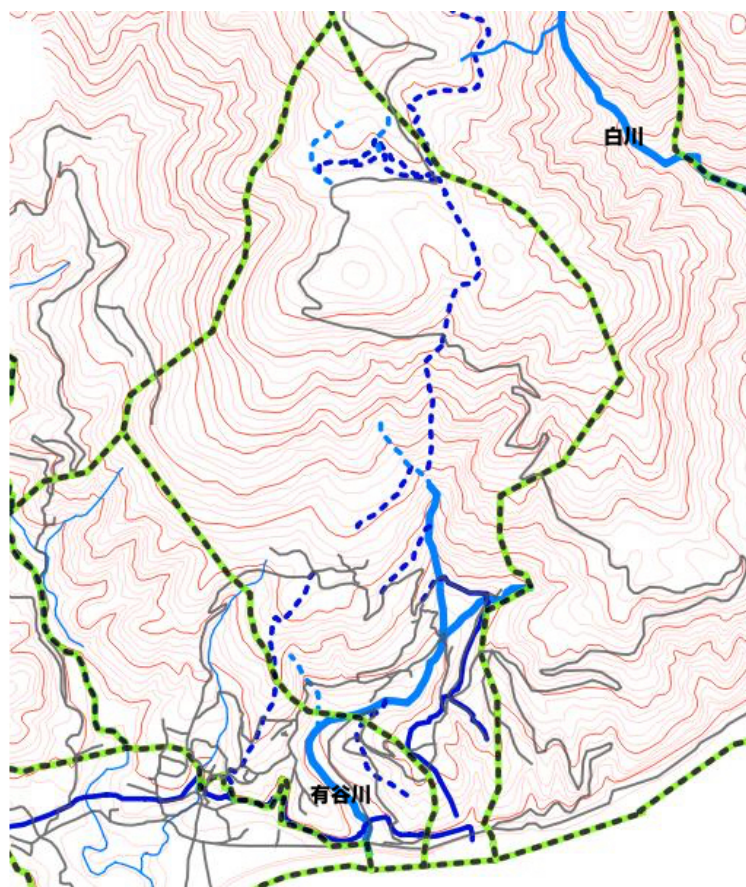
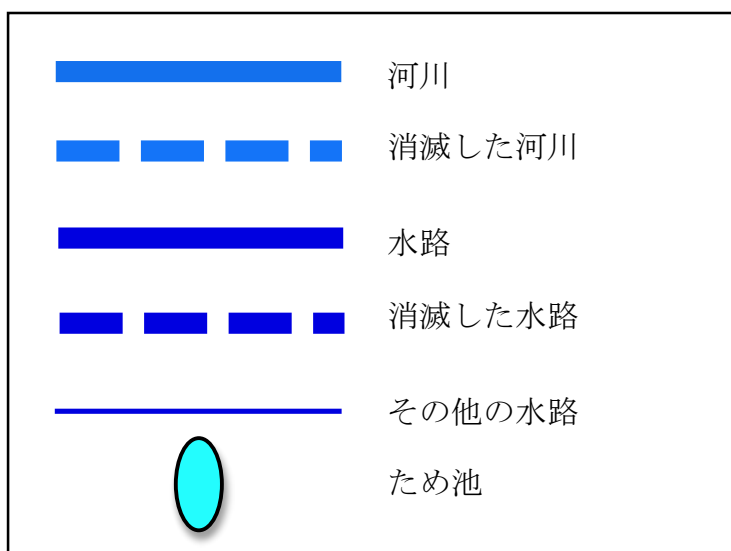


図 4- 9 有谷水路図 (S=1/15000)



4-2-3.聖地・葬地の分布

有谷の聖地は、竈戸神社、聖神社、日吉神社の三カ所存在する。竈戸神社は、主要街路と有谷川との合流点に存置されている。配置の状況は図 4-10 に示すとおり、有谷川を渡り、境内に侵入する。鳥居は一基で、木製である。参道はゆるやかな登り坂で段差の低い石段で出来ている。有谷における水分型の神社配置となっており、中後入の金峯神社と同様に、生業の元となる水を神聖化している意図が読み取れる。

聖神社はイチドウの集落の中心にあり、街路から直接境内に侵入するように構成されている。方角は南面を向いている。コンクリートの参道を有している。主要街路の交点に位置するイチドウの性格から、交通の要所に聖地が置かれたものと見られる。

日吉神社は、ヌタの西端に位置し、盆地地形の外輪に存置している。現在は進入路を断たれており社殿も存在しないが、かつては南に鳥居も一基存在し、そこから侵入していたと見られる。また、縦 8 尺、横 12 尺の拝殿と 5 尺 5 寸の本殿を有していた。社殿は南面を向いており、眼下には高知平野、および太平洋を望むことが出来た。

ムカイに属する墓地群は、集落の西側にまとまっている。図 4-11 に示す通り、墓地 D1,D2 と命名する。墓地 D1、D2 の特徴として、街路から直で接続していたとみられ、標高 170m~180m 付近に見られる。また、墓地群はその全ての墓石墓地の向きはその全てが南向きを向いている。さらに、墓地 D2 の特徴は、南面方向ではなく、先祖祠と面して設置されている。

スズハラにおける墓地群は、集落のすぐ隣に存在する。図 4-11 に示す通り北から順に墓地 E1 とする。墓地の向きは全て南を向いている。

イチドウにおける墓地群を、図 4-11 に示す通り北から順に墓地 F1,F2,F3 とする。F1 は、イチドウを貫く主要街路から北に分岐した里道から接続する。三段に分かれて並列配置で置かれているが、全て南を向いている。F2 は、かつて宅地で在った場所に置かれている。そのため、墓地群としてではなく単独で置かれているものが多いかつ、明治期の墓地が見当たらず、比較的新しいものが多い。また、方向性に一致するものは見当たらなかった。F3 は、イチドウの集落の南側に位置し、小高い場所に置かれている。F3 は非常に古い墓石がまとまって配置されており、かつ、墓地の向きはほぼ南を向いている。

ヌタにおける墓地群はヌタの集落の北側に置かれていた。図 4-11 に示す通り、東から墓地群 G1,G2 とする。墓地群 G1 は宅地北端の崖上に並列で配置されていた。また、G2 は水路に併設されている街路から間接的に侵入する。墓地群 G2 は並列配置されている。また、墓地群 G1、G2 はともに南から 20 度ほど西に向いている。

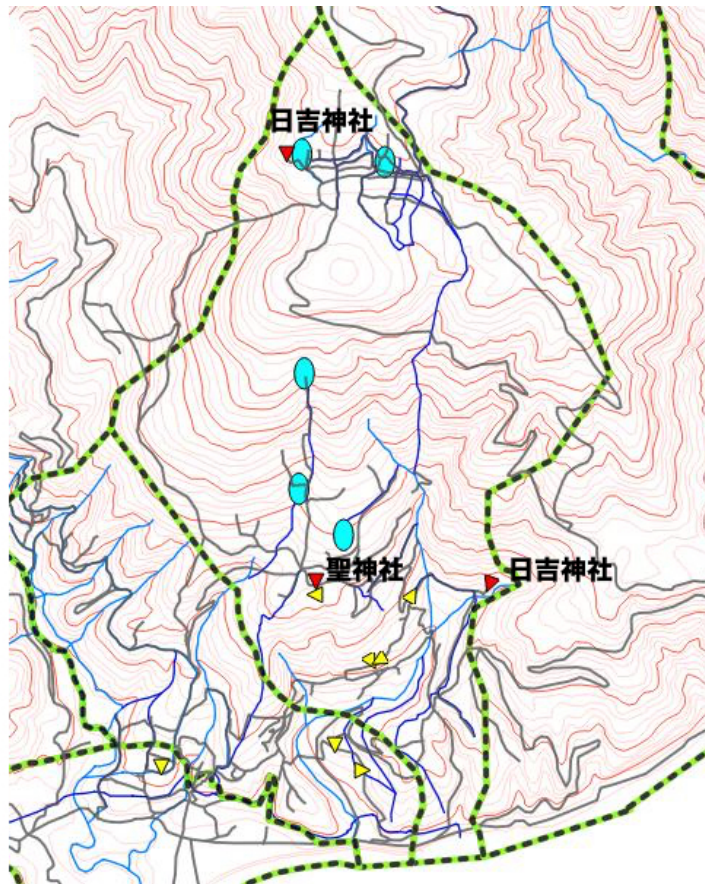
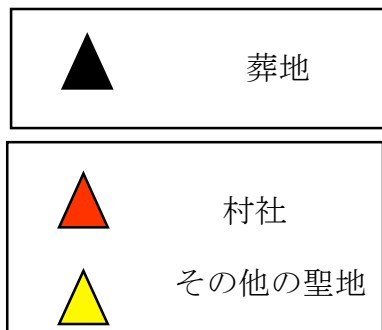


図 4- 10 有谷聖地分布図 (S=1/15000)



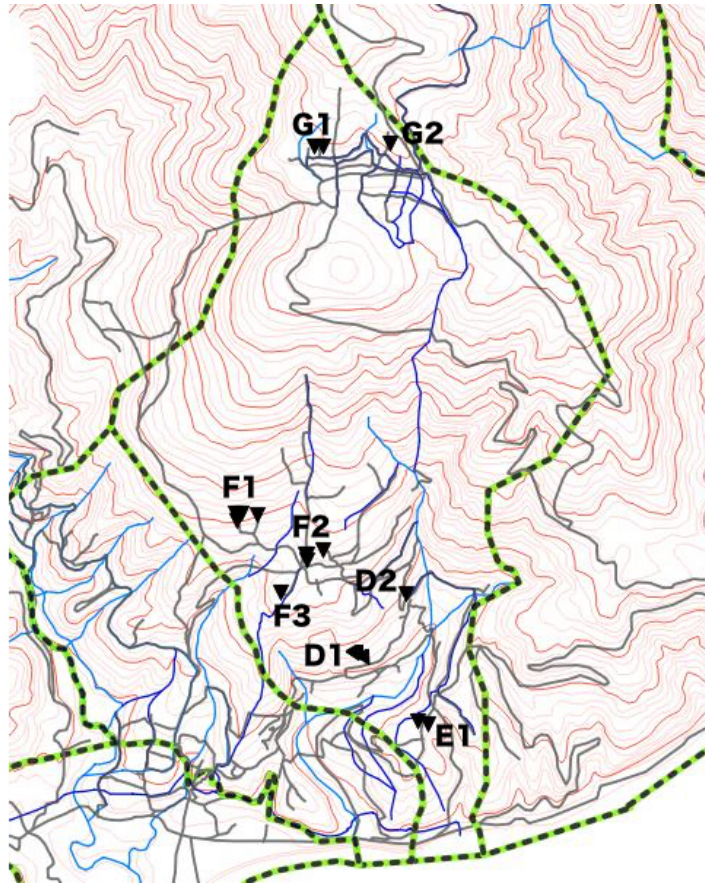
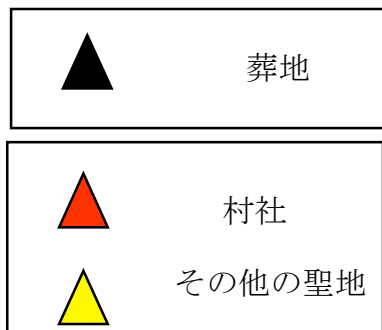


図 4- 11 有谷葬地分布図 (S=1/15000)



4-2-4.土地利用の分布

ムカイは有谷川から 40m にかけて農地が形成されている。水田が多いが、梅や畑地として使用されるなど、農業の用途は多様である。ムカイの集落は有谷の北側の斜面の農地と林地との境界に位置している。林地の内訳は、南部はヒノキ林が多く、北部は竹林の割合が多い。また、有谷川の南斜面は農地が少なく、スギ林の林地となっている。これは、北側よりも南側に陽が入ることが少なく、宅地としても農地としても比較的適していないためである。

スズハラは南側の一部は棚田で作られた農地が残っているが、北斜面と西側は杉林の林地となっている。宅地は有谷の中心で、公民館も併設している。オドリバの集落は街路に直に接続している。宅地は分散して立地している。農地は宅地の西側の尾根の上に残っているが、南に向いて開けている。

イチドウを中心とした領域や聖神社の周囲にたくさんの宅地が存在していたが、現在は空き家が数件残っているだけで、集落に人は居ない。空き家は人が住んでいた当時のまま残っているため、時間が止まったような感覚を受ける。集落より高い高度には、かつては斜面に広大な棚田を有していたが、現在は全てが林地に置き換わる。

ヌタにおける土地利用は、現在低地の一部が農地として使われている以外は、ほぼ全てが林地盆地上の中心は緩やかでかつ広大な棚田が形成されている。盆地北側はかつて水路が併結されている主要街路が通っており宅地となっていた。今は、一軒の空き家を除いて、広大な空地と井戸と門に宅地の名残を感じることができる。また、水脈を持たない集落に水をもたらしていた大きな人工のため池が宅地の西側にあり、現在は大きな凹地となっている。付近は杉林がほとんどである。

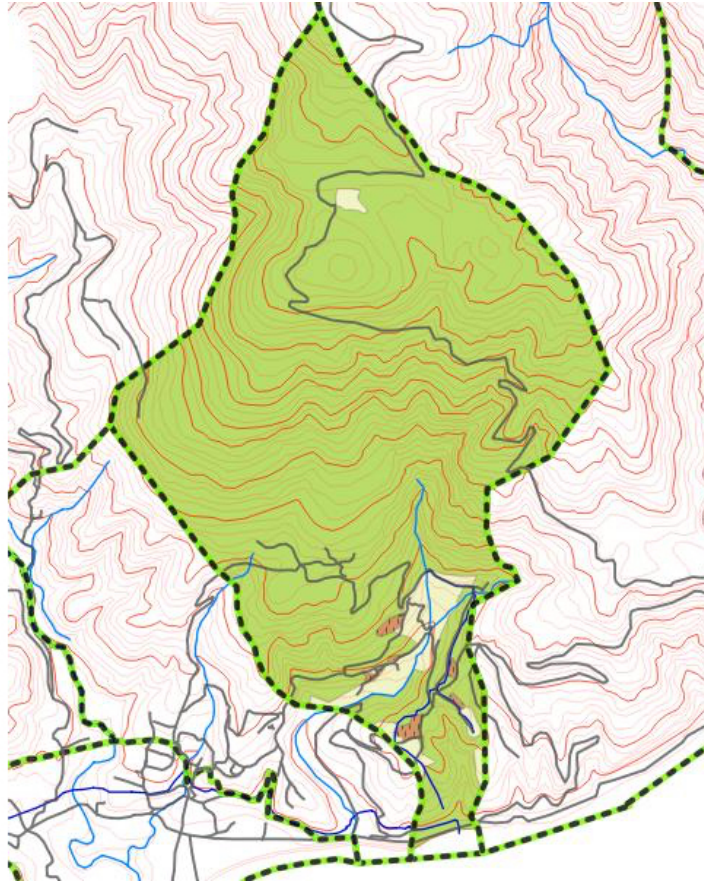
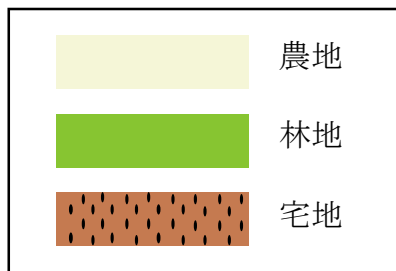


图 4-12 有谷現土地利用図 (S=1/15000)



4-3. 中後入の変遷

4-3-1. 街路と水路の変遷

・ 1945 年当時の街路と河川・水路

主要街路は、西ノ谷へは佐岡小学校から西ノ谷を抜けて西後入へと抜ける街路（街路 1）、本村東地区の集落から中の谷を通過してイチドウへと向かう街路（街路 2）、有谷川と県道の交差付近から、東の谷を抜けてスズハラまで向かう街路（街路 3）、西ノ谷と中ノ谷を結ぶ街路（街路 4）の 4 本の街路を基本骨格としていた。また、本村から有谷に向かう街路（街路 5）が字内を通過している。街路 1、街路 2、街路 3 は、本村沿いの県道 218 号線と起点として目的の集落へ向かう共通を持つ。街路 4 は、県道を起点とせず、中後入の集落同士を結ぶ機能を有している。また、水路を併結しており、標高 175m 付近を地形にそって並行に移動する特徴が見られる。

また、各集落は聖地（村社）へと向かう参道を 4 本、葬地へ向かう参道を 8 本有している。西ノ谷の集落から金峯神社につながる参道（参道 1）、星神社から須賀神社に向かう参道（参道 2）、中ノ谷から須賀神社につながる参道（参道 3）、東ノ谷から須賀神社につながる参道（参道 4）がある。また、図〇〇に墓地へと向かう参道を示している。西ノ谷が有する墓地への参道は、街路 4 から分岐していることから、街路 4 も墓地への経路として使われていたと見られる。

主な河川は、後入川、テンヤ川、有谷川である。後入川は流量も多く、流域圏の水田に水路を介して水を供給している。1945 年当時は流域圏に 4 本もの支流が流れていた。テンヤ川は面している斜面地にのみ水を供給している。有谷川は、後入川ほどの流量を有し、流域圏の水田への水の供給を担っている。

また水路は、かつては後入川を起点に西ノ谷から三本の水路が中ノ谷方面に流れていた。後入川から引水している水路が 3 本、テンヤ川から引いている水路が 1 本、有谷川から引いている水路が 2 本存在していた。街路 4 に並行して流れている水路（水路 1）、水路 1 の下を流れ西ノ谷の集落まで流れている水路（水路 2）、水路 2 の更に下を流れ、中ノ谷の農地まで流れる水路（水路 3）が存在する。テンヤ川の水路（水路 4）は、テンヤ川東斜面の農地用水として使われていた。イチドウから中ノ谷の東側を通過し本村まで流れる水路（水路 5）は当時から中後入では利用されてなかったと見られている。有谷川から引水した水路（水路 6）は通称シバユと呼ばれ、東の谷麓下側の集落及び集落下の農業用水に利用されていた。また、東ノ谷麓上側を通過する水路（水路 7）は、通称ナカユと呼ばれ、集落麓上側の集落及び農業用水に使用されていた。

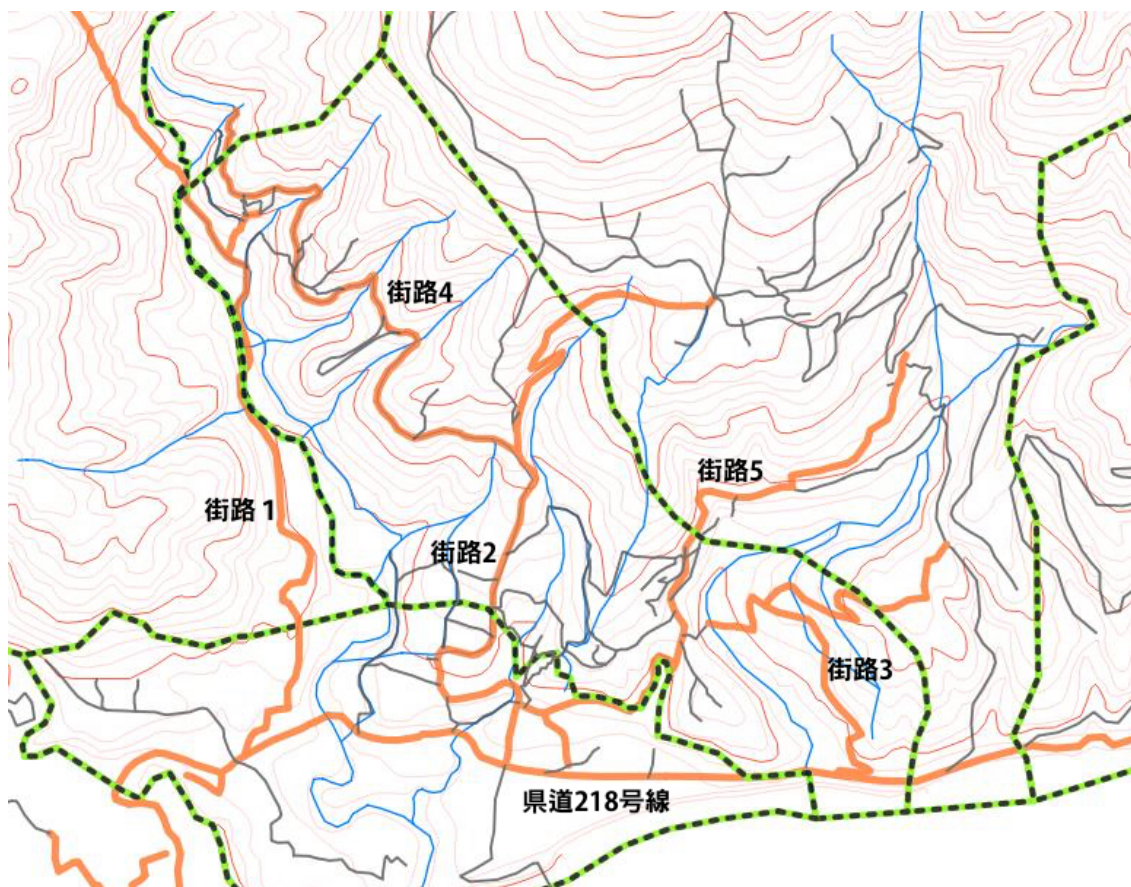
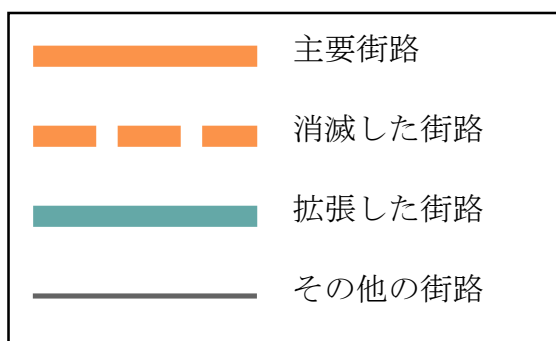


図 4- 13 1945 年当時の中後入街路網 (S=1/8000)



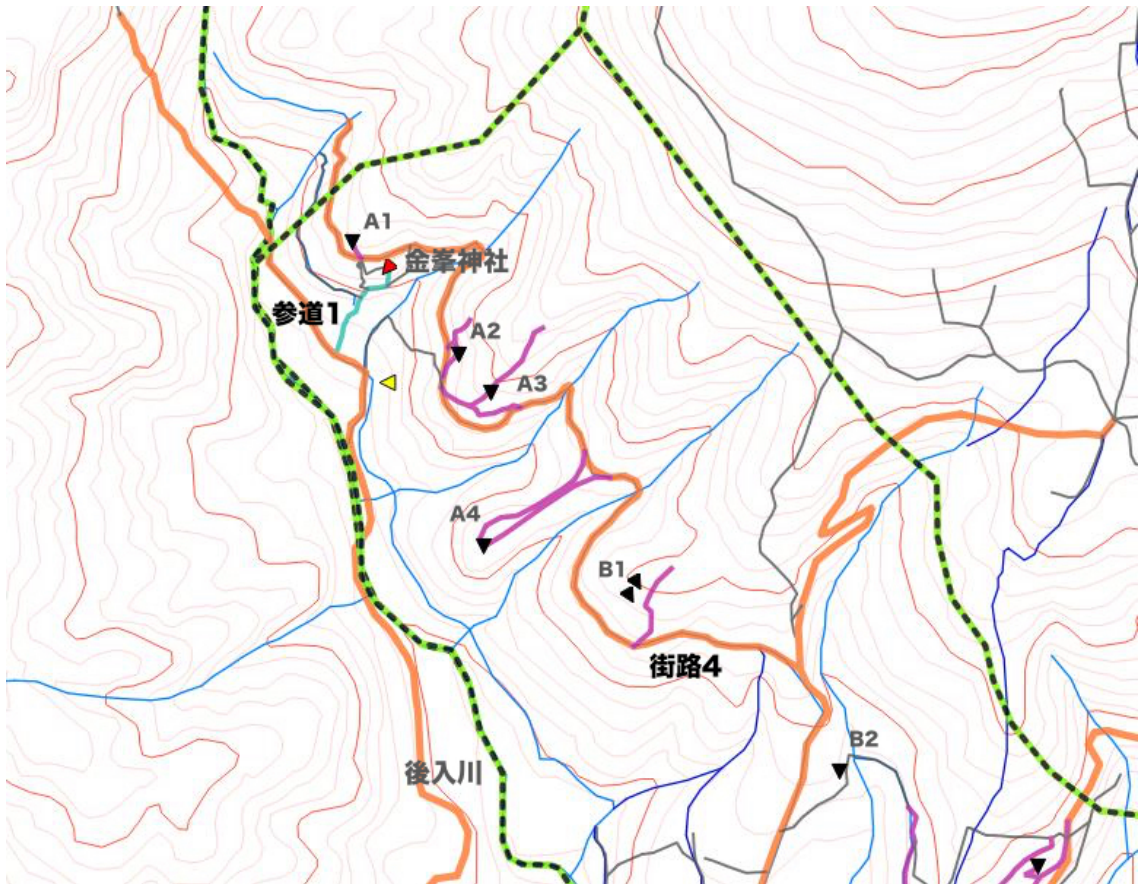
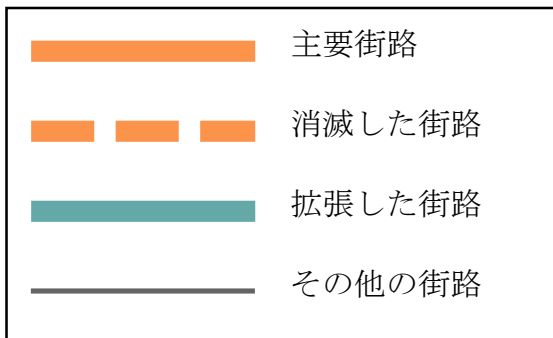


図 4- 14 1945 年当時の中後入西ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)



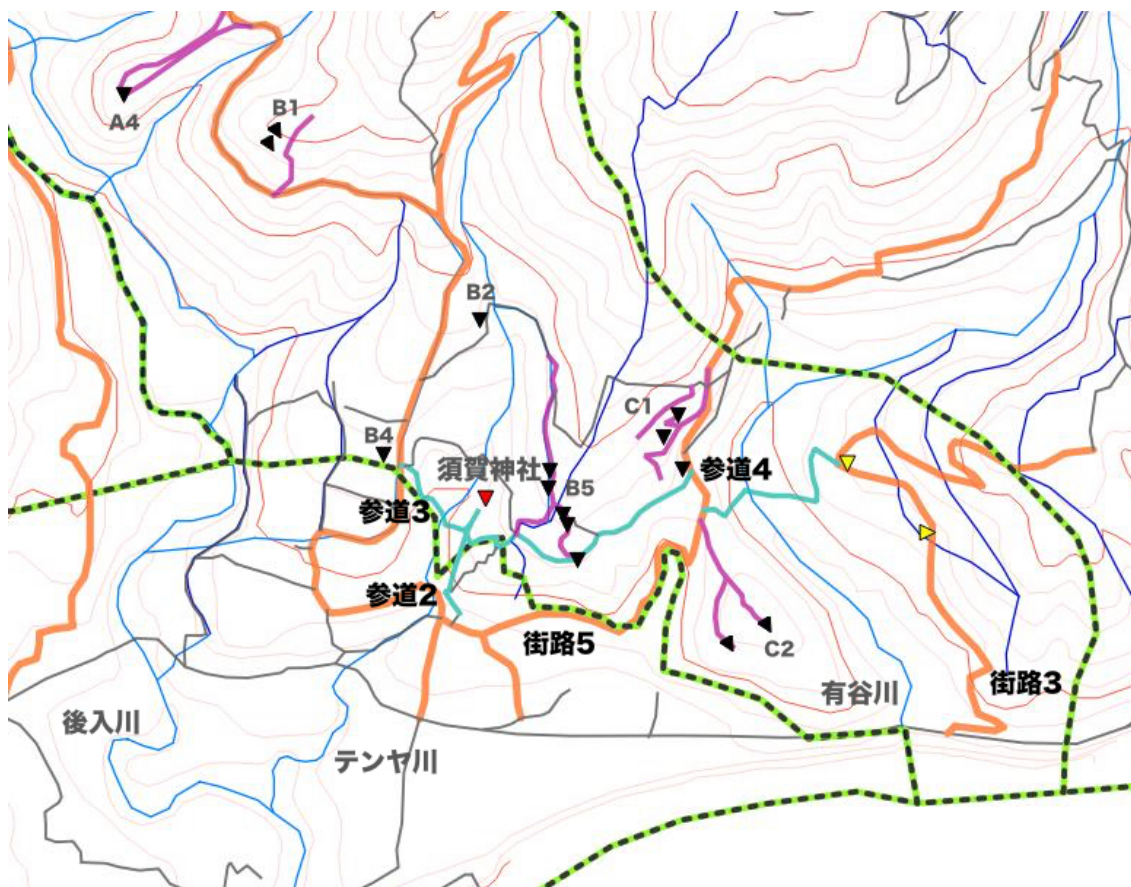
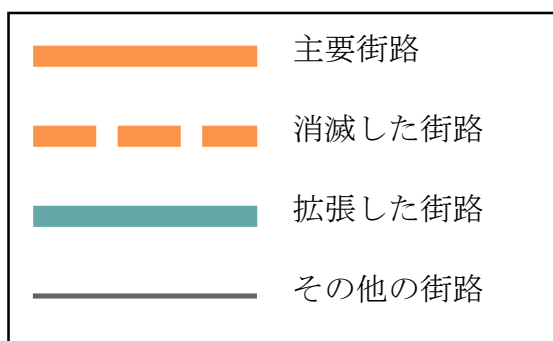


図 4- 15 1945 年当時の中後入中ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)



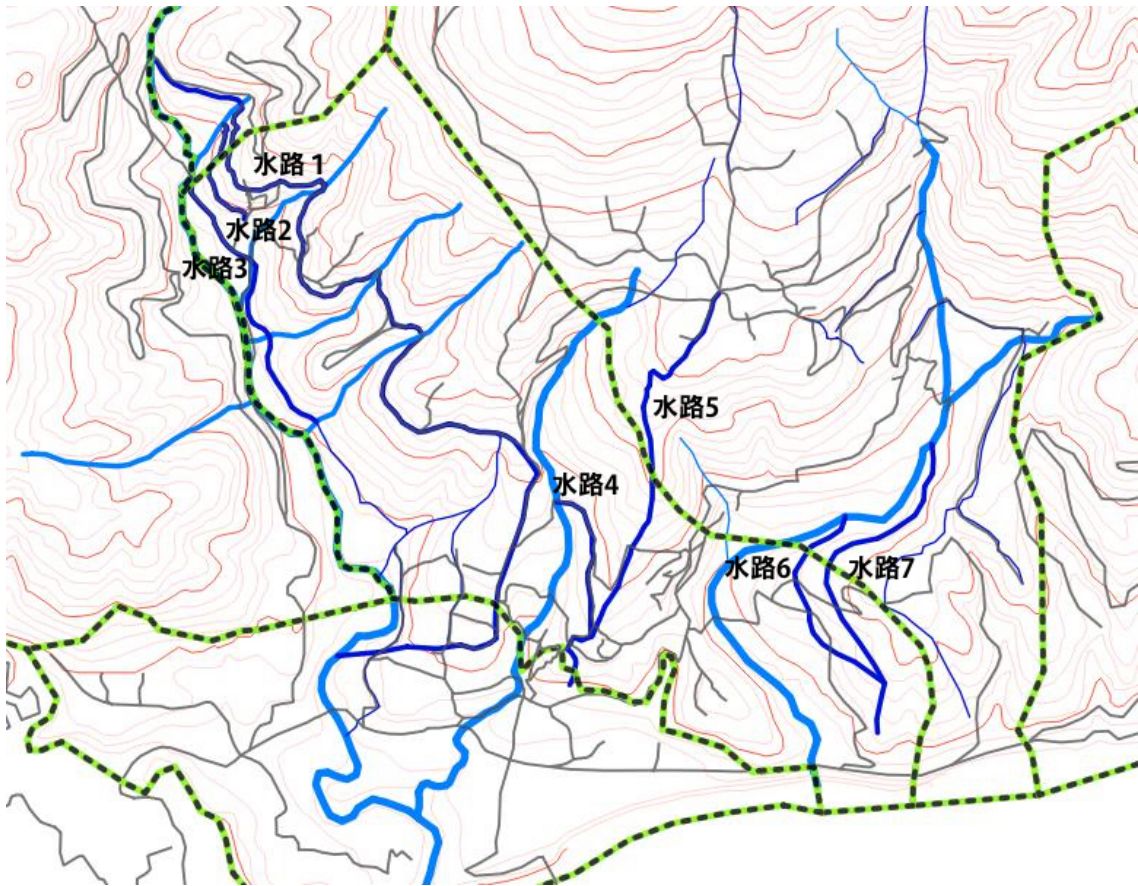
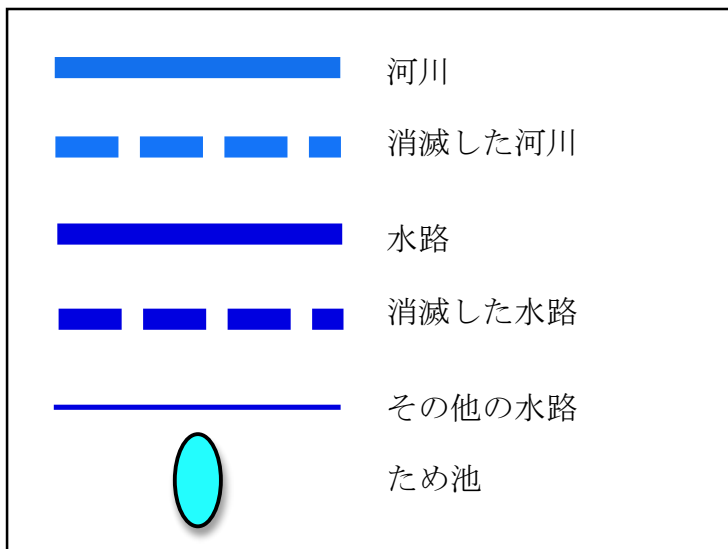


図 4- 16 1945 年当時の中後入水路網 (S=1/8000)



・ 1970 年当時の街路と河川・水路

主要街路は、街路 1 の途中から自動車で行け可能な車道が分岐しており、西後入に向かう街路（街路 6）、大後入へ向かう街路（街路 7）が開通し、街路 1 の西ノ谷から西後入間が廃止される。また、街路 1 の一部の幅員が拡張され、車が通行可能となる。街路 2、街路 3、街路 4、街路 5 においては変化がなかった。

また、参道においては、参道 2 は杉田改良区の新設により一部経路の改良が行われる。また、参道 4 においても、東ノ谷の集落から有谷川真での区間を廃止した。

河川の影響はほぼ無かったと見られているが、山麓の土地利用の影響から、流量の少ない後入川支流は流量が減少している。テンヤ川は面している斜面地の水田にのみ水を供給している。有谷川は、変化がなかった。

1970 年頃には水路 2、水路 4、水路 6 は既に使われていなかったとされている。共に水を供給していた土地利用の変化によって水の需要が変化したためと見られている。水路 1、水路 3、水路 5、は変化がなかった。

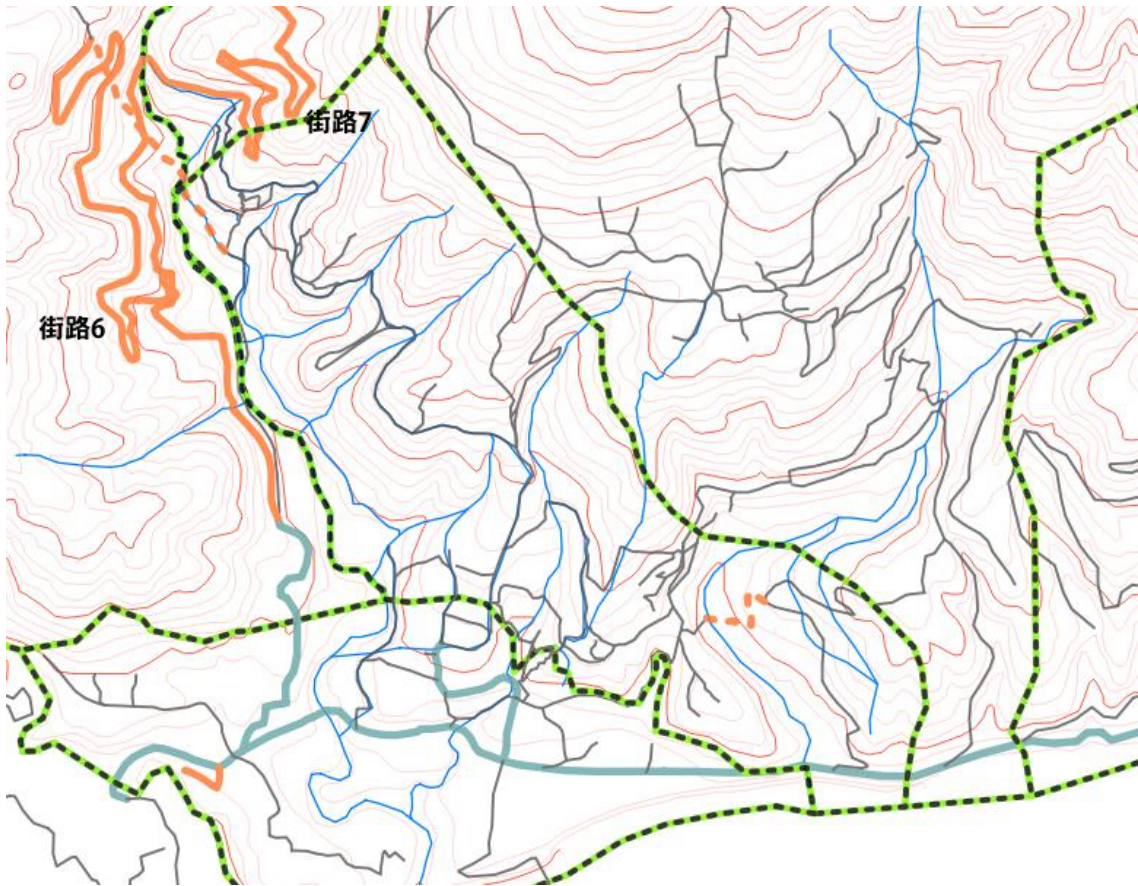
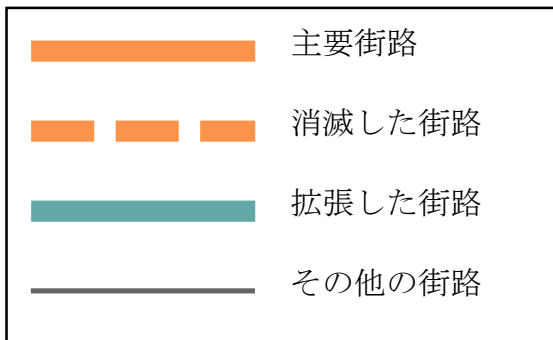


図 4- 17 1970 年当時の中後入街路網 (S=1/8000)



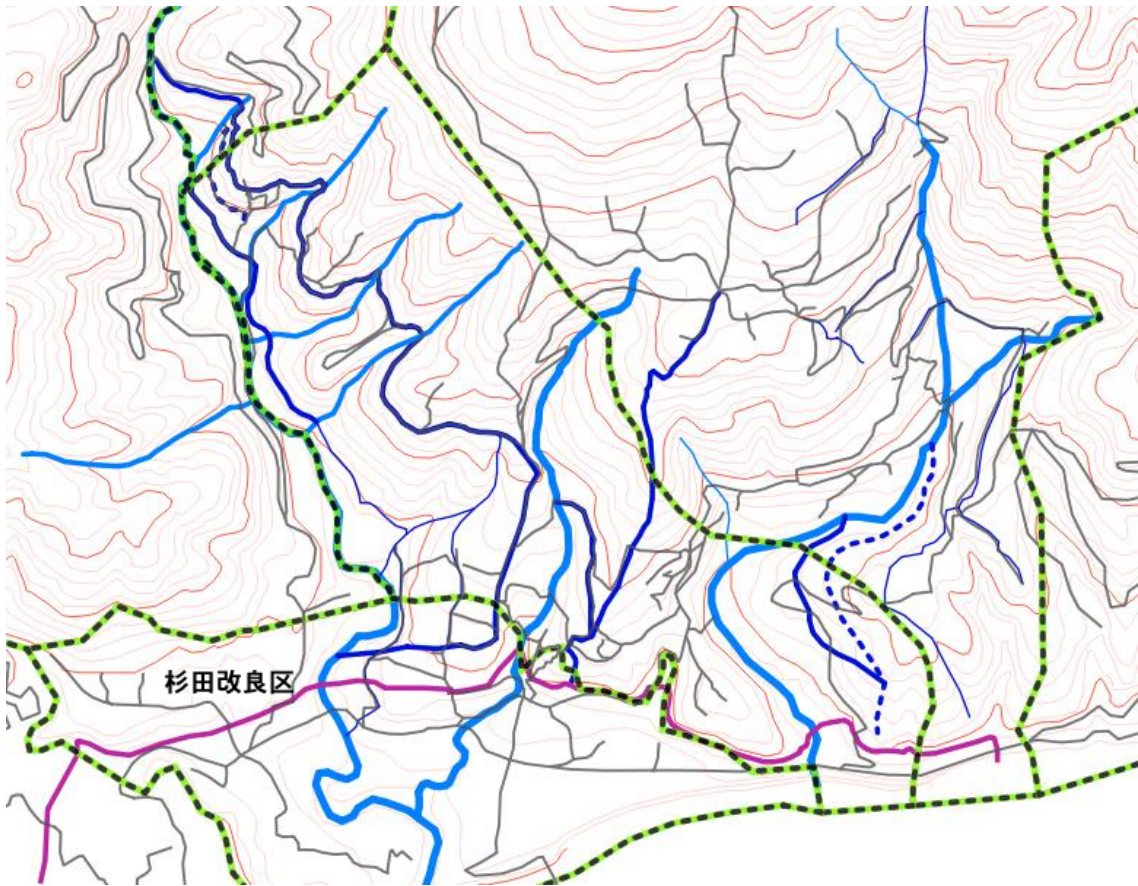
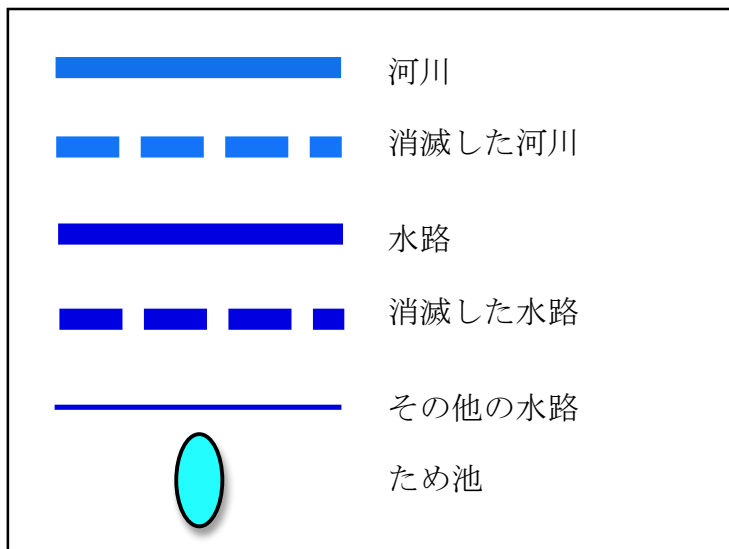


図 4- 18 1970 年当時の中後入水路網 (S=1/8000)



・ 1970 年以降の街路と河川・水路

街路 1、街路 2 の途中、街路 3 のアスファルト舗装が行われた。街路 2 の途中においては街路幅員の拡張も同時に行われた。また、しかし、街路 2、街路 5 は途中から舗装されずそのままにされている。また、街路 3 と同じ目的で街路（街路 8）が新設された。街路 8 は乗用車のスムーズな通行を行うために新設されたことから、主要街路として機能は街路 3 から役割を受け継いでいる。街路 4 は、併設される水路が廃止されると、同じくして交通量が減少し、管理されなくなる。そのため、街路 4 は分岐する墓地の参道、林道とともに一気に荒れ果てていく。

聖地に向かう参道は 1970 代以降変化していないが、墓地へ向かう参道、及び林地へ向かう道がこの時期以降に廃れていく。併設している街路 4 目的地であった墓地の移動、林業の廃業から人々が利用しなくなったことによるものと見られている。

後入川の流量は変化がなかったが、テンヤ川、有谷川の流量は減少した。また、後入川、有谷川の支流は消滅しているものが多い。特に、後入川の支流は、流域圏に有ら谷植樹したスギの含水量が影響しているものと見られている。

1970 年代に入り、すぐに水路 1 は廃止される。中ノ谷の土地利用の変化によって水路 1 を必要としなくなったためである。水路 5 も同様に、利用する集落の減少によって廃止となったと見られている。利用する目的のある水路 3 は現在も利用されている。

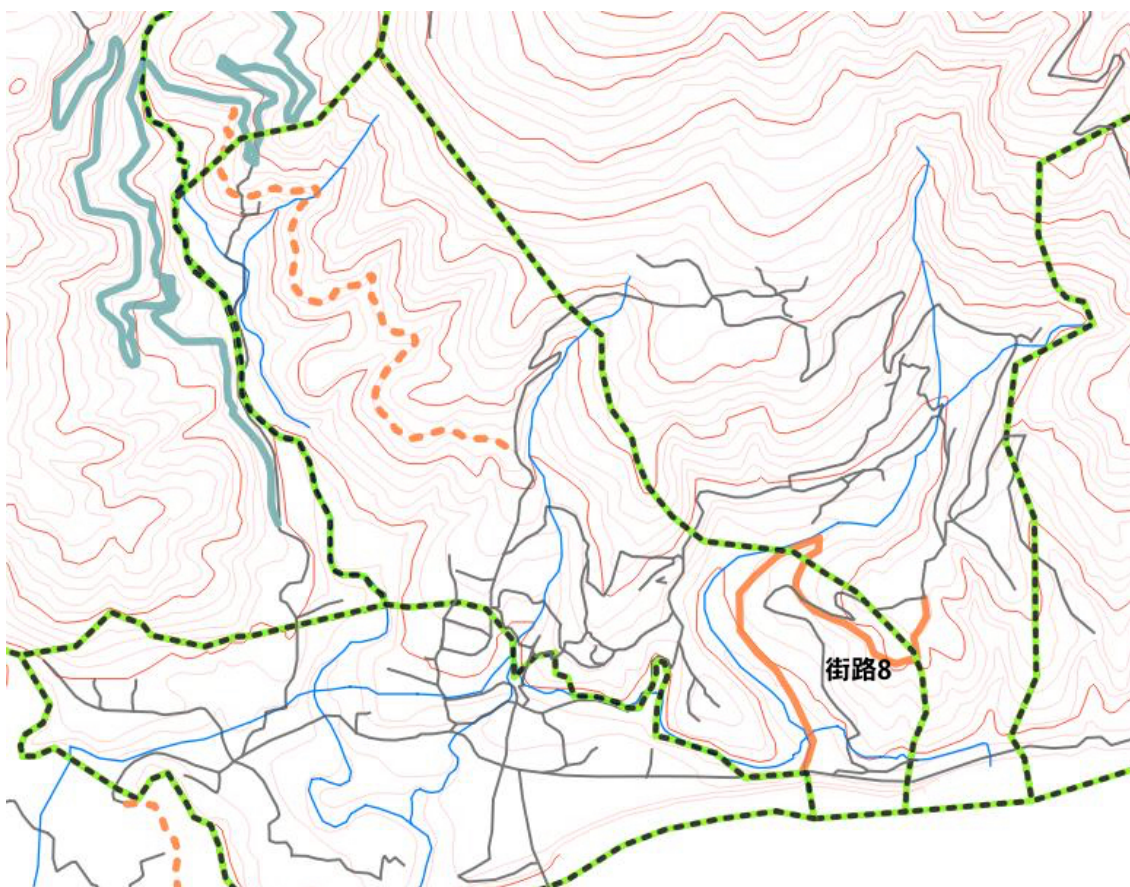
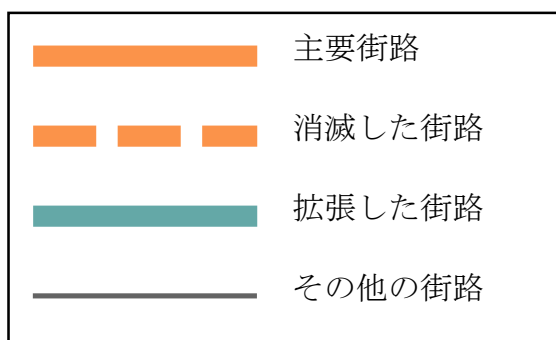


図 4- 19 2016 年現在の中後入街路網 (S=1/8000)



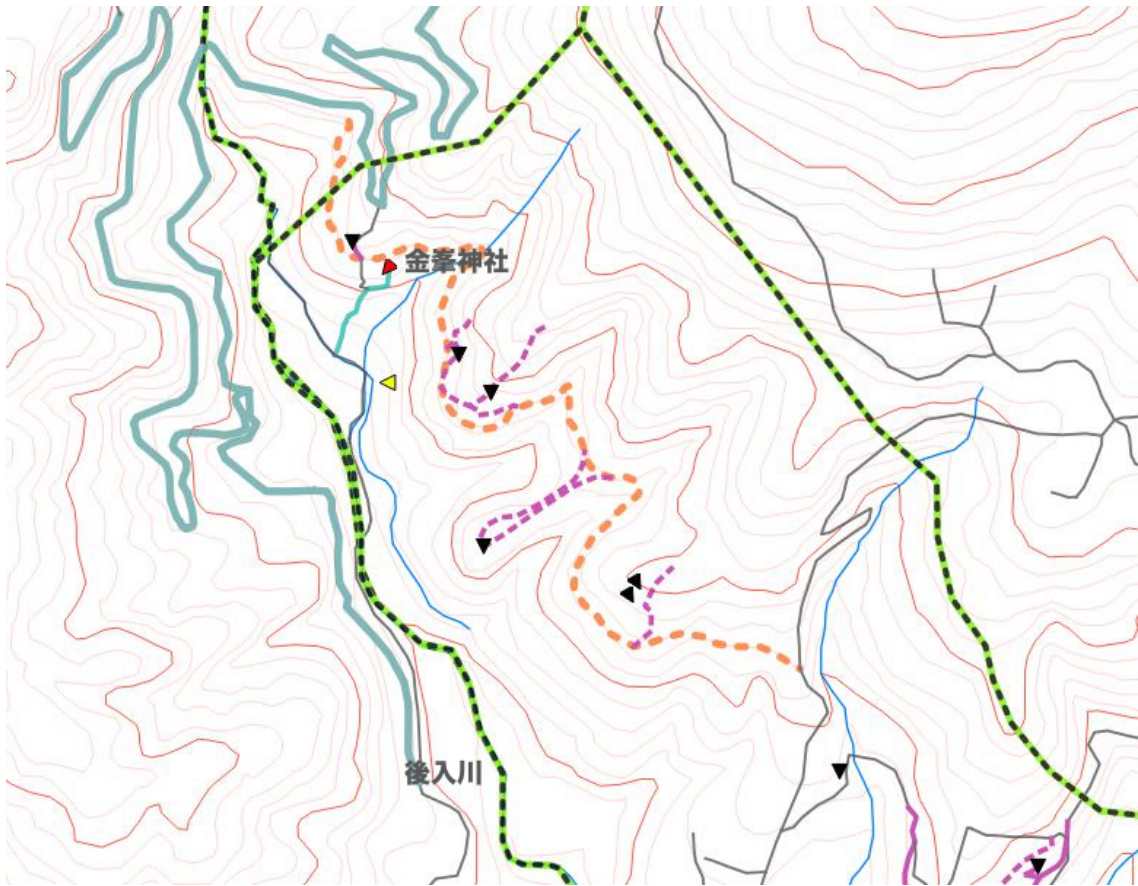
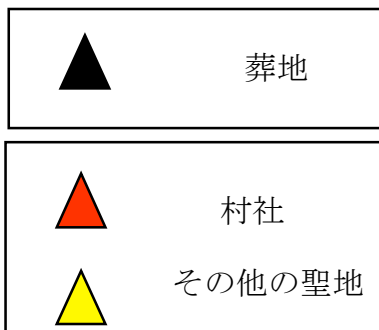


図 4- 20 2016 年現在の中後入西ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)



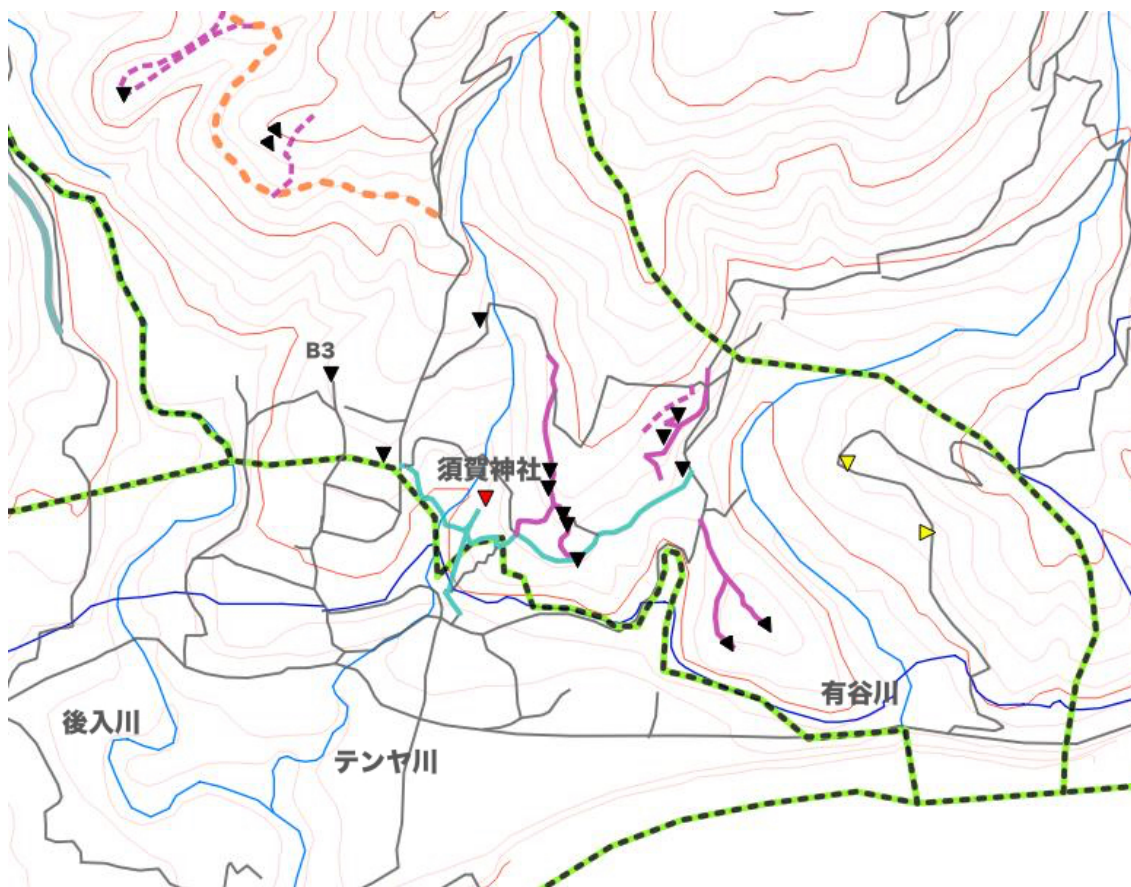
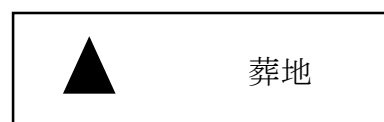


図 4- 21 2016 年現在の中後入中ノ谷付近の街路網 (S=1/5000)



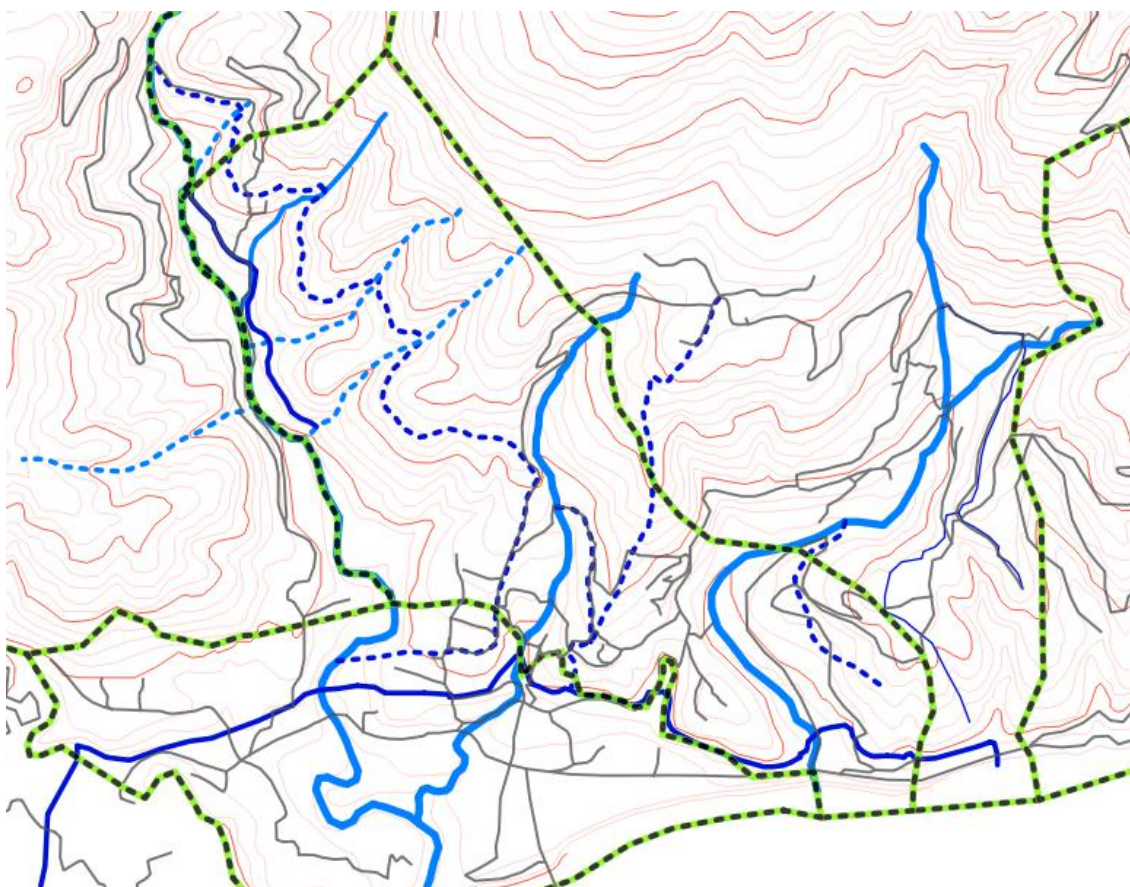
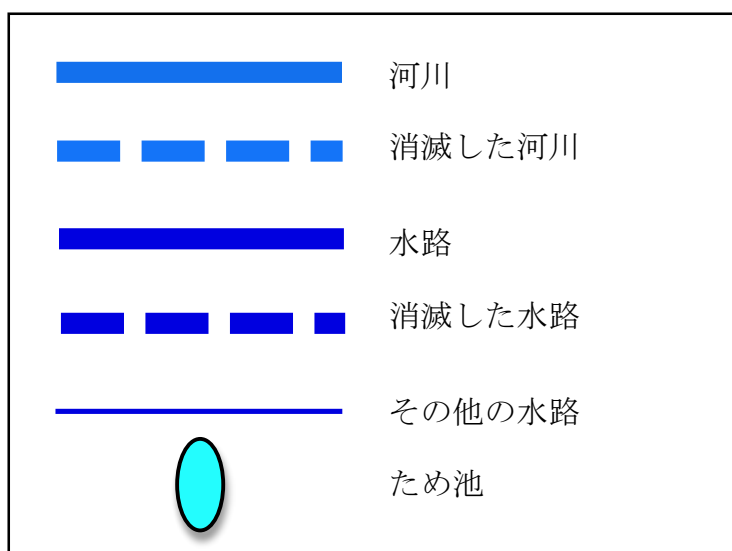


図 4- 22 2016 年現在の中後入水路網 (S=1/8000)



4-3-2.土地利用の変遷

・ 1945 年当時の土地利用

1945 年当時は集落の周りに農地があり、背後に林地がある構成を有していた。西ノ谷は集落と同じ標高の斜面に広大な農地を開墾している特徴が見られる。また、農地は街路 4 によって林地と区別することができ、街路 4 及びそれに併設される水路 1 は土地利用の境界線としての区分けの意味を併せ持っていたと考えられる。また、標高 250m 付近の斜面にも農地として開墾されている。集落のすぐ上に聖地があるように、集落から金峯神社を認識することが出来た。

中ノ谷は、集落の上左右に広く棚田のある農地を有していた。特に集落の西側の尾根は広大に開墾され、主に水田として利用されていた。聖地付近は鎮守の森として緑が残されている。鎮守の森によって、集落からは墓地群 B5 は認識できない。

東ノ谷は、集落よりも下の麓に農地を広大な農地を有している特徴が見られる。集落は北側の斜面にかたまり、集落から見て有谷川の対岸には葬地があり、林地に囲まれた小山という特徴によって特別認識しやすい。

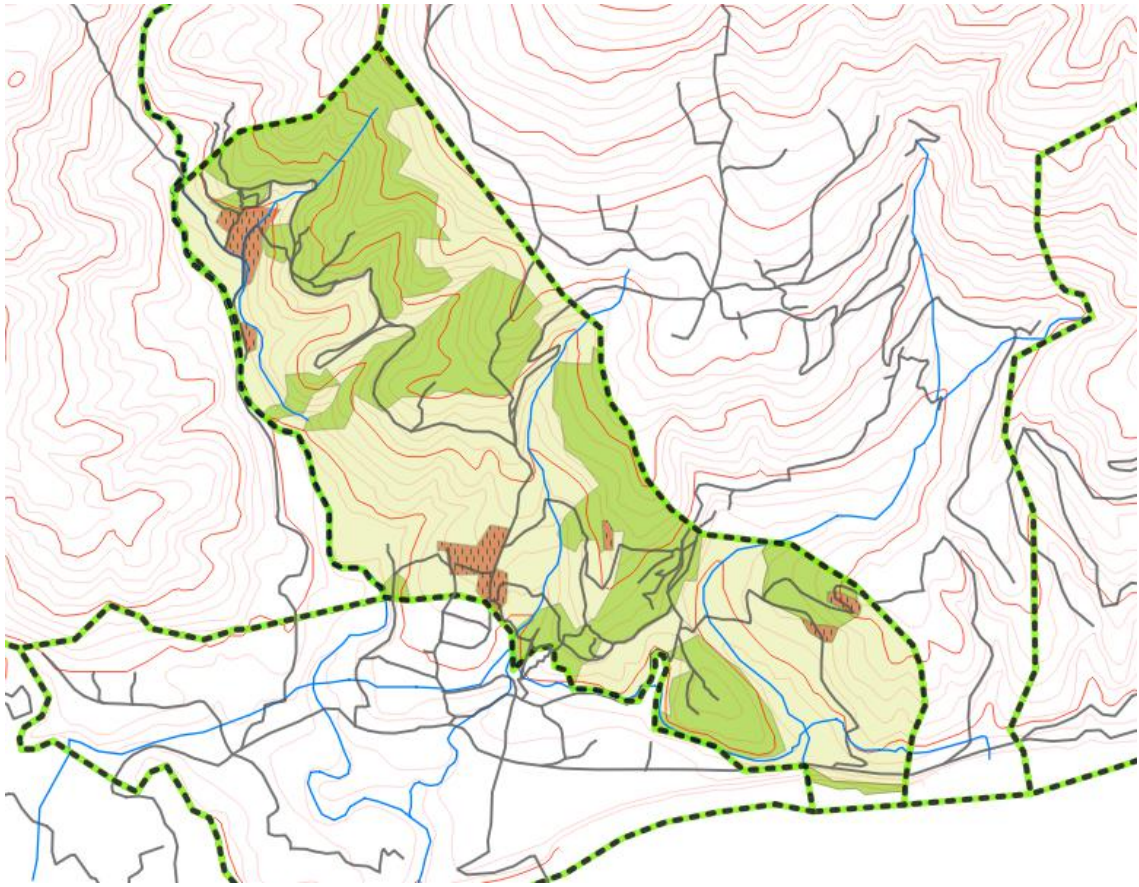
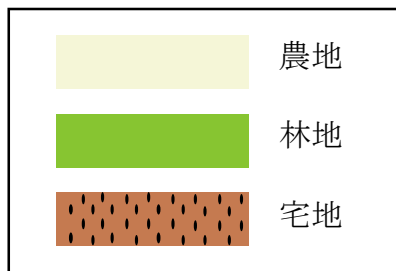


図 4- 23 1945 年当時の土地利用図 (S=1/8000)



・ 1970 年当時の土地利用

1945 年から 1970 年にかけて、西ノ谷では標高 250m 付近の農地、及び西ノ谷と中ノ谷の間の農地が林地に置き換わった。これは、戦後の木材需要に応え、中後入の中でも生産性の低い土壌であったことが推測される。また、西ノ谷では、集落の減少が著しい。宅地面積が 1945 年から半減している。これは、土佐山田町方面や、佐岡地区の他の地域へ移動したと言われている。

対して、中ノ谷では開墾が進み、墓地群 B5 付近を農地に変更している。集落からの見え方の変化はない。

また、東ノ谷では特に変化は見当たらなかった。

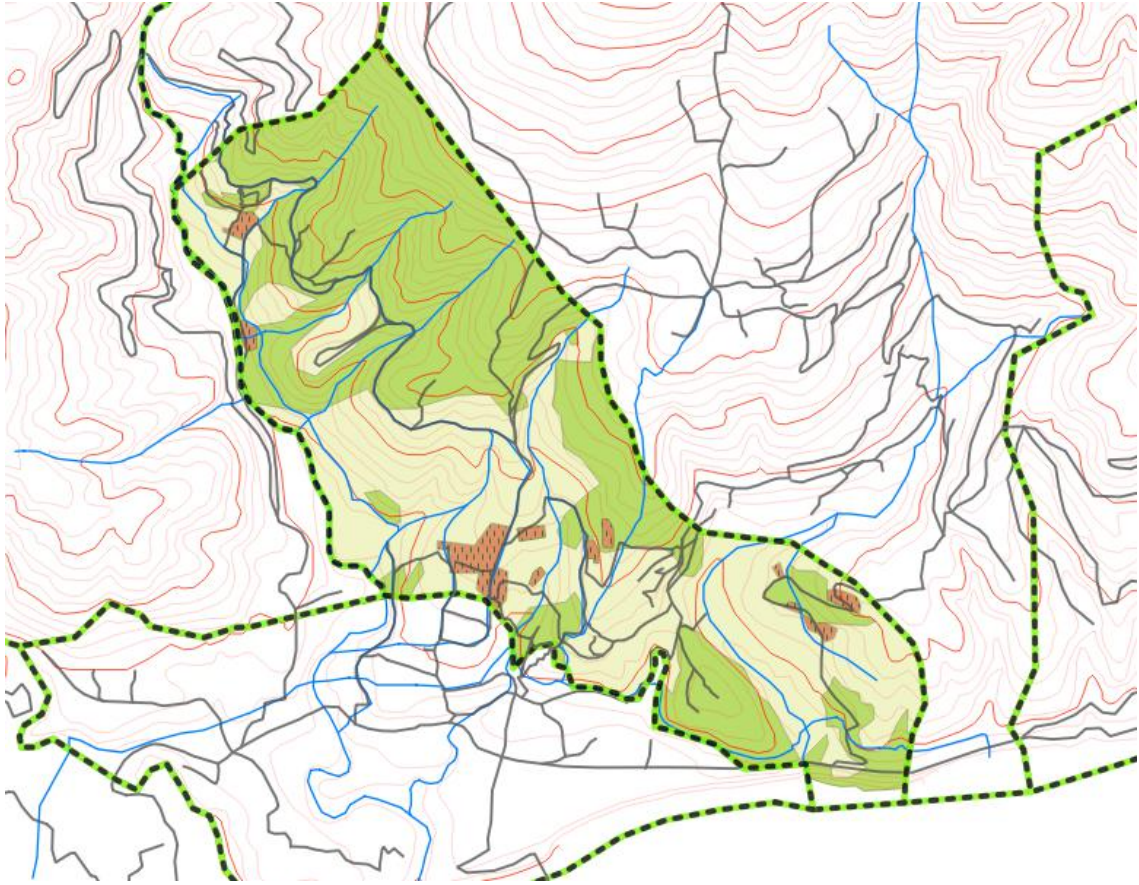
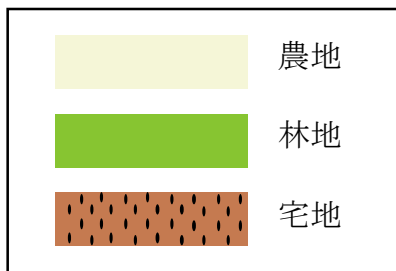


図 4- 24 1970 年当時の中後入土地利用図 (S=1/8000)



・ 1970 年以降の土地利用

1970 年以降は西ノ谷のおよそ半分、宅地のほとんどが林地に置き換わる。特に西ノ谷と中ノ谷の間にある農地は、ほぼ全て林地に置きかわる。かつて集落北側の農地も林地に組み込まれたため、集落から金峯神社を認識することが出来なくなる。また、広葉樹が多かった周囲も金峯神社の境内を含めて針葉樹の割合が多くを占めている。

中ノ谷は、特に集落の西側の尾根の農地が林地に置きかわる。また、墓地群 B5 付近の農地が再度林地に置き換わる。また、林地で行われる生業が必要なくなることによって、集落の人々が林地に立ち入ることがなくなる。このため、林地まで管理が行き届かなくなっている。また、それに伴い、墓地 B3 が移設される。

東ノ谷は、集落から最も離れた物部川沿いの農地が林地に置き換わる。

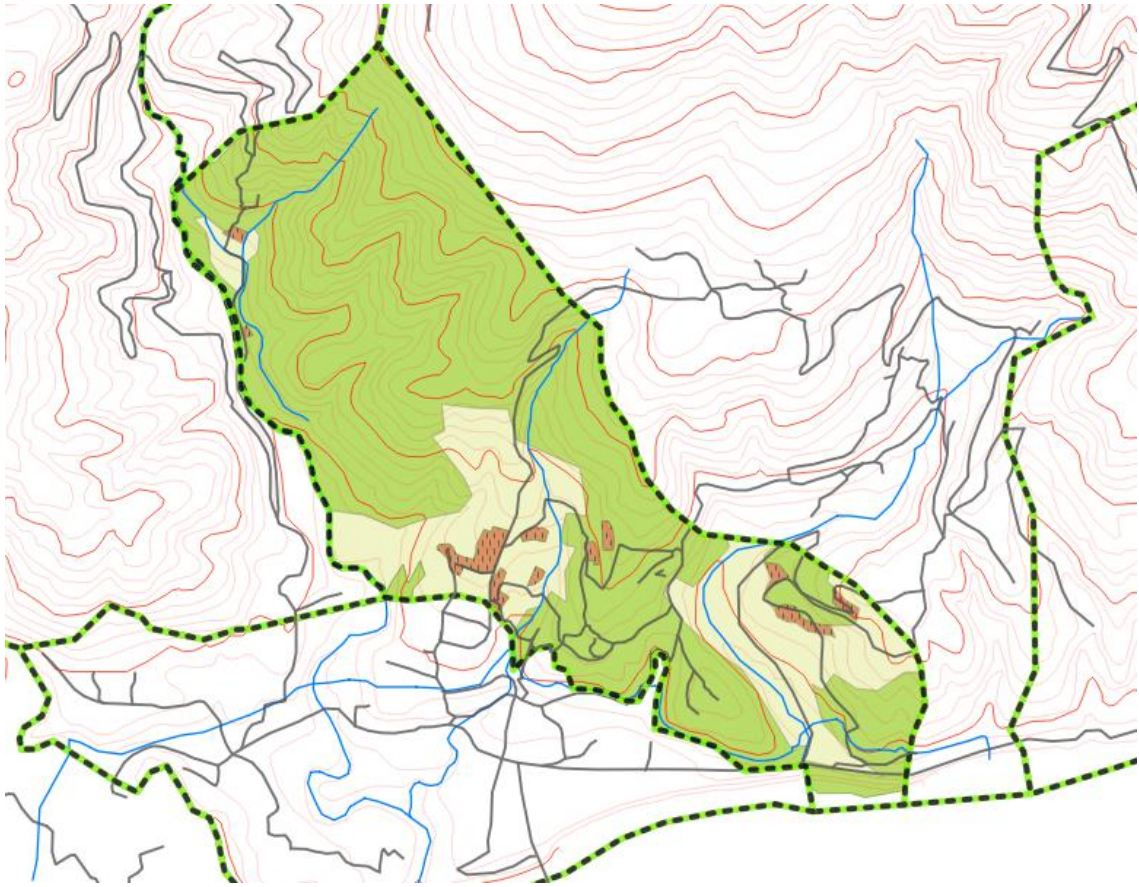
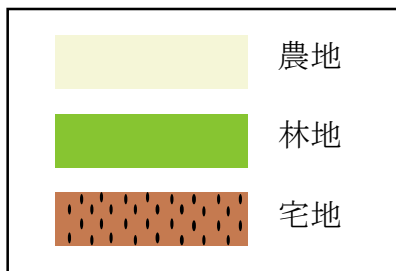


図 4- 25 2016 年現在の中後入土地利用図 (S=1/8000)



4-4. 有谷の変遷

4-4-1. 街路と河川・水路の変遷

・ 1945 年当時の街路と河川・水路

有谷を貫く主要街路は図 4-26 に示す通り、8 本存在する。本村東地区の集落から中の谷を通ってイチドウへと向かう街路（街路 2）、中ノ谷で説明した東の谷を抜けてスズハラまで向かう街路（街路 3）、本村から中後入を経由しムカイに向かう街路（街路 5）、県道 218 号線から東ノ谷を経由せずスズハラへ向かう街路（街路 9）、オドリバからムカイへ向かう街路（街路 10）、ムカイからイチドウに向かう街路（街路 11）、イチドウから大後入を経由してヌタへ向かう街路（街路 12）、佐竹からヌタに向かう街路（街路 13）、ヌタから白川を交差し、西又まで向かう街路（街路 14）の街路を有している。街路 2、街路 3、街路 5、街路 9 は本村沿いの県道 218 号線と起点として目的の集落へ向かう共通を持つ。街路 10、街路 11 は、県道を起点とせず、有谷の集落同士を結ぶ機能を有している。また、街路 10 は有谷川から引水している水路を併結しており、標高 175m 付近を地形にそって並行に移動する特徴が見られる。街路 12、街路 13 は共に有谷の山頂付近のヌタに向かう街路である。

また、聖地（村社）への参道は三本、墓地への参道は六本確認できた。街路 10 から竈戸神社につながる参道（参道 5）、街路 11 から聖神社につながる参道（参道 6）、ヌタから神社につながる参道（参道 7）がある。全ての参道は主要街路から始まる。特に竈戸神社は集落から遠く、集落にとって接続する主要街路も参道の一部の機能を有している。また、図 4-27 に墓地へと向かう参道を示している。墓地群の数に対して葬地の参道が少ないのは、谷尾根の集落の葬地は主要街路に直接接続しているためである。オドリバの葬地はムカイに立地する墓地 D1 であるため、街路 10、街路 5 が参道として機能している。

その他の街路の特徴として、イチドウで多くの街路が確認できる。目的は、イチドウが持つ農地へのアクセス、有谷川へのアクセスの二つである。

主な河川は、有谷川である。有谷川は現在こそ後入川ほどの流量は無いが、れっきとした流域圏を持ち、現在も多数の水路を抱えていた。有谷川は源流を佐竹側とヌタ側にもつ。佐竹側に源流を持つ方は竈戸神社を有している。また、ヌタ側の源流は、ヌタを経由した水路がそのまま有谷川に合流している。イチドウの西側にはテンヤ川の支流が流れていた。

また水路は、有谷で十二本の水路が確認できた。そのうち、六本が有谷川、八本が白川から引水している。かつては有谷川を起点に二本の水路がイチドウ方面に、一本がオドリバ方面に、2 本がスズハラ方面に、一本がスズハラを経由し東ノ谷方面へ流れていた。中後入で説明した水

路 6、水路 7 以外に、街路 10 に併設して流れている水路（水路 8）、水路 1 の下を流れ西ノ谷の集落まで流れている水路（水路 9）、が存在する。水路 8 は通称ウワユ、水路 9 は通称シモユと呼ばれている。また、イチドウ方面に流れる水路も、上流部から取水している水路（水路 10）、下流部から引水している水路（水路 11）と共に農業用水、生活用水に利用されていた。

また、ヌタは白川から引水している水路（水路 12）と使用した水を有谷の下の方へ流す水路（水路 13）がヌタにおける水路の基本骨格である。水路 12 は番地状の北部の集落付近を通過し、日吉神社そばのため池まで運んでいる。水路 12 やため池から盆地底の農地へ南北に 5 本の水路を介して供給されていく。ヌタを通過した水は、水路 13 を介して有谷川へ流れていく。また、有谷は中後入では見られなかったため池が 1945 年当時は存在した。ため池はイチドウに 3 カ所、ヌタに 2 カ所ある。広大な農地を有し、かつ水脈の乏しいイチドウ、ヌタに安定した水の確保と供給の目的があったと思われる。

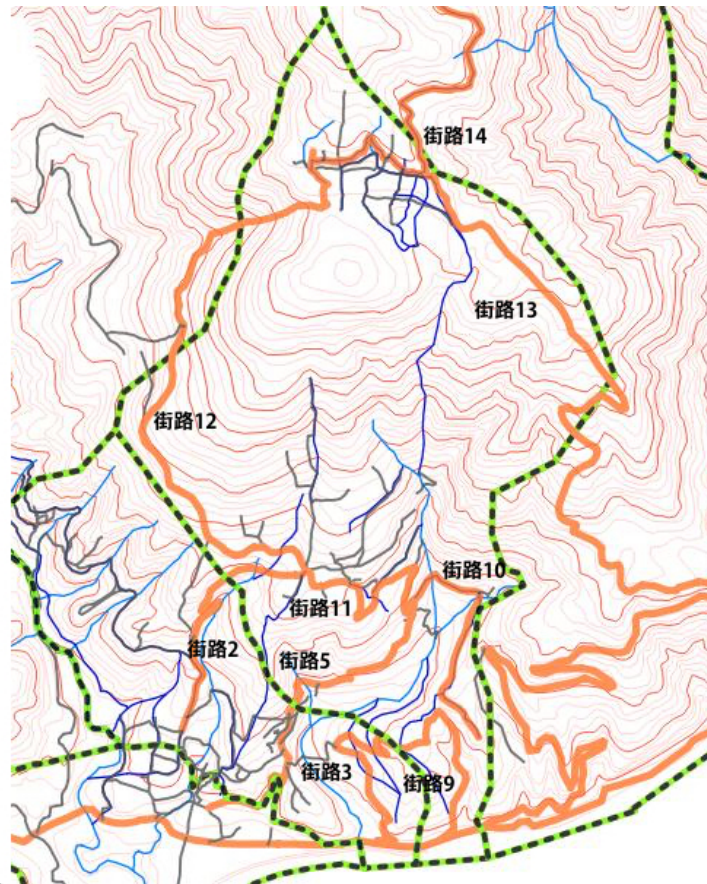
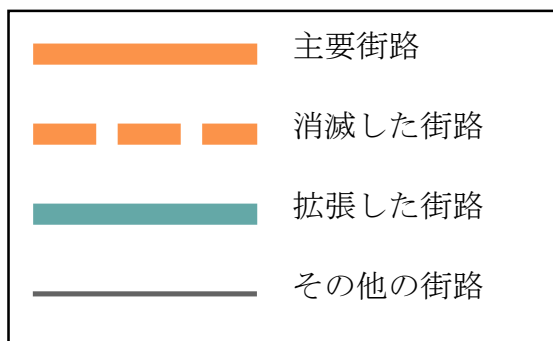


図 4- 26 1945 年当時の有谷街路網 (S=1/15000)



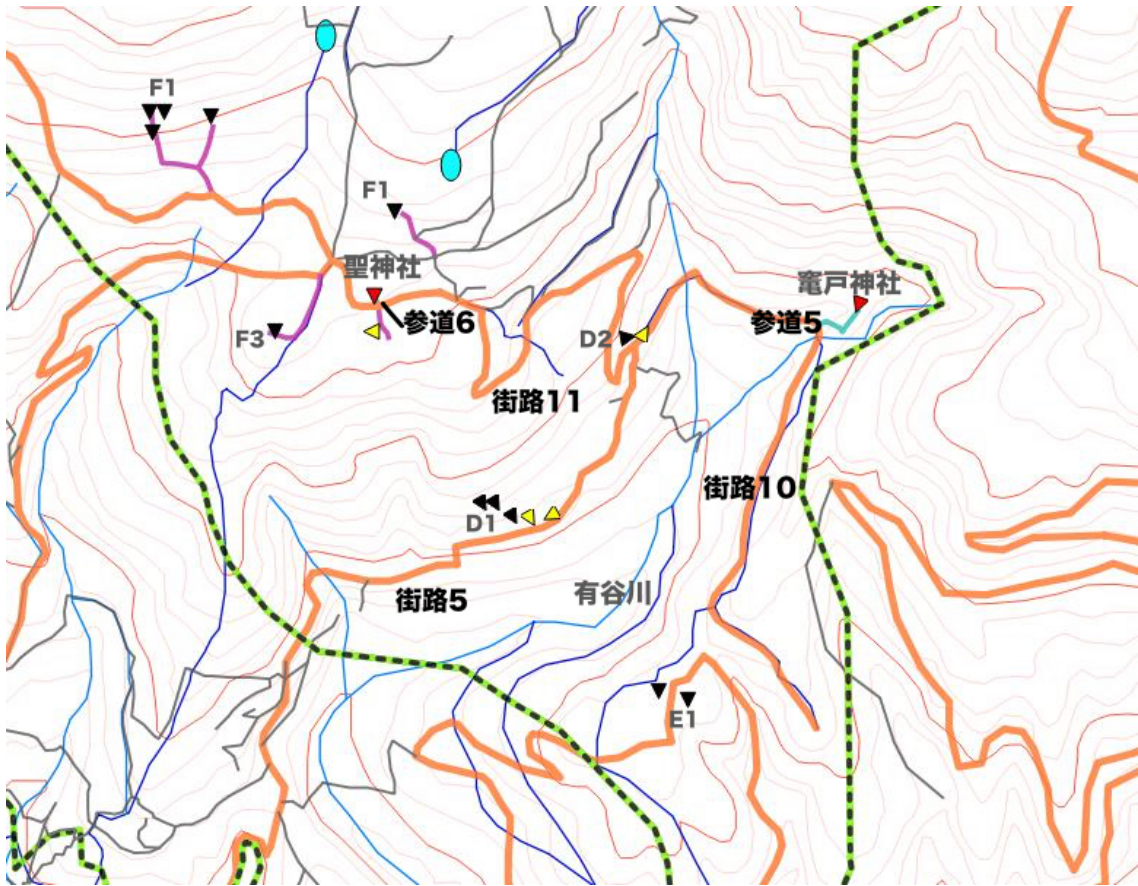
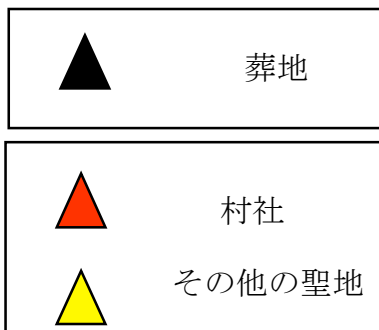


図 4- 27 1945 年当時の有谷ムカイ付近の街路網 (S=1/5000)



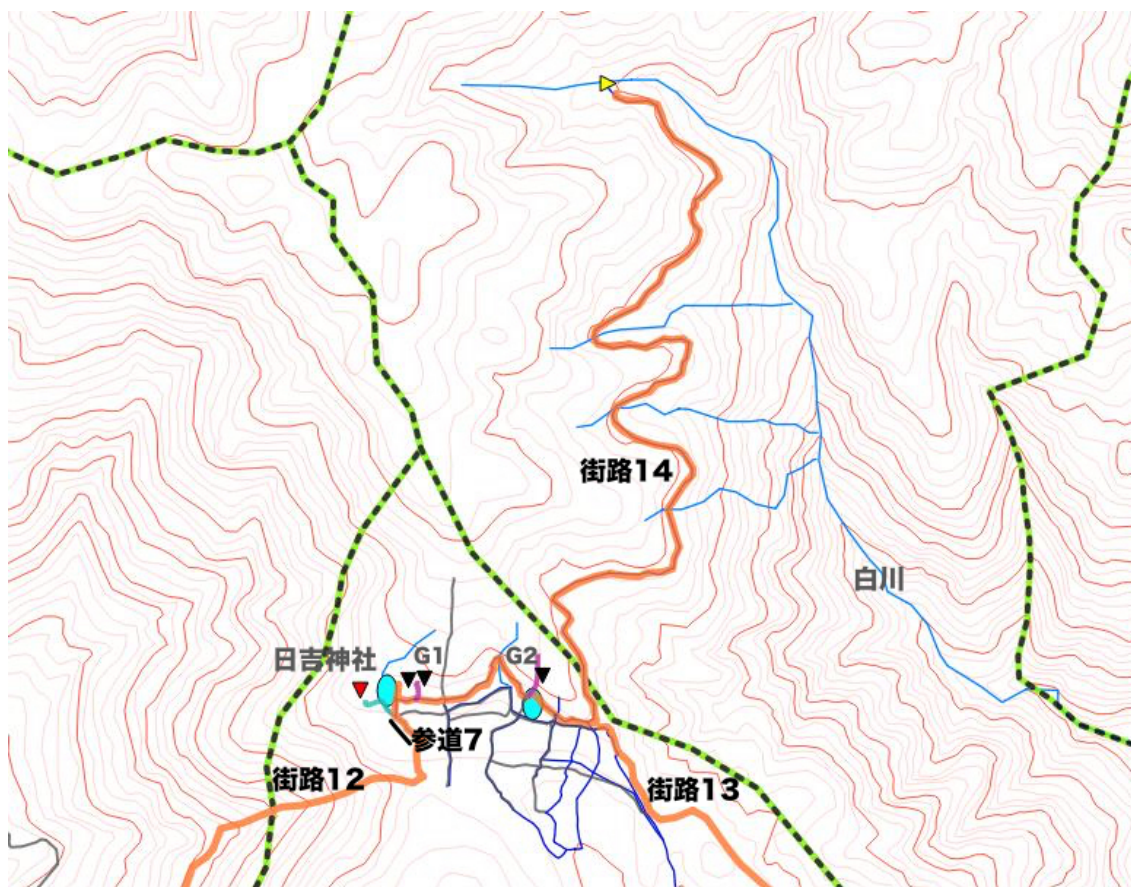
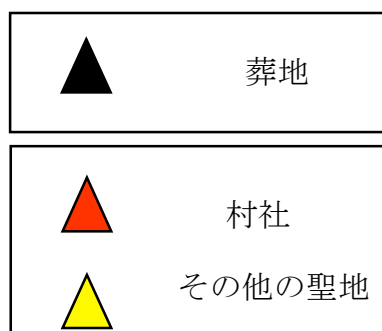


図 4- 28 1945 年当時の有谷ヌタ付近の街路網 (S=1/8000)



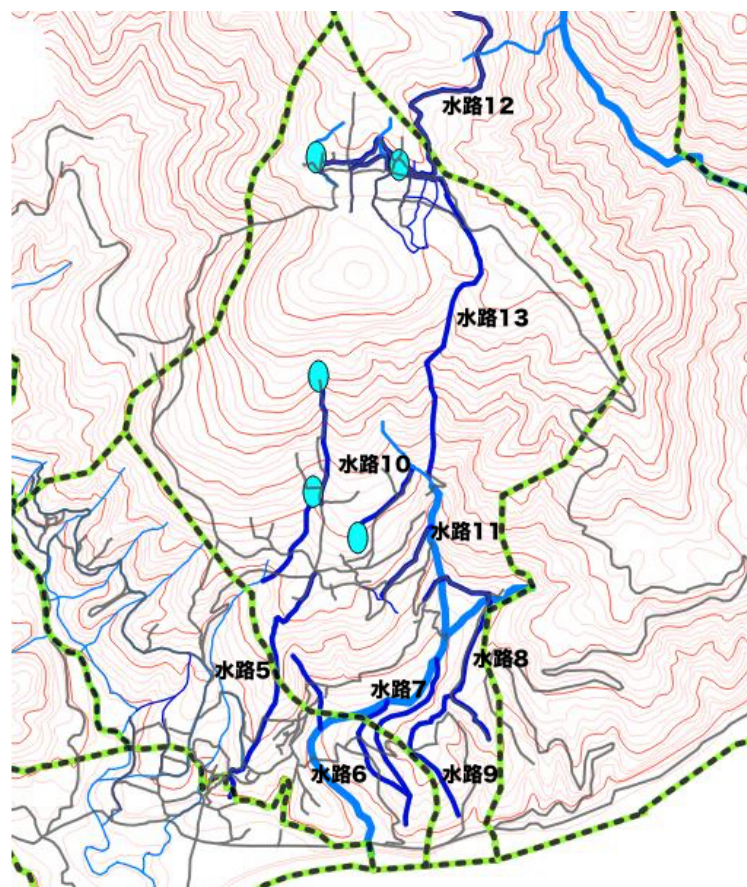
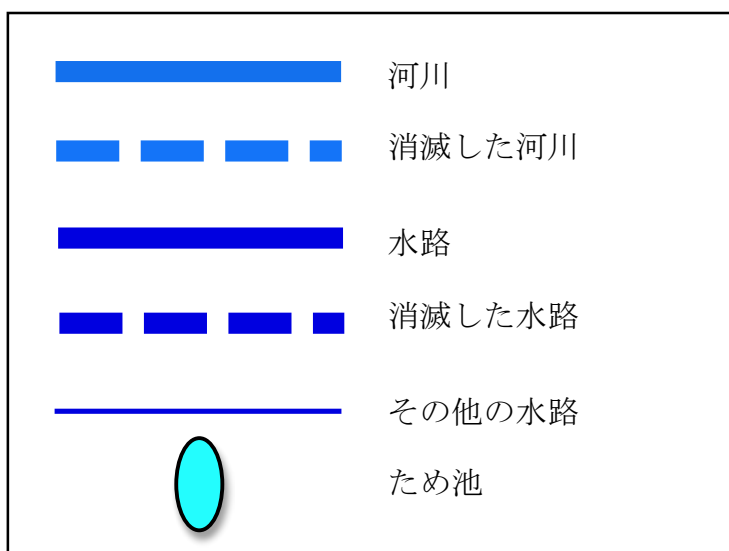


図 4- 29 1945 年当時の有谷水路網 (S=1/15000)



・ 1970 年当時の街路と河川・水路

主要街路では、街路 9 の担っていた役割が街路 3 に完全に置きかわり消滅する。また、昭和 30 年代にスズハラからオドリバを経由して佐竹へ接続する街路（街路 15）、ヌタから西又へ至るイチドウから有谷川の谷底を経由しムカイへと至る街路（街路 16）、ヌタから西又へ至る街路（街路 17）が新設される。また、新設される街路は乗用車の通行を考え設計されているため、幅員が広く設定されている。更に、集落同士の接続から、街路 5、街路 11 が道路幅員及拡張及び、コンクリート舗装される。

また、聖地・葬地の参道は変化が無かった。

骨格河川の有谷川に変化はなかったとされている。しかし、イチドウ西側のテンヤ川支流は斜面上の農地の縮小とともに枯れていった。

水路は、水路 7 が消滅したのみで水路の変化はほぼ無かったと見られている。

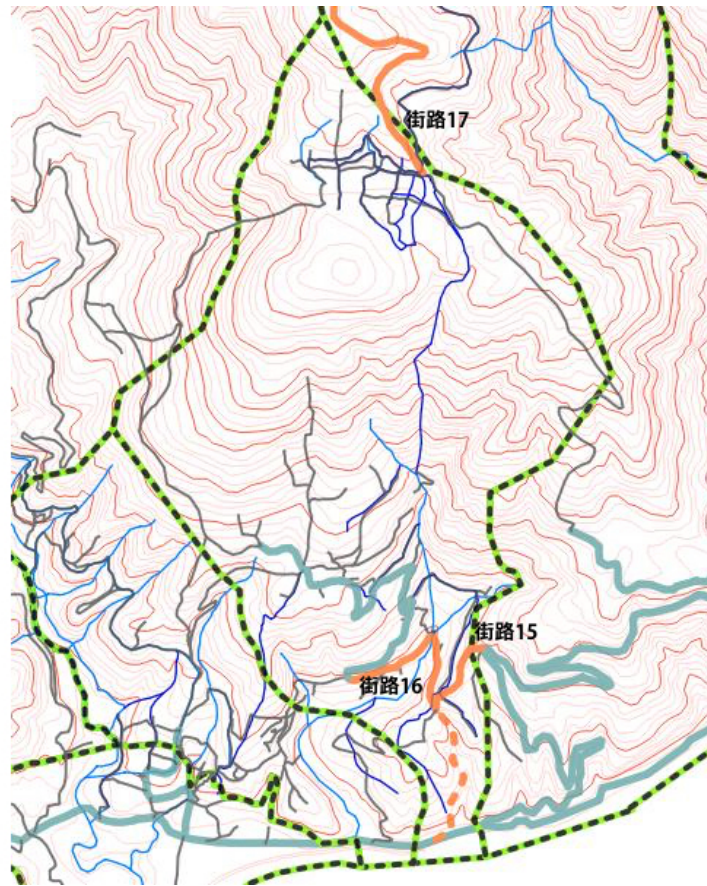
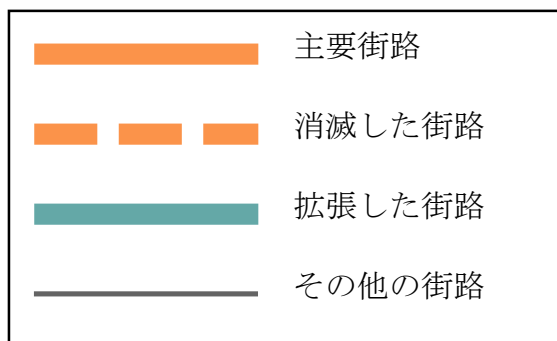


図 4- 30 1970 年当時の有谷街路網 (S=1/15000)



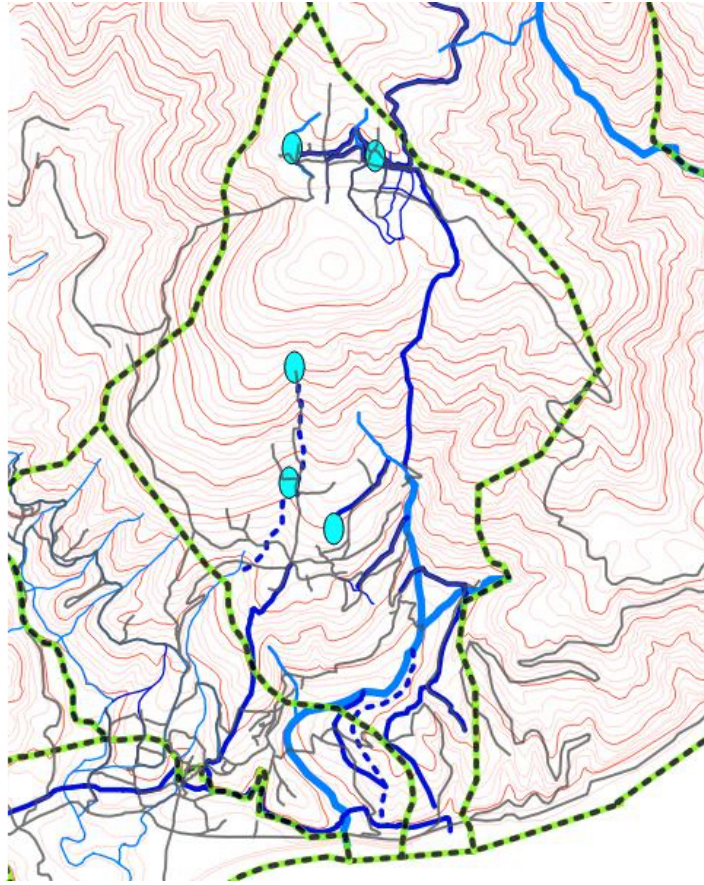
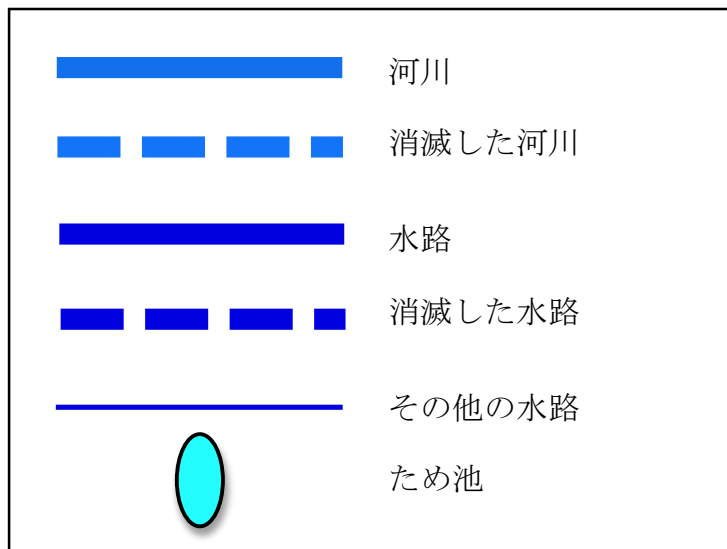


図 4- 31 1970 年当時の有谷水路網 (S=1/15000)



・ 1970 年以降の街路と河川・水路

主要街路は、街路 5、街路 16 の舗装された部分の道路幅員が更に拡張されることとなる。また、車の往来を考慮した林道（街路 18）が新設され、佐竹からヌタへ向かう新たな骨格が作られる。そのため、車の通行が不可能な街路 12、街路 13 が役割を失い消滅した。

また、聖地に向かう参道では参道 7 が消滅した。氏子の集落であったヌタの人々が姿を消し、社も取り壊されたことが原因として挙げられる。しかし、同じく廃村となったイチドウにある聖神社への参道 6 は残されている。違いは、残存する主要街路に隣接していること、そもそも参道の経路が短いこと、対象の神社が残存していることの違いによるものと推測できる。また、1970 年から現在まで集落として成りたっているムカイ、スズハラ、オドリバの谷尾根地形に属する集落の墓地群は、残存する主要街路に面していることなどからもそのままであるが、人が居なくなり集落として死滅したイチドウ、ヌタなどの古い墓地群は廃墓となっていることから、そこにつながる参道も消滅することになる。

先述した通り、イチドウ、ヌタは 1970 年代以降に廃村したため、集落間で帰結していた農地に向かう街路などは、一気に消滅することになる。

ヌタ側の有谷川の流量は減少した。有谷川に流れ込む水路からの水が途絶えた要因が大きいと思われる。佐竹側の有谷川の流量は変化が無かった。

また水路は、イチドウとヌタを経由する水路は全て廃止した。また、それと同時に接続するため池も水が行き届かなくなり廃止となった。理由は先述した通り、廃村となったことで水路の必要性がなくなったことであると思われる。

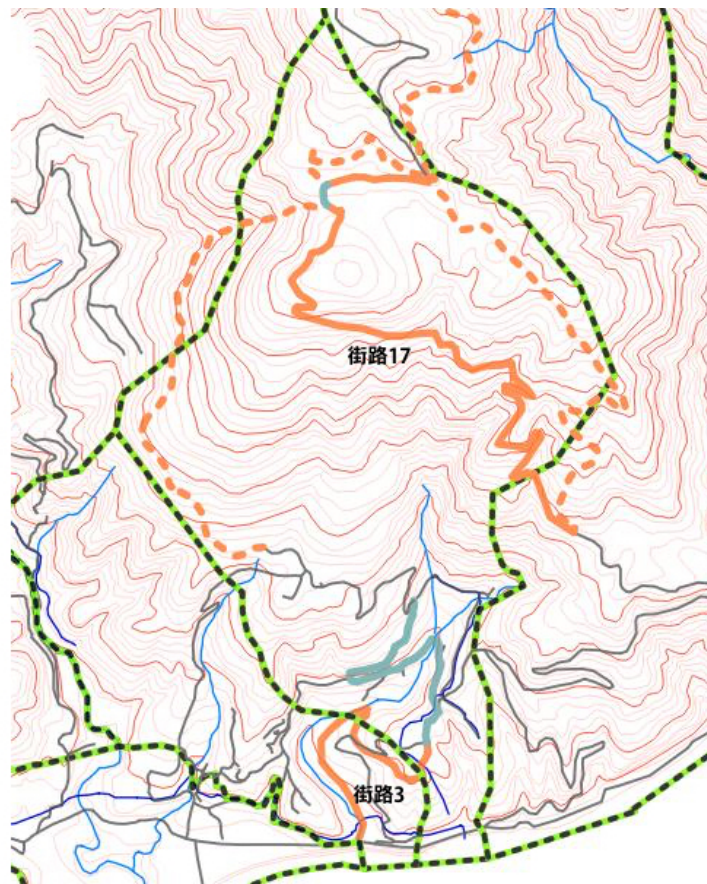
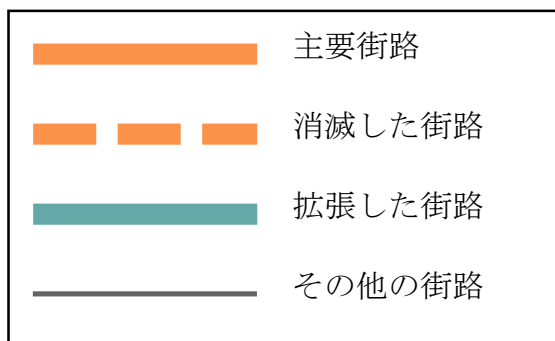


図 4- 32 2016 年現在の有谷街路網 (S=1/15000)



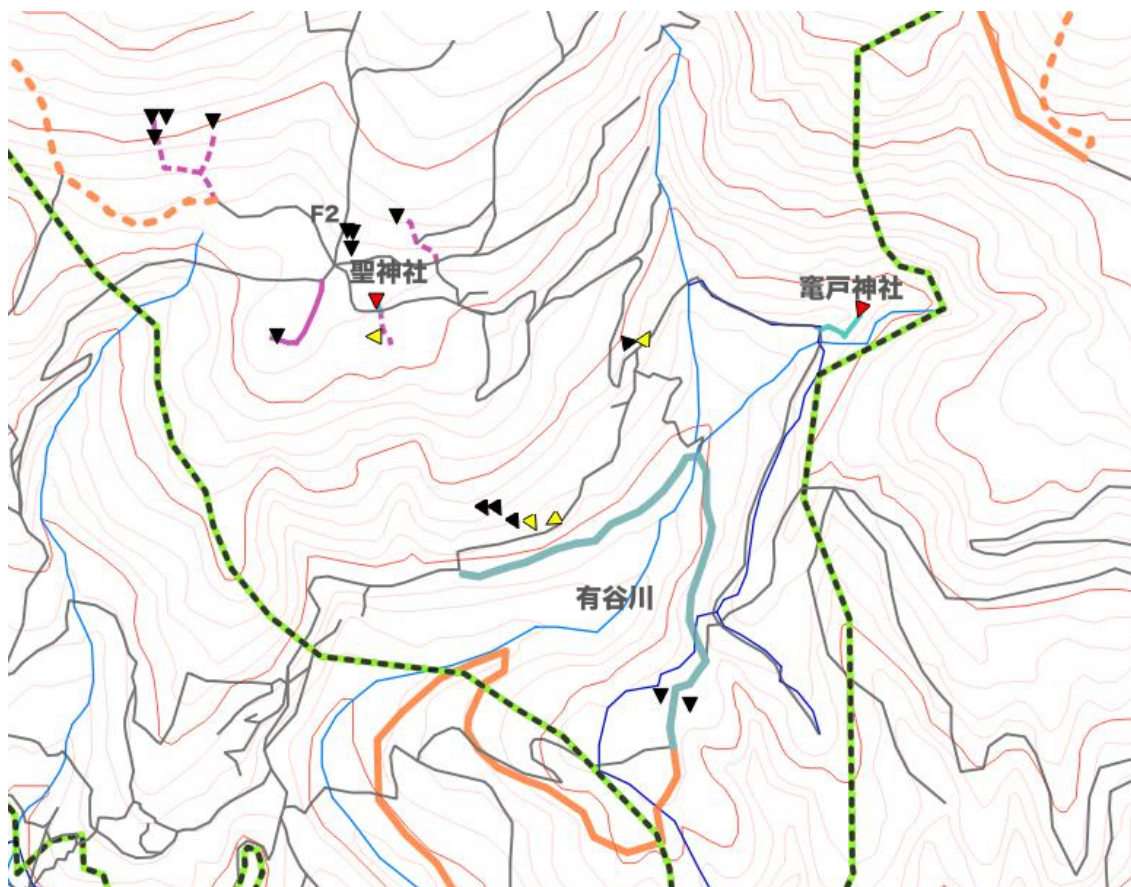
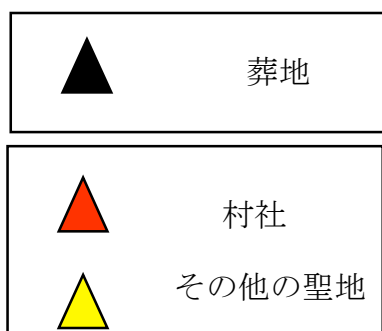


図 4- 33 2016 年現在の有谷ムカイ付近の街路網 (S=1/5000)



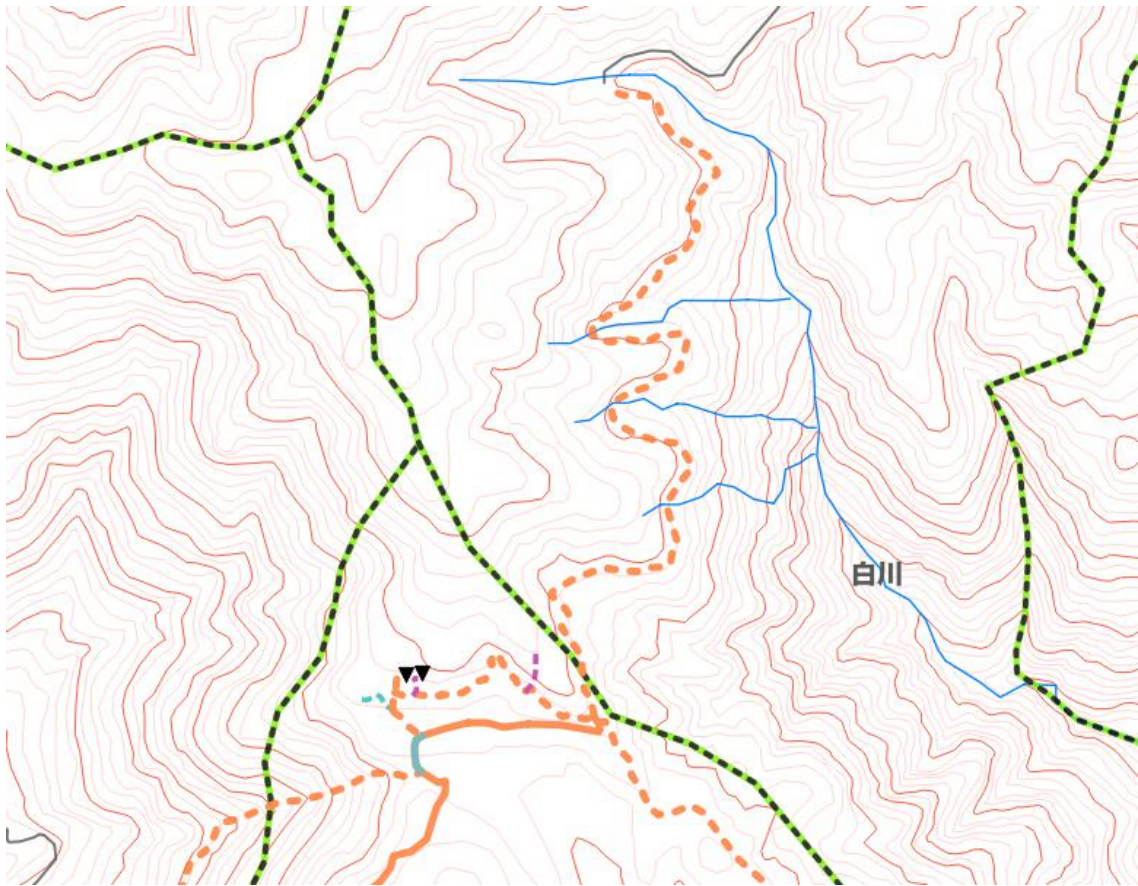
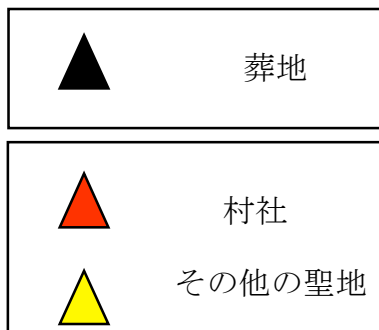


図 4- 34 2016 年現在の有谷ヌタ付近の街路網 (S=1/8000)



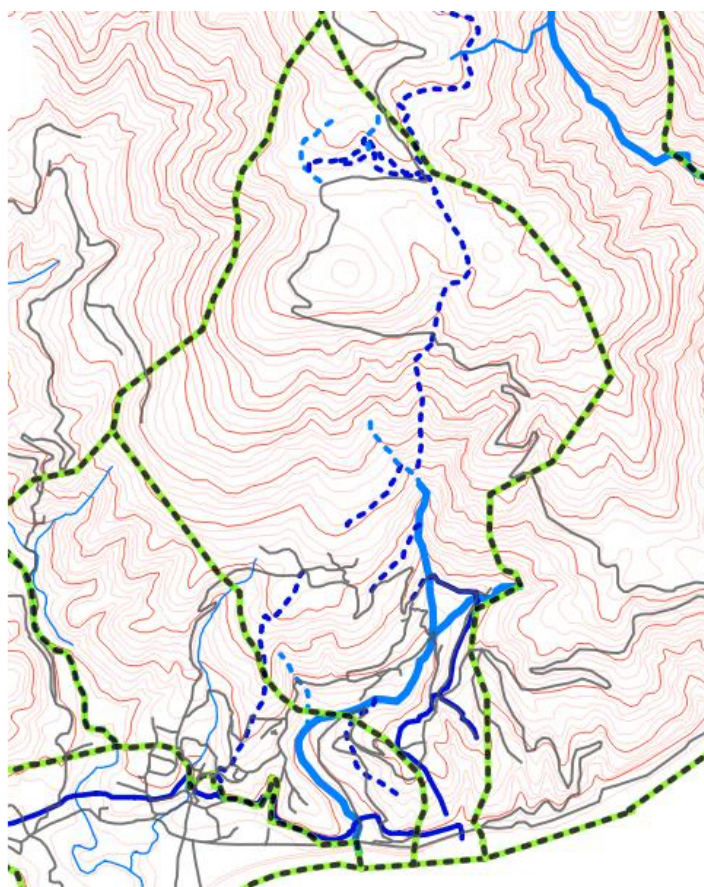
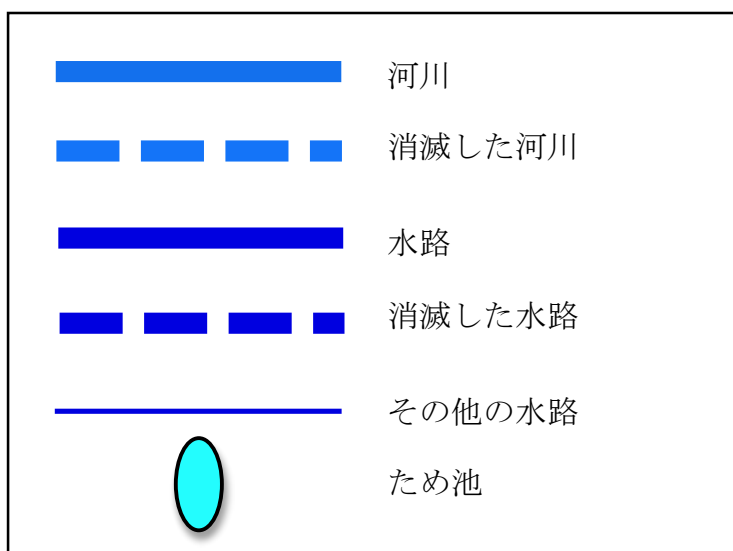


図 4- 35 2016 年現在の有谷水路網 (S=1/15000)



4-4-2.土地利用の変遷

・ 1945 年当時の土地利用

ムカイは有谷川から農地が形成されている。農地はヌタ側と佐竹側の有谷川を中心に北東部の尾根まで広大な棚田を有していた。また、南西に向かって流れる有谷川にそって棚田が続いていたと見られている。ムカイの集落は有谷の北側の斜面の農地と林地との境界に位置している。

スズハラ・オドリバの南側は棚田で作られた農地が形成されている。しかし、スズハラ・オドリバの北部は林地となっている。林地となっている領域は北斜面となっており、斜面に陽が入らないため、農地としての生産性が低いためであると考えられる。また、林地によってスズハラの集落とオドリバの集落は同じ地形に立地しているが、その存在は 1945 年頃には既に互いの場所から認識できない。

イチドウは台地の地形を中心とした集落と聖神社と有していた。平地は宅地とその南には田園が存在していた。また、集落より西にも広大な農地が中後入から続いている。集落よりも標高の高い斜面には基本的に林地が形成されている。しかし、比較的斜面が急でない場所は、所々農地が形成されている。

盆地状のヌタは、中心は緩やかでかつ広大な棚田が形成されている。また農地は、大後入側の急斜面を農地が形成されていた。集落は点在しているが、おおよそ、盆地の中心より北側に分布している。宅地と林地の境目に墓地群が集まっている。また、街路 13 の道中に広大な農地が形成されていた。佐竹からヌタへ行く道中、この広大な農地の景観が見えていた。

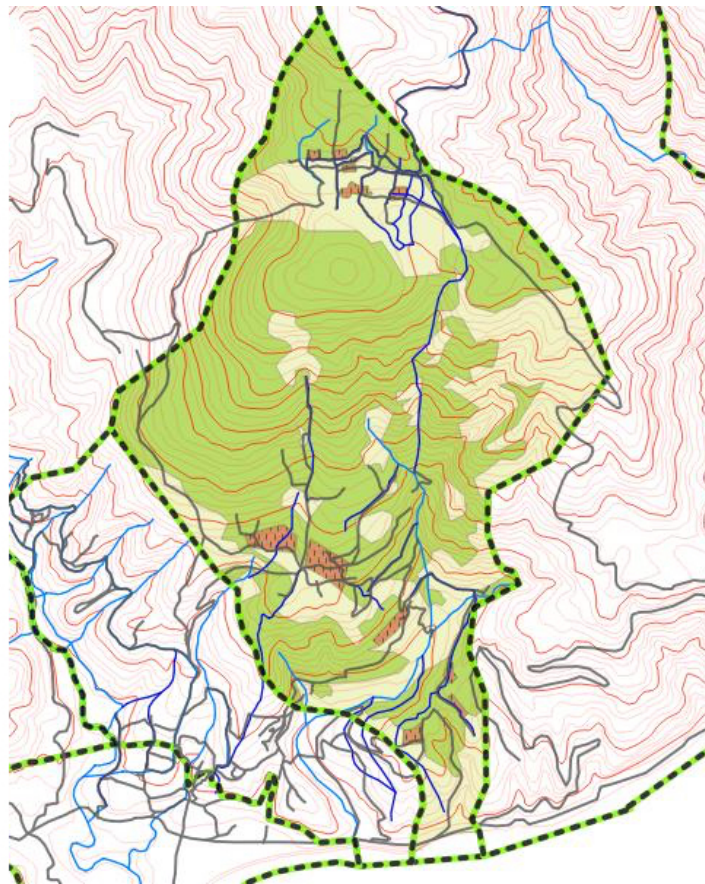
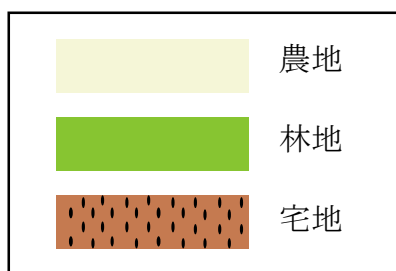


図 4- 36 1945 年当時の有谷土地利用図 (S=1/15000)



・ 1970 年当時の土地利用

ムカイの一部に農地の縮小が起こったこと以外には、ムカイを始め、スズハラ・オドリバ農地や林地、集落の目立った変化は確認されていない。

イチドウでは、集落より西にあった広大な農地はほとんど利用されなくなり、林地となっている。集落よりも標高の高い斜面の農地は半分程林地に置きかわっているが、それでもまだ所々農地が残存し利用されていた。また、宅地は半分程減少している。

ヌタは、1945 年頃から変わらず盆地の中心は広大な棚田が維持されている。しかし、大後入側の急斜面の農地は消滅した。集落は半分程減少している。また、街路 13 の道中の農地がほとんど消滅していることで、景観の著しい変化があった。

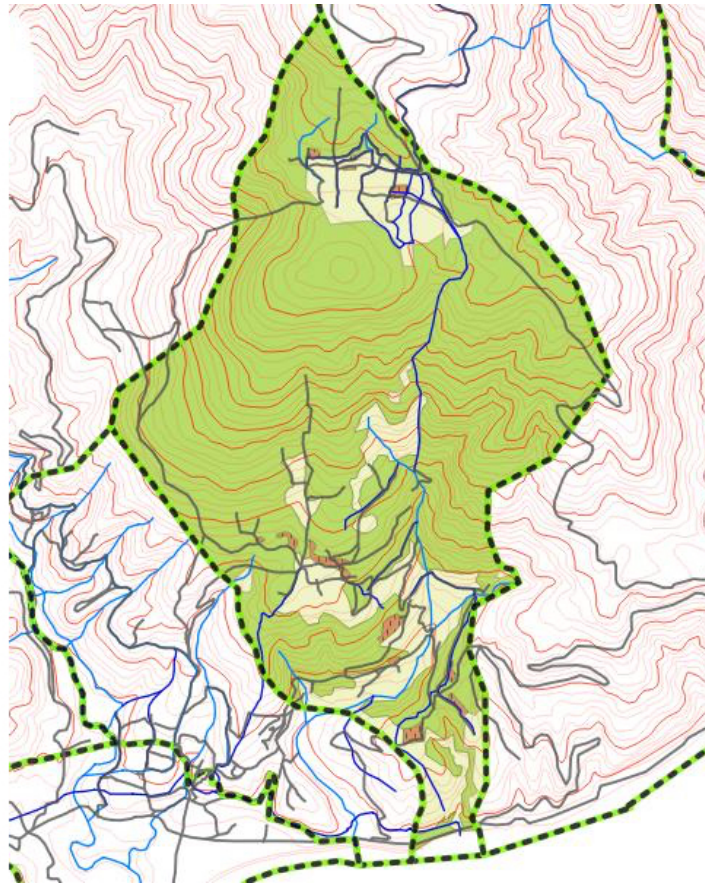
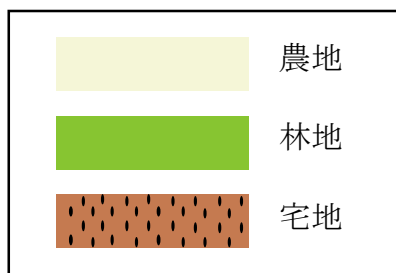


図 4- 37 1970 年当時の有谷土地利用図 (S=1/15000)



・ 1970 年以降の土地利用

オドリバ・スズハラの南斜面の農地の縮小が起こったこと以外は、ムカイを始め、スズハラ・オドリバの農地や林地、集落の目立った変化は確認されていない。

イチドウに残っていた農地のほとんどは林地に置きかわる。また、宅地は一部残っているが、人々は残っておらず、空き家となっている。1970 年以後、聖神社は社殿をコンクリートに変化した。氏子がイチドウから居なくなるが、建物自体は現在も残っている。農地が縮小したことにより、墓地は中央に移動している。

盆地状のヌタも、イチドウと同じく農地はほぼ全て林地に置き換わる。ほとんど人が寄り付かないため、林地は管理されていない。集落は一軒の空き家を最後に全て解体されている。日吉神社は解体され、境内はその跡を残すのみとなり、他の林地と同等の空間を有している。

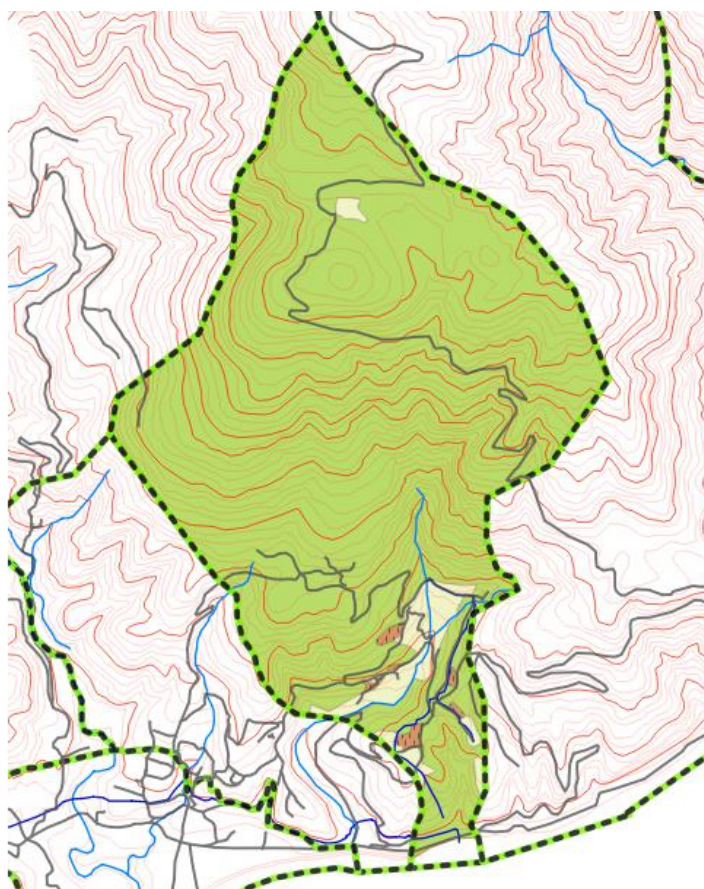
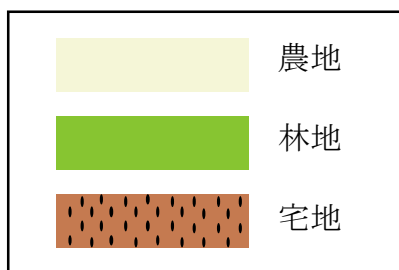


図 4- 38 2016 年現在の有谷土地利用図 (S=1/15000)



4-5. 中後入・有谷の空間と変遷の比較考察

今回は比較考察するとき、地形の形状の共通点が見られる中後入の西ノ谷（谷地形）-中ノ谷（尾根地形）と有谷のムカイ（谷地形）-スズハラ・オドリバ（尾根地形）で比較する。

急峻な谷で狭い平地を有する西ノ谷、なだらかで大きな平地のもつ尾根地形上を有する中ノ谷の谷尾根を有する中後入、大きな谷で広大な棚田を有するムカイ、尾根の上が小さな平地上のスズハラ・オドリバの谷尾根を有する有谷を比較する。まず、2つの大字が有する谷と尾根はその地形において、農地として利用できる土地の広狭の相関が対比的である。また、中後入は集落のある谷地形と尾根地形の間に2つの尾根が存在し、互いが認識することが出来ない。しかし、有谷では谷と尾根の距離は短く、お互いの集落が認識できる位置にある。このように、2つの大字は谷と尾根の地形の距離とその認識に相違が見られる。

原型の主要街路では、谷尾根の集落を繋ぐ街路に共通点が見られた。また、その街路は等高線に沿うような勾配の少ない道で、かつ水路を併設している点も共通していた。しかし、現在の中後入では共通していた主要街路は消滅し荒れはてているが、有谷では歩行専用の街路として現在も使用され、また併設される水路も現役として活動している。

中後入は後入川、有谷は有谷川という、2つの大字は共通で構造となる主要河川が存在する。また、主要河川から水路を引き、尾根地形を有する集落へ流れているという共通も見られる。しかし、現在、中後入の水路はほとんど枯れているのに対し、有谷は現在も尾根地域まで流れている水路が多い。

聖地では、中後入は2箇所、有谷では1箇所存在している。中後入は谷集落の氏子を持つ神社と尾根集落の氏子をもつ神社のそれぞれ有している。有谷は谷と尾根の集落全てが共通の氏子の神社に属する。谷地形に属する神社は、1945年頃では共通して河川そばでかつ農地と林地の境に分布している。また、葬地では、中後入は谷と尾根を繋ぐ主要街路から分岐している参道が伸びている。また、共通して尾根側に墓地を設けている。有谷では、集落ごとに葬地の分布が異なる。

1945年頃は、谷尾根共に棚田を造成して農地を造成していたことは共通している。また、林地の分布に関しても、標高の高い程、林地が形成されていることが多く、中後入の集落の分布は谷の河川を中心に形成していたが、有谷は谷の中央に分布しているのではなく、南向き斜面に分布している部分に違いがある。尾根の集落も、中後入では本村に隣接する形で背後に農地が用意されていたが、有谷においては尾根の上部の平地には集落があり、集落より下の標高に農地が分布していた。

現在は、農地が減少していることは共通している。しかし、その減少率が中後入と有谷で異なる。中後入の農地は谷地形での林地への変換が著しく、谷地形の農地はほとんど消滅してい

る。尾根地域でも同様に減少しているが、まだ、まとまった農地が存在している。対して有谷の農地は谷地形での減少率が低く、現在も広大な農地の面積を有しているが、尾根地形の農地は、面積の減少の割合が高い。集落における宅地面積については、中後入の谷地形にのみ著しい減少が見られたが、有谷は、谷尾根地形どちらの集落においてもほとんど減少が見られない。

第 5 章 中後入・有谷の空間構成

5-1. 中後入の空間構成

図 5-1 は第 4 章の空間と変遷の図に、里山の空間構成モデルの地形の線を引いた図である。改めて、西ノ谷が谷地系、中ノ谷と東ノ谷が尾根地形であることが分かるだろう。西ノ谷と中ノ谷の間は約 500m 離れており、その間に 2 本の尾根が通っている。このため、西ノ谷と中ノ谷はお互いを視認することが出来ない。同じ中後入でありながら西ノ谷と中ノ谷では信仰している氏神も異なるため、別々の空間的特質が見られると考えた。また、中ノ谷と東ノ谷の間に尾根が通っており、お互いの集落は視認できない。しかし、共通の氏神を信仰していることから、中間に尾根があることが与える空間的特質が存在すると考えた。このような仮定から、2 つの空間について別々に考察することで、中後入の空間的特質について考えていく。

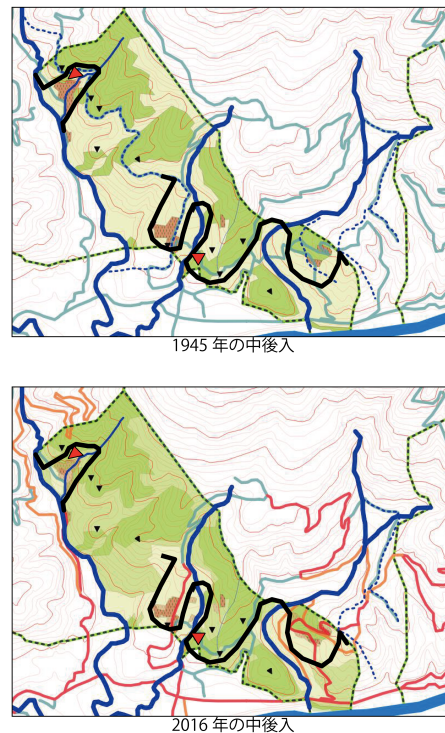


図 5-1 中後入の空間（上：1945 年、下：2016 年）

5-1-1.西ノ谷

・原型

西ノ谷は谷空間で、かつ一つの起伏の中で世界が構成されていることが特徴である。空間構成の中心は河川であり、世界は一方向なもので完結している。集落を中心とすると、前後に農地が広がる。水分型神社の配置は集落からは視認することができ、異界の空間のサインが原型の空間構成では集落からでも認識できることが理解できる。金峯神社は谷奥の異界と山岳信仰が純度高い空間を有していることが分かる。生活空間の縁の基地は金峯神社の外に配置されることで、自然中心からくる波動を生活空間に取り込んでいる。

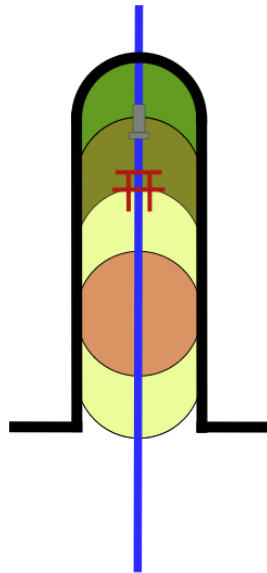


図 5- 2 西ノ谷の空間構成（原型）

- ・ 現在型

現空間では他界の領域が集落の縁まで迫る。現在型の空間構成では、集落よりも先は他界の空間となっているため、現存している金峯神社は、生活空間の中の聖地としての原型の認識とは異なる。また、ノの空間が他界の林地に変わる。この変遷によって従来の墓地が他界空間に放置され、墓地空間が波動の影響を受けるような措置が得られなくなる。現在型の生活空間は集落と農地の空間のみとなり、自然空間とは切り離されている。

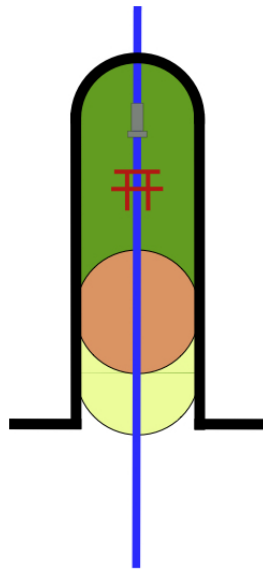


図 5- 3 西ノ谷の空間構成（現在型）

5-1-2.中ノ谷

・原型

尾根の縦軸方向に空間軸が生まれている。中央は水路が通っており、後入川から取水した地は中ノ谷では他界空間の位置に置かれているという認識にある。しかし、氏神の須賀神社は地形の構成軸から歪なれている。縦貫する水路はそのまま集落を貫き、尾根下の本村に注がれる。ノの空間は中間領域として他界空間の狭間にあり、林地にありながら墓地の領域と神聖な空間の双方を充たしている。つまり、林地にありながら葬地は生活空間の中に組み込まれる。本村の集落は、中後入の集落とは続いているように見えるが氏神は異なるため、ここでは他界の都市空間として扱うことができる。

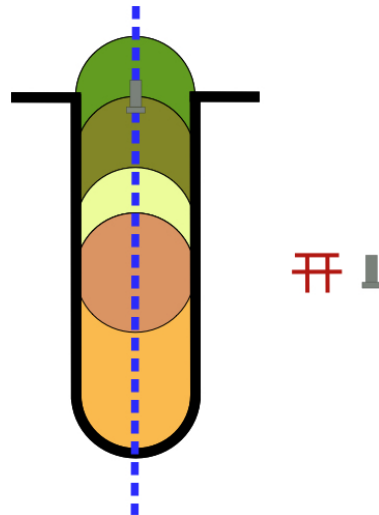


図 5- 4 中ノ谷の空間構成（原型）

・ 現在形

中ノ谷でも、西ノ谷と同じくノの空間が他界の林地に変わる。この変遷によって従来の墓地が他界空間に放置され、墓地空間が波動の影響を受けるような措置が得られなくなる。家中心の生活空間の影響を受けない墓地を農地や集落付近まで移設する動きも見られることから、その領域が由来できつつある。水路が消滅したことにより、山の他界空間から流れていた水路は消滅する代わりに、現在は杉田改良区から引いているため、生活空間内から突如として水脈が現れるため、原型とは水脈の認識に変化が生じていることが分かる。

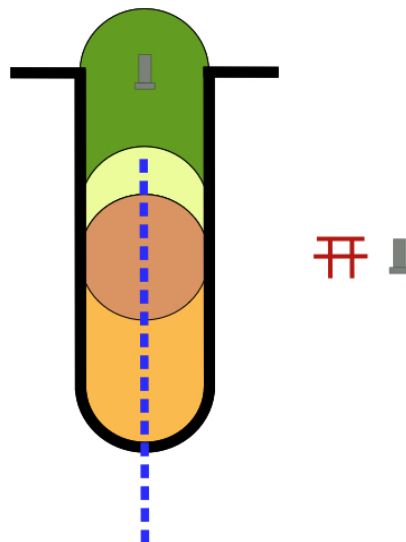


図 5- 5 中ノ谷の空間構成（現在型）

5-1-3.東ノ谷

- ・ 原型

東ノ谷を有谷川の尾根の空間と認めると、有谷川から取水する水路を中央に構成されていると考えることができる。尾根の麓の中央に集落があり、上部に林地が形成されている。林地はひとの入らざる空間であり、その上の標高にあるスズハラとの認識が履かれないことから東ノ谷で独立していると考えられる。また、東ノ谷は構成軸のはずれの須賀神社に異界の領域を設定している上に、人中心の生活空間の縁となる葬地も構成軸の外にあることが特質される。

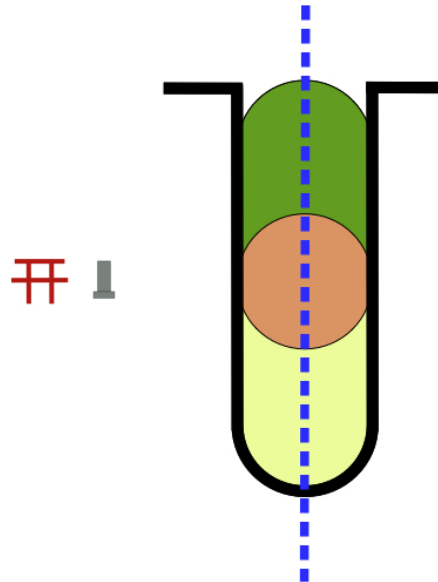


図 5- 6 東ノ谷の空間構成（原型）

・ 現在形

構成軸の土地利用は原型と同じであるが、水路が消滅しているため、構成軸が原型の頃より薄くなりつつある。農地は有谷川から直接取り入れていることから、有谷川が認識の内に入ってくる。すなわち、他界空間にあった有谷川の認識は生活空間の中に入ってくることで認識に変化が生じることが考えられる。また、対岸の聖地・葬地は構成軸の影響を受けてないことが特筆される。

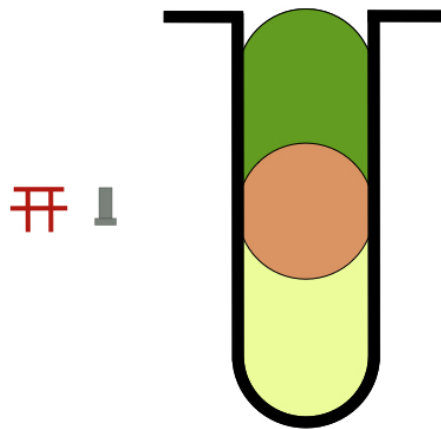


図 5- 7 東ノ谷の空間構成（現在形）

5-1-4.中後入

- ・ 原型

西ノ谷は谷領域で、かつ河川を中心に世界が完結することから、中ノ谷にとってもともと字は共有しているが、別世界という認識で認められる。中ノ谷と東ノ谷は氏神を共有していることから図 5-7 のような数本の構成軸から成り立つ。尾根の上で集落を中心とする構成が成り立つが互いの尾根からは谷を挟んで向かいの尾根を望むことができるため、他の尾根に聖地・葬地を配置することで他界の空間構成を共有している。

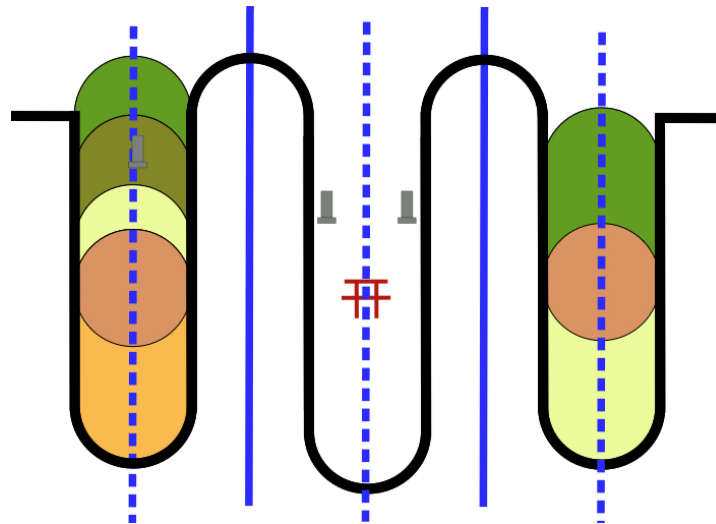


図 5- 8 中後入の空間構成（原型）

・ 現在形

金峯神社を氏神とする空間と須賀神社は空間軸に組み込まれない。変遷を経ることで接続していた街路と水路は消滅することで、他界の先の空間は完全に繋がりを失った。各尾根に水路がなくなり、縦列空間の繋がりが薄くなること以外には中ノ谷と東ノ谷との間の変化は見られない。

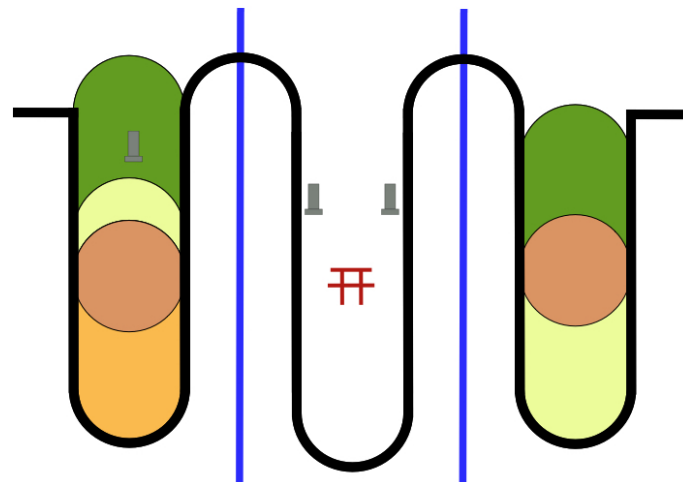


図 5- 9 中後入の空間構成（現在形）

5-2. 有谷の空間構成

図 5-10 は第 4 章の空間と変遷の図に、里山の空間構成モデルの地形の線を引いた図である。改めて、ムカイが谷地系、スズハラとオドリバが尾根地形であることが改めて理解できる。中後入とは異なり、谷地系のムカイと尾根地形のスズハラ、オドリバの間は約 150m しか離れておらず、集落の間を視界を遮る地形が存在しない。このため、ムカイとスズハラ、オドリバはお互いを視認することが出来る。また、信仰している氏神も共有している。このように、谷空間と尾根空間が近接しており、かつ氏神を共有していることから、谷尾根は一つの空間として述べる事が出来ると考えた。

また、谷尾根空間とイチドウとヌタは互いの集落同士が視認が出来ないだけでなく、信仰する氏神もことなる。このような仮定から、ムカイとスズハラ、オドリバをまとめて谷尾根空間とし、その特質について考察する。

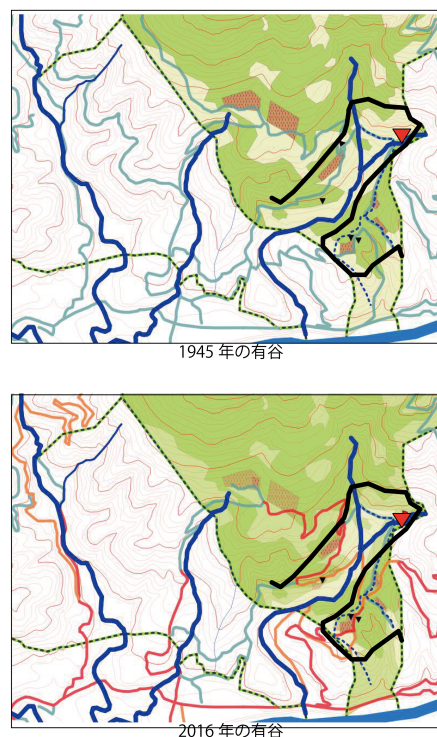


図 5- 10 有谷の空間（上：1945 年、下：2016 年）

5-2-1.ムカイ

ムカイは谷空間であり、有谷川を中心に構成されている。集落を中心とすると、前後に農地が広がる。谷奥に水分型神社の竈戸神社を望むことができ、その配置は集落からは視認することができ、西ノ谷の原型の構成と同様に異界の空間のサインが原型の空間構成では集落からでも認識できることが理解できる。また竈戸神社のあり方も西ノ谷と同様に谷奥の異界と山岳信仰が純度高い空間を有していることが分かる。

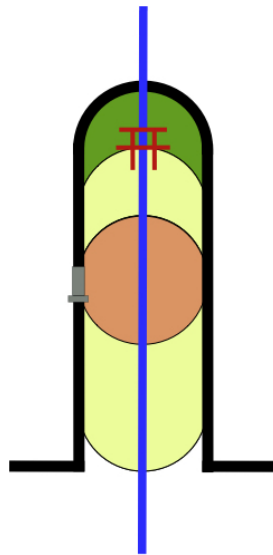


図 5- 11 ムカイの空間構成

5-2-2.スズハラ

尾根の縦軸方向に空間軸が生まれている。中央は水路が通っており、有谷川から取水した地は他界の聖地から流れているという認識にある。縦貫する水路はそのまま集落を貫き、尾根の下に農地に注がれる。集落の後ろは林地となっており、墓地の空間は集落の縁に配置されている。すなわち、集落のすぐ裏は他界の空間でかつ、集落を中心とする世界観が作られていたという認識あることがいえる。

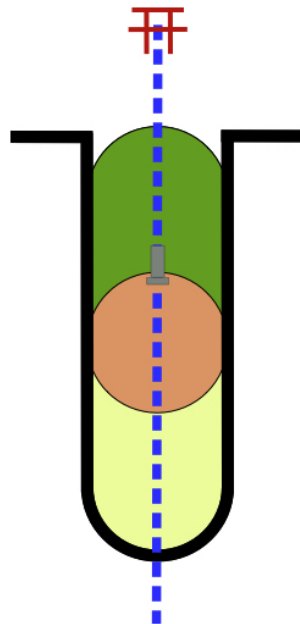


図 5- 12 スズハラの世界構成

5-2-3.オドリバ

基本的な空間構成はスズハラと同じ空間構成を有している。尾根の縦軸方向に空間軸が生まれている。中央は水路が通っており、有谷川から取水した地は他界の聖地から流れているという認識にある。縦貫する水路はそのまま集落を貫き、尾根の下に農地に注がれる。集落の後ろは林地となっている。農地の先の他界空間に竈戸神社が配置されている。しかし、スズハラと異なる点として、墓地の配置にある。オドリバは、スズハラは中央の中での世界観を展開していることに比べてオドリバは中心の集落の意識が薄いことが伺える。

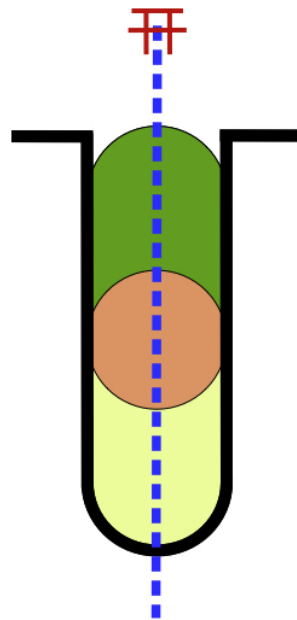


図 5-13 オドリバの空間構成

5-2-4.イチドウ

・原型

イチドウの原型の空間構成は、中央を水路が縦貫する台地上の空間構成を有していると認めると、中央に集落を形成しつつ、外側に農地を形成している点にある。他の尾根領域の空間構成と異なる点として、集落の両サイドが林地となっており、お互い視認できない他界空間で囲まれている。そのため、集落の生活空間は台地から他の空間に認識の影響を受けることが不可である。聖地は他集落との結束点である集落の特性から、街路の交点に配置されているため、中央に置かれている物と考えられる。墓地空間は農地と林地の狭間にあり、イチドウの生活空間の領域の縁が形成されている。

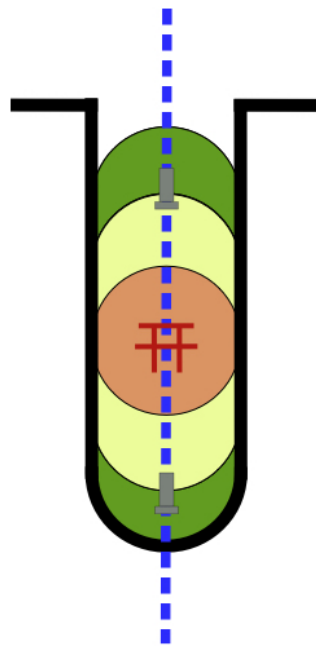


図 5- 14 イチドウの空間構成（原型）

・ 現在形

イチドウの現在形は、集落が消滅しているため、中央は聖地を残して消滅する。広大な農地は集落の消滅と同時になくなり、林地に置きかわったため、元々の墓地空間は他界空間に放り出される。そのため、原型の墓地空間は認識外に取り残され、また、墓地をイチドウの集落の中心に移設するなどして、かつての原型の空間は存在せず、自然空間の縁の影響を受けない別の空間となる。

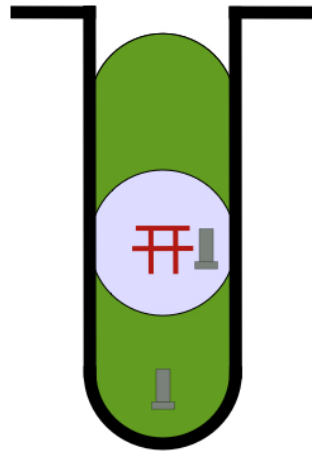


図 5- 15 イチドウの空間構成（現在形）

5-2-5.ヌタ

・原型

ヌタは囲まれた盆地の地形をしていることもあり、家中心の生活空間は他界の領域から流れてくる水路によって構成されている。前後が林地による高い空間であるため、盆地地形空間の中で世界観は完結していることが分かる。ヌタ特有の聖地である日吉神社は他界の領域から来る水路を一旦受け止める位置にため池と共に配置されている。日吉神社は、水の無いヌタの地域でも、空間構成における聖地のあり方は、西ノ谷やムカイなどと類似している。家中心の生活空間を示す葬地は、水路による空間軸から外れた位置に配置されている。

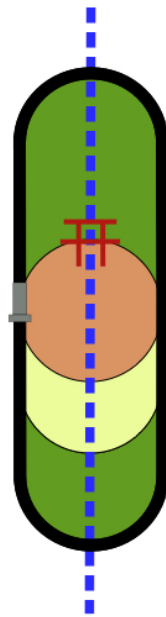


図 5- 16 ヌタの空間構成（原型）

- ・ 現在形

集落・農地は消え、土地利用のほとんどが林地に置き換わり、ヌタの空間が全て他界の領域となる。また、役割を終えた水路や日吉神社も消滅し、すなわち、現在のヌタは空間構成そのものが消滅として考えられる。原型の頃より葬地空間が残っているが、他界空間の中に埋もれることで、葬地が持つべき空間も現在型では有していない。

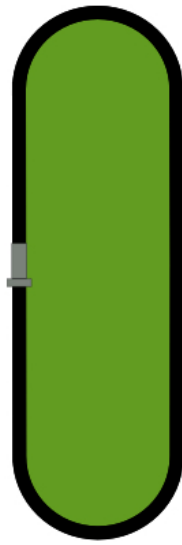


図 5- 17 ヌタの空間構成（現在形）

5-2-6.有谷（谷尾根空間）

有谷の谷尾根空間は、同じ聖地を有していることから、共通の世界観が存在していたと考えられる。ここで、有谷の谷尾根空間を含めた空間構成を図 5-18 にまとめる。ここでは、同じ尾根空間のスズハラとオドリバが同一の軸の中にまとめられる。しかし、共通の水脈を有する尾根集落は互いに高い空間を背後に有しているため、お互いの集落を中心とする生活空間内では認識を持つことが出来ない。更に、谷空間では、聖地が生活空間内の縁に在ることに対し、尾根空間は他界空間内に、聖地が存在することから、同一の世界観を有していながら、その認識は異なることが言えるだろう。

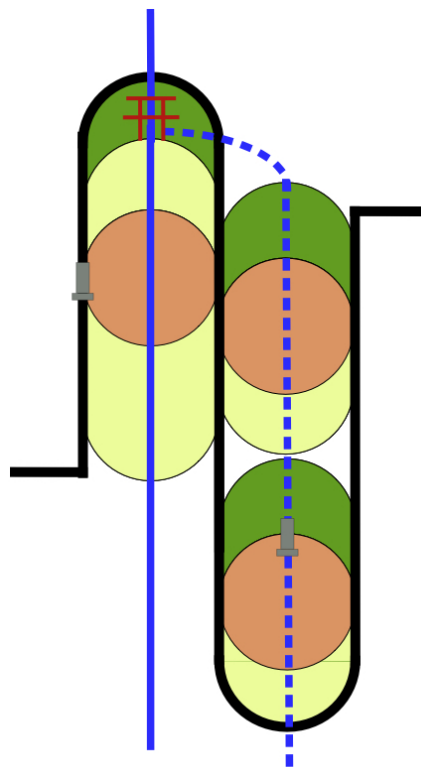


図 5- 18 有谷（谷尾根地域）の空間構成

第 6 章 中後入・有谷の空間認識

6-1. 中後入・有谷の空間と変遷のまとめ

第4章では比較考察するとき、谷と尾根という地形の共通点が見られる、中後入の西ノ谷（谷地形）-中ノ谷（尾根地形）と有谷のムカイ（谷地形）-スズハラ・オドリバ（尾根地形）で比較する。

急峻な谷で狭い平地を有する西ノ谷、なだらかで大きな平地のもつ尾根地形上を有する中ノ谷の谷尾根を有する中後入、大きな谷で広大な棚田を有するムカイ、尾根の上が小さな平地上のスズハラ・オドリバの谷尾根を有する有谷を比較する。まず、2つの大字が有する谷と尾根はその地形において、農地として利用できる土地の広狭の相関が対比的である。また、中後入は集落のある谷地形と尾根地形の間に2つの尾根が存在し、互いが認識することが出来ない。しかし、有谷では谷と尾根の距離は短く、お互いの集落が認識できる位置にある。このように、2つの大字は谷と尾根の地形の距離とその認識に相違が見られる。

原型の主要街路では、谷尾根の集落を繋ぐ街路に共通点が見られた。また、その街路は等高線に沿うような勾配の少ない道で、かつ水路を併設している点も共通していた。しかし、現在の中後入では共通していた主要街路は消滅し荒れはてているが、有谷では歩行専用の街路として現在も使用され、また併設される水路も現役として活動している。

中後入は後入川、有谷は有谷川という、2つの大字は共通で構造となる主要河川が存在する。また、主要河川から水路を引き、尾根地形を有する集落へ流れているという共通も見られる。しかし、現在、中後入の水路はほとんど枯れているのに対し、有谷は現在も尾根地域まで流れている水路が多い。

聖地では、中後入は2箇所、有谷では1箇所存在している。中後入は谷集落の氏子を持つ神社と尾根集落の氏子をもつ神社のそれぞれ有している。有谷は谷と尾根の集落全てが共通の氏子の神社に属する。谷地形に属する神社は、1945年頃では共通して河川そばでかつ農地と林地の境に分布している。また、葬地では、中後入は谷と尾根を繋ぐ主要街路から分岐している参道が伸びている。また、共通して尾根側に墓地を設けている。有谷では、集落ごとに葬地の分布が異なる。

1945年頃は、谷尾根共に棚田を造成して農地を造成していたことは共通している。また、林地の分布に関しても、標高の高い程、林地が形成されていることが多く、中後入の集落の分布は谷の河川を中心に形成していたが、有谷は谷の中央に分布しているのではなく、南向き斜面に分布している部分に違いがある。尾根の集落も、中後入では本村に隣接する形で背後に農地が用意されていたが、有谷においては尾根の上部の平地には集落があり、集落より下の標高に農地が分布していた。

現在は、農地が減少していることは共通している。しかし、その減少率が中後入と有谷で異なる。中後入の農地は谷地形での林地への変換が著しく、谷地形の農地はほとんど消滅している。尾根地域でも同様に減少しているが、まだ、まとまった農地が存在している。対して有谷の農地は谷地形での減少率が低く、現在も広大な農地の面積を有しているが、尾根地形の農地は、面積の減少の割合が高い。集落における宅地面積については、中後入の谷地形にのみ著しい減少が見られたが、有谷は、谷尾根地形どちらの集落においてもほとんど減少が見られない。

6-2. 中後入・有谷の空間構成のまとめ

西ノ谷は谷領域で、かつ河川を中心に世界が完結することから、中ノ谷にとってもともと字は共有しているが、別世界という認識で認められる。中ノ谷と東ノ谷は氏神を共有しているが、別々の生活の構成軸を持つ。2 集落の間には尾根が存在し、互いの尾根からは谷を挟んで望むことができる。その尾根には聖地・葬地を配置することで共有の他界の空間を持つ構成を持つ特性が見られた。

対して現在では、金峯神社を氏神とする空間と須賀神社は空間軸に組み込まれない。変遷を経ることで接続していた街路と水路は消滅することで、他界の先の空間は完全に繋がりを失った。各尾根に水路がなくなり、縦列空間の繋がりが薄くなること以外には中ノ谷と東ノ谷との間の変化は見られない。

有谷の谷尾根空間は、同じ聖地を有していることから、共通の世界観が存在していたと考えられる。ここで、有谷の谷尾根空間を含めた空間構成を図 5-16 にまとめる。ここでは、同じ尾根空間のスズハラとオドリバが同一の軸の中にまとめられる。しかし、共通の水脈を有する尾根集落は互いに高い空間を背後に有しているため、お互いの集落を中心とする生活空間内では認識を持つことが出来ない。更に、谷空間では、聖地が生活空間内の縁に在ることに対し、尾根空間は他界空間内に、聖地が存在することから、同一の世界観を有していながら、その認識は異なることが言えるだろう。

6-3. 中後入の空間認識

6-3-1.近代以前の空間認識

近代以前は、谷地形、または河川沿いでなければ水の確保が難しいことが考えられ、集落を形成する位置は、自ずと水脈の周辺に限られる。中後入の場合、里山として機能していた集落は西ノ谷のみである。谷地形に属する西ノ谷の集落では、物部川流域の御在所山を畏敬の対象としていた。尾根地形では、水路による大量に水を確保することが不可能だったため、大規模に農業を展開することが出来なかった。よって、里山の構成要素が足りないことから、機能していたとは考えないとする。

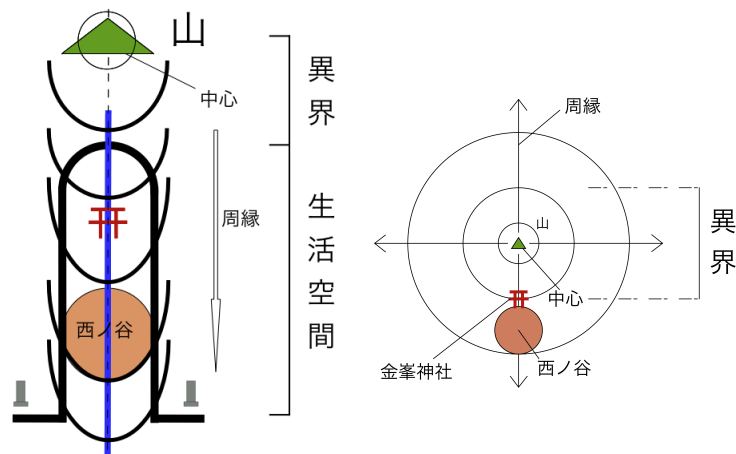


図 6- 1 近代以前の空間認識図（中後入（西ノ谷））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-3-2.近代の空間認識

江戸からの生活空間によって、集落を中心とする認識の領域が設定される。谷地形の西ノ谷は、近代以前から有していた認識に加え、尾根先に葬地を設けることでその先を他界の領域としたと考えられる。尾根地形の中ノ谷と東ノ谷は、生活空間とは異なる尾根に聖地と葬地を設けている。この尾根空間の特徴は2点ある。まず一つは、水路などの生活をしていく上で欠かせないものが無いことである。もう一つは、生活空間と他界の領域の尾根が互いに視認できることである生活空間から中ノ谷ではテンヤ川、東ノ谷では有谷川という河川を介して他界の領域を設定している。

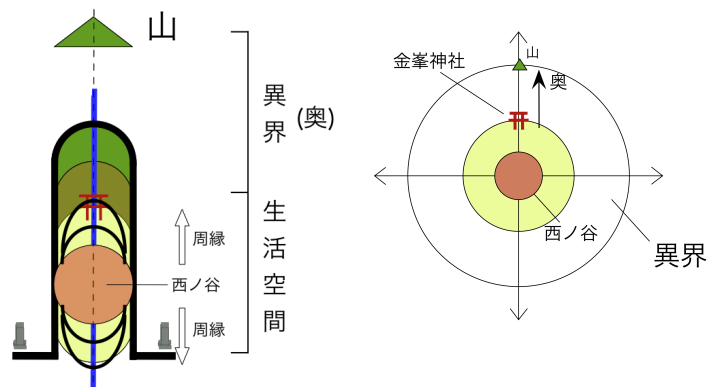


図 6-2 近代の空間認識図（中後入（西ノ谷））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

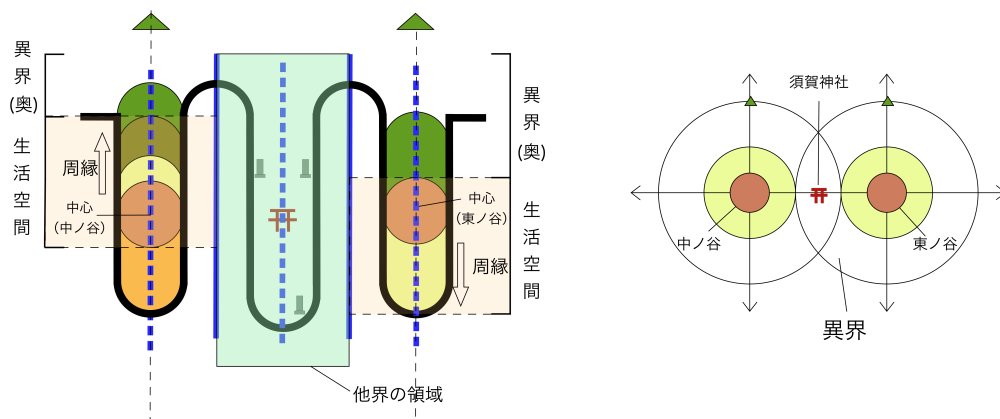


図 6-3 近代の空間認識図（中後入（中ノ谷・東ノ谷））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-3-3.現代の空間認識

近代から現代にかけて、居住空間の分離が進み、周囲の空間は認識から離れていきつつある。この現象は谷尾根空間どちらにも見られる。また、中ノ谷以外は集落自体が消滅しつつある。これは、産業が周囲からはなれていき、その場所に住む必然性がなくなったためである。よって、住居空間自体が消滅していく現象が起きていると考えられる。中ノ谷では、周囲が農地として利用されているため、他の二集落とは異なり生活空間としての空間が維持されていると見られている。

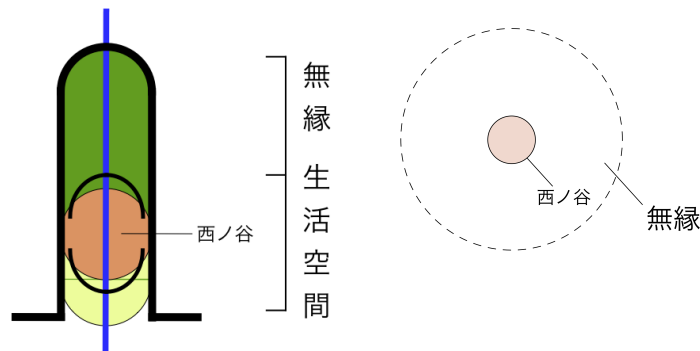


図 6-4 現代の空間認識図（中後入（西ノ谷））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

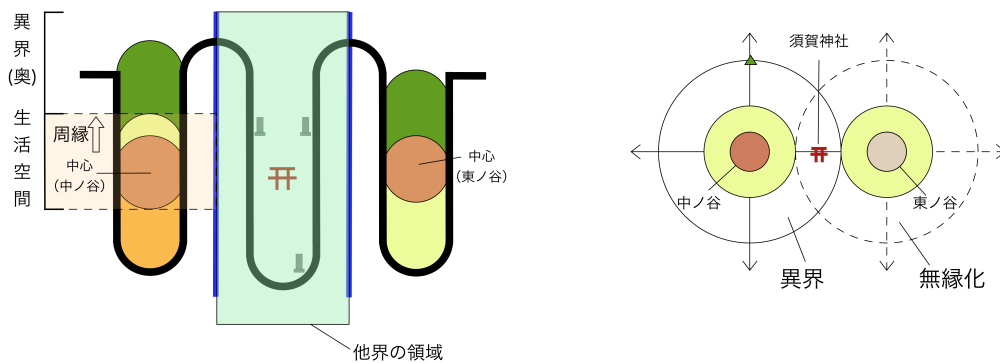


図 6-5 現代の空間認識図（中後入（中ノ谷・東ノ谷））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-3-4.空間認識の相関

中後入の空間認識で共通して言えることは、谷空間と尾根空間のどの空間に集落が形成されていることが空間認識に大きく関係していることが言えるだろう。谷領域での空間の縁は谷から見える尾根が軸の縁を形成しており、構成軸は純度高く谷にそって形成されていることが言える。そのため、河川を軸の中心とした空間は独立した空間認識を原型寺から有していたことが挙げられる。対して、中ノ谷と東ノ谷は尾根空間に生活空間の軸を有していることから、一つ先の尾根を認識の中に有することが言える。すなわち、構成軸と二つの空間認識を尾根の場合には用いることが考えられる。中ノ谷と東ノ谷は互いの集落の間の尾根空間を他界の境界の空

間として認識し、共有していたと言えるだろう。他界の境界の尾根から先は他界であるため、他界の空間を共有していつつ、お互いの空間軸は認識の外にあると考えられていたと見られるだろう。

こうして、谷空間と尾根空間の原型時の認識について論じたが、谷領域で独立しているため、西ノ谷と中ノ谷は互いを認識外と設定できた。互いを行き来する街路と水路は直接的な役割しか有せず、認識を共有するためのツールとして用いられなかったことが挙げられるが、この空間認識は変遷をたどることにより顕著になったと言えるだろう。林地によって他界空間の拡大が行われていたが、各集落の生活空間の空間認識はサト中心となり、他界に馳せる想いが消滅していることはそれぞれに起こりうる共通減少であったといえる。このことは、墓地の変遷による移動の実体から論じられることだろう。しかし、空間構成軸の中で自然空間の意志を示していた西ノ谷では空間認識の中に存在しないが、その空間を保持していた中ノ谷と東ノ谷では認識の中に在り、現在も利用されていることが理由づけられるだろう。

6-4. 有谷の空間認識

6-4-1.近代以前の空間認識

近代以前は、中後入と同様に谷地形のムカイのみ里山として機能していた。ムカイの集落では、川奥の赤塚山などの背後の山を畏敬の対象としていたと見られている。尾根地形では、集落こそ確認できるものの、中後入と同様に長距離の水路を造成することが出来ずに、大量の水を確保することが不可能だったため、大規模に農業を展開することが出来なかった。当時の尾根集落の人々は、生活のための水を深い井戸を掘ることで確保していたとされている。

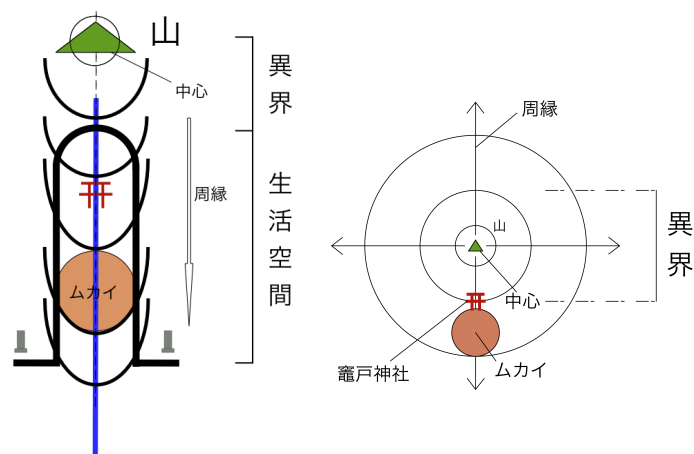


図 6- 6 近代以前の空間認識図（有谷（谷尾根空間））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-4-2.近代の空間認識

近代に尾根地形の集落が開拓されると、氏神としている場から流れている水路から取水していた。聖地の共有から谷空間と尾根空間は一つの‘中心’として機能していたと推測できる。その認識は図 6-7 に表した通りとなる。谷と尾根の集落を一つの‘中心’とした有谷は、集落から周縁を創りだし、一帯の農地を生活空間として設定した。竈戸神社を境として奥の空間を異界として認識できたと推測される。

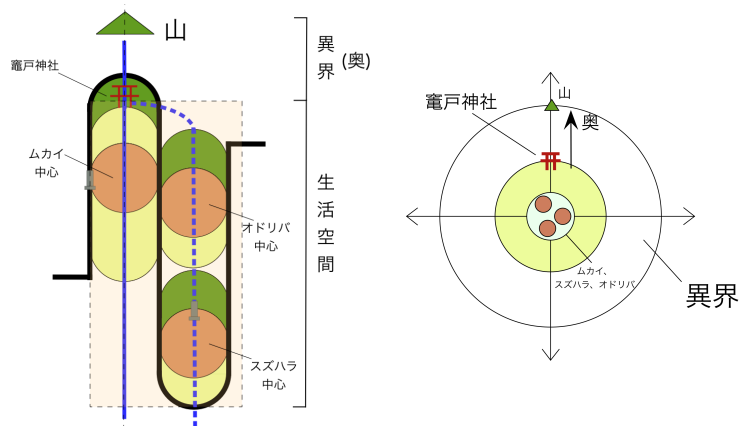


図 6-7 近代の空間認識図（有谷（谷尾根空間））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-4-3.現代の空間認識

谷空間のムカイが現在も近代の空間認識を有している。また近代の空間認識から、一つの氏神による世界観が作られているとすると、谷空間のムカイと尾根空間のオドリバ、スズハラはまとめて一つの‘中心’としていたことから、有谷の尾根地形の土地利用に大きな変遷が見られても、近代の空間認識と同じ認識を有していることが伺える。

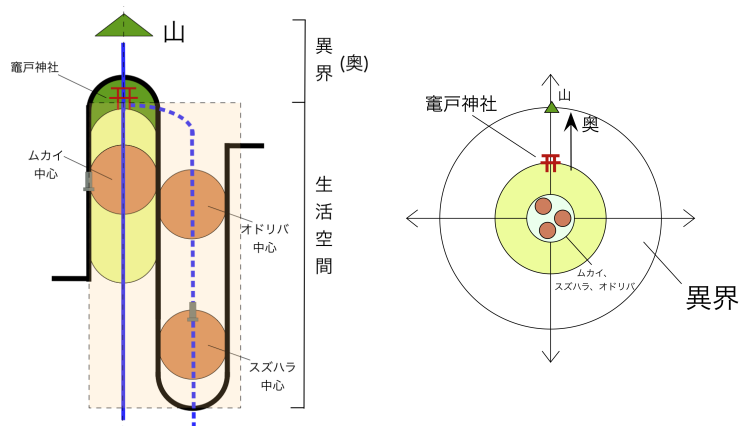


図 6-8 現代の空間認識図（有谷（谷尾根空間））

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-4-4.空間認識の相関

第5章の構成軸にあるように、谷領域と尾根領域の空間構成は、竈戸神社で結合することが出来る。有谷の空間認識は、谷と尾根が共有の氏神を持つことから、三つの集落は共に一つの共同体という意識を有する。よって、周囲の土地の認識は、集落を‘中心’から発せられた同じ階層の‘周縁’の性質を持つ。

現代において、ムカイは近代の空間認識を保持し続けているため、竈戸神社の先を異界とする里山としてのあるべき姿を持つ。尾根では現代の空間認識に移行しているように見えていても、三集落を‘中心’とする認識は保持されるため、大きな土地利用に変化が見られても、近代からの空間認識に変化が見られない。その結果、谷尾根空間が共有する聖地や、有谷川と水路、谷尾根空間を連絡する街路は保持され続ける。

6-5. イチドウ・ヌタの空間認識

6-5-1.近代以前の空間認識

近代以前は、イチドウとヌタに人々が居住しておらず、里山として成立していいない。

6-5-2.近代の空間認識

イチドウは聖神社を‘中心’とした、‘波動’が発せられている。イチドウの集落は‘中心’の聖地を取り囲む‘周縁’の性質を持つ。イチドウの生活空間は農地の縁までに限られ、そこには葬地が置かれている。イチドウの聖地は、交通の要衝としての特質から、街路を行き交う人々に生活空間と異界との交信を託していた。そのため、人々が集まる集落の中央に聖地を置いているが、近代の空間認識としての特徴を持っていた。

ヌタは盆地の地形をもつが、集落を‘中心’とし、農地によって生活空間が設定され、生活空間と異界の交点に聖地を置き、水路を聖性の軸とした近代の空間構成を持っていたことが伺える。江戸時代に意図的に造成されたため、谷地形に見られた空間認識を擬似的に作り上げている。

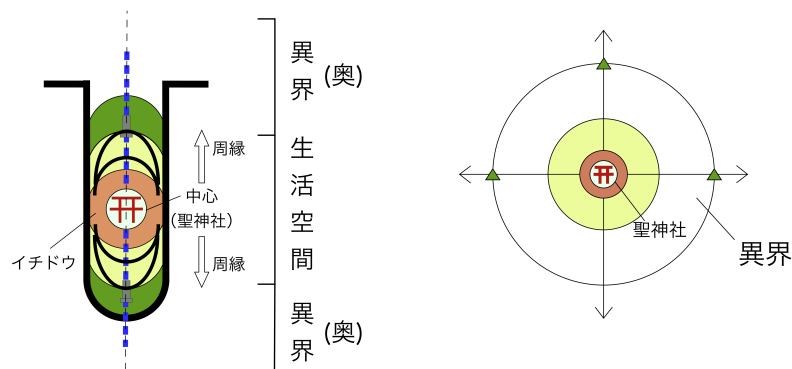


図 6- 9 近代の空間認識図（イチドウ）

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

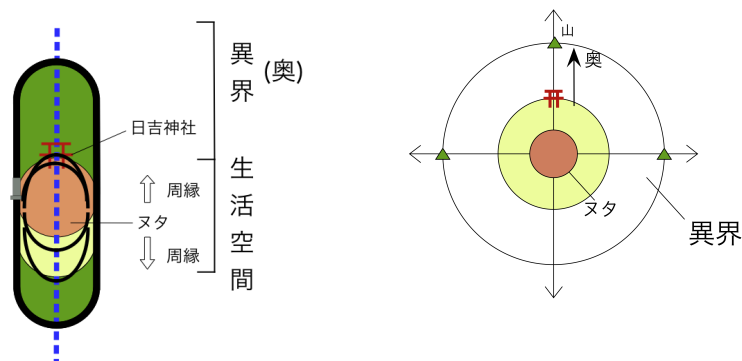


図 6-10 近代の空間認識図（ヌタ）

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-5-3.現代の空間認識

イチドウは‘中心’の聖地が意図的に残されているが、交通の要衝としての認識を持たなくなる。‘中心’を含む場にまで林地が浸食しているため、イチドウには空き家や墓地が未だ残されているが、土地利用による階層的な空間のシーケンスは崩壊している。

ヌタは人々が居住していないだけでなく、ほとんどが林地に置き換わることで、かつて集落があったことを認識することすら難しくなっている。そこで、集落としての縁すら存在しないため、現代のヌタは‘無’に支配されることで、里山としての価値を失っていることが伺える。

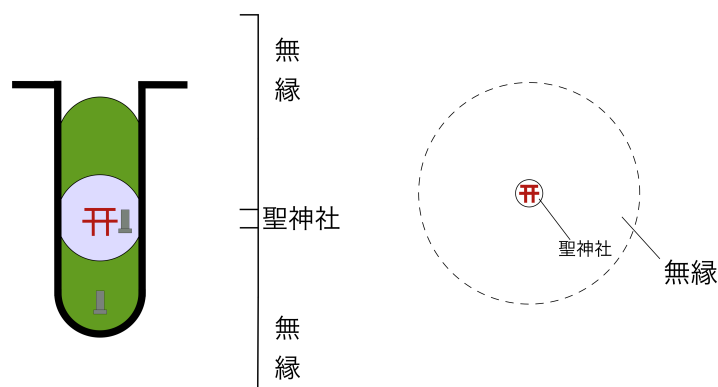


図 6-11 現代の空間認識図（イチドウ）

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

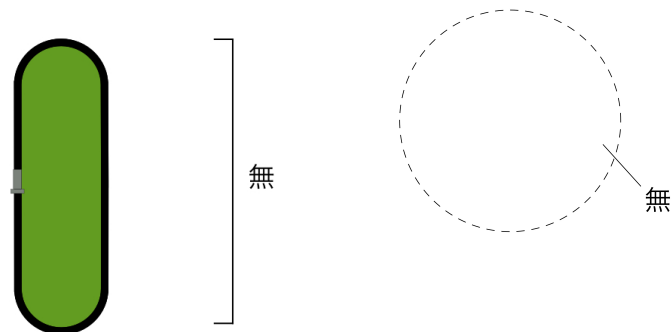


図 6-12 現代の空間認識図（ヌタ）

（左：空間構成をもとにした空間認識図、右：同心円状の空間認識図）

6-5-4.空間認識の相関

有谷の空間認識は、まず竈戸神社に属するもの（ムカイ・スズハラ・ムカイ）、聖神社に属するもの（イチドウ）、日吉神社に属するもの（ヌタ）でほとんど世界観は異なると考えられる。

イチドウでは、台地上の空間が広いことから、尾根空間でありながら、周囲の尾根領域を自らの認識の元に置いていないことが挙げられる。このことは構成軸の前後を林地で囲み、他界空間として扱っているように考えられる。また、水路の先の他界の領域はヌタに向いており、この点から有谷におけるヌタの重要性が認識において重要であることを示しているといえる。また、街路に聖地を配置していることがイチドウにとって重要で、ジャンクションとしての重要性が薄まると構成自体が成り立たなくなり、佐岡地区におけるイチドウとしての意義を失い、消滅したと考えられる。

ヌタは、盆地である点、標高の位置が他と離れていることが独自性を持つ空間を有していたと考えられる。有谷の下集落とは異なり、有谷川上流よりも高いため、構成の中心は白川かえら引いた水路に属している。よって白川の水源の重要性を聖地の分布によって明らかとなった。また、盆地であることから構成軸は広い台地によって尾根のみで空間認識を完結するイチドウと土地利用の構成が類似している。構成軸は水路と土地利用の変遷によって消滅し、それによって全領域が他界となる。寄り添う地物が消滅すると聖地も同時に消滅する。

第 7 章 終章

7-1. 成果と課題

本稿では、佐岡地区中後入・有谷の空間とその変遷から空間構成と空間認識の特質を明らかにした。既往の研究で、近代以前の空間を述べている論が多くを占めている中、谷と尾根の二つの地形に着目して調査することで、空間認識の違いを提示することが出来た。佐岡地区の中後入・有谷では近代以前、近代、現代の三つの区分で別々の空間的特質が発見できた。また、消滅しうる中山間地域を扱い、空間を記録することは大変意義がある。

近代以前では山を世界観の‘中心’として集落の居住者は認識し、自らが居る集落、及び生活空間は‘中心’に包まれる世界の中にいるという認識を有していた。それは、山林から生活資源の多くを得ていたため、恵みをもたらすだけでなく、自然災害などの驚異を含んだ背後の自然に畏敬の念を抱いていたことに由来する。近代以前は技術の関係で谷地形にしか里山の空間として利用できなかった。

近代では、土木技術の発展により、中山間地域でも大規模な棚田を有していたことが契機となり、集落の人々が管理できる範囲を生活空間と捉え、‘中心’が自らの存在する集落と位置づけた。また、農業などに恵みをもたらしてくれる河川や水路の水脈に聖性を持ち、かつての‘中心’であった山を異界として認識できるように境界に聖地を持ってくる。また、近代では、近代以前の里山でも見られた谷地形の里山空間だけでなく、これまで開発できなかった尾根地形を開発することが可能となり、尾根地形の里山が発生する。近代の谷地形の里山は、近代以前の空間を持ちつつも集落を‘中心’とした生活空間をもつタイプのみが見られたが、尾根空間の里山は谷空間の尾根地形で継承しているタイプと、尾根地形にしか見られないタイプを有していた。尾根地形の空間認識タイプは聖地の位置、集落の配置、水脈との関係によるものと考えられる。中後入・有谷では尾根地形の空間認識タイプは3タイプ見られた。

現代では、大規模な植林によりかつての生活空間の多くが林地に置き換わる。この時期を同じくして集落に住む居住者は近代の頃とは異なり、生業とする場が近代の生活空間から、他地域に移った。よって、人々が地域のなかで生活空間として認識する空間は極端に狭くなり、林地に人々は侵入しなくなる。近代から現代に至る変遷のなかで、生活空間と異界を接続する聖地や葬地が生活空間から離れていき、無縁の場と化した。集落の人々は生活の中に周囲を意識することが少なくなり、やがて集落の人々がそこに居住する必要性が薄くなる。これが、集落に人々が土地から離れる要因となった。これは谷空間、尾根空間関係なく見られる。また、里山としての空間を保持している有谷（ムカイ、スズハラ、オドリバ）は近代からの生活空間を保持していた。

また、本研究では中後入・有谷において、空間とその変遷について明らかにし、空間的特質を発見した。本研究の対象領域は高知県の一地域で見られた特質である。対象地域の範囲を広

げると、別の空間認識タイプや広い範囲での空間認識の類型が発見できる可能性がある。他地域の中山間地域と比較することで、広い範囲での空間認識の類型をまとめあげることが課題として挙げられる。

7-2. 里山居住に向けて

本研究では、地域に住む居住者がどのような空間認識をしていたかを明らかにしたが、これからの中山間地域にとって重要なのは、現居住者や未来の居住者が将来どのように住みながら空間整備を行うかである。本研究では、生活空間が地域から離れていくとそこに住む必然性を失うことが里山衰退の要因として挙げた。まず、居住者は単にそこで生活するだけでなく、生活と土地の結びつきを大事にしながら自分自身の可能な範囲の中でもよいので取り戻すことが大切である。その上で、本研究で示された空間とその変遷を理解した上でこれからの整備を行うことが望ましい。

これからの里山の整備活動は、一つではない。例として 2016 年 7 月に対象地域の西ノ谷では、氏神の金峯神社の遥拝殿を竣工した。金峯神社は、本研究で述べた通り、近代の空間認識では生活空間と異界を接続していた。しかし、西ノ谷の生活空間が極端に縮小したことで無縁の場に放り出されたまま社殿が老朽化していた。このため、高知工科大学環境建築デザイン研究室では、西ノ谷の生活空間まで遥拝殿を造替し、ご神体を救出した。代替した年の 10 月には約 10 年ぶりとなる祭事も開催した。また、2016 年 12 月には元社殿の場に社殿を代替した。この社殿は、無縁の場におかれている元社地の痕跡を示す意義のある建築物である。将来、空間整備が行われた場合に元の社地は聖地としてよみがえるように作られている。里山の整備指針の目指すべき目標を本研究では明示しているが、この活動は現代の生活空間に、近代の空間認識を継承するための良い例ではないかと考える。

では、荒れ果てた農地をどのように整備するか、無縁と化した林地をどのように活用すれば、近代の空間認識を継承することが出来るのか、今なお課題は多い。これから里山に居住し、整備を行う者としても、著者としても、この課題に向き合わなければならない。本研究が、その運動の契機となれば幸いである。

主要参考文献一覧

- 高橋俊也「京都における墓地の立地と市街地の変遷に関する考察」、日本建築学会計画系論文集、1999
- 野口慎吾、中島熙八郎「中山間地域における自然災害を契機とした耕作放棄地の発生メカニズムに関する研究」、日本建築学会計画系論文集、2010
- 佐岡村「高知県香美郡町村史」、1872
- 香美市教育委員会「大銀杏のもとで 佐岡のあゆみ」、2005
- 宇杉和夫「日本の空間認識と景観構成 ランドスケープとスペースオロジー」、2003
- 武内和彦、鷺谷いつみ、恒川篤史「里山の環境学」、2001
- 有岡利幸「里山Ⅰ」、2004
- 有岡利幸「里山Ⅱ」、2004
- コンラット・タットマン「日本人はどのように森をつくってきたのか」、1998
- 樋口忠彦「景観の構造 ランドスケープとしての日本の空間」、1975
- 宮家準「日本の民俗宗教」、1994
- 下中邦彦「日本歴史地名大系 40 巻 高知県の地名」1983
- 楠瀬慶太「新・葦生横山風土記 一高知県香美市域 120 人から聞いた村の歴史・生活・一」

謝辞

本稿をまとめるにあたり、指導をしてくださった渡辺准教授、高木教授、西内講師には心より感謝申し上げます。

渡辺准教授には、本研究の筋道や空間認識モデルの作成を進めていく中で、幾つもの論理的な手法の提示やアドバイスを頂きました。また、論文執筆にあたっては、幾度もご迷惑をおかけし、その度に手厚いご指導を頂きました。このことを忘れることなく、これからの活動でも研鑽を怠らないように努めます。

高木教授は、3者会議だけでなく、佐岡地区での活動でもご指導いただき、その度に画期的割、核心に触れるような指摘や提案を頂きました。西内講師は、4者会議での指摘が、本研究の本筋を改めて考え直す契機となりました。特に、どの主体で認識を示しているかという点で、論考を進める上で非常に重要な指針になりました。

また、本研究では高知新聞の楠瀬慶太氏、佐岡にご住まいの方々のご協力なくして成り立ちませんでした。

楠瀬氏には、自身の研究分野についてやその調査方法について、非常に丁寧に教えて頂きました。それだけでなく、佐岡地区で行った共同調査の中で、非常に多くのご指摘いただきました。心より感謝申し上げます。

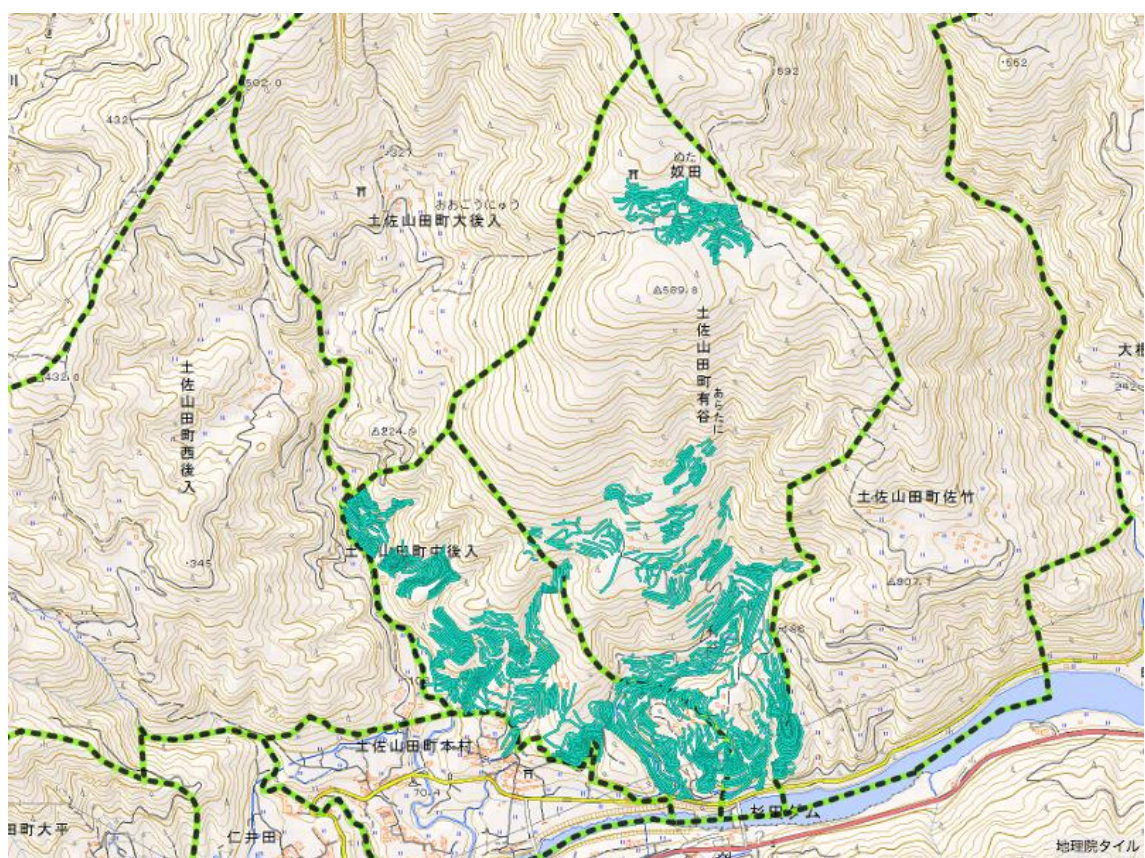
本研究では、有谷にご住まいの秋友氏をはじめ、多くの佐岡地区中後入・有谷にゆかりのある方にヒアリングを受けて頂き、当時の貴重なお話を伺うことが出来ました。心より感謝を申し上げます。

最後に、本研究を進める上で、大学院の同僚の協力は非常に頼もしいものでした。本研究の始めるきっかけとなるプロジェクトでは、国分将吾氏、嶋田祐典氏と現地に調査を行い、中後入の山林の変容過程の考察の研究を行いました。この研究の成果は本研究を進める上で非常に参考になりました。また、同じ環境建築デザイン研究室の研究室の上田悠貴氏には、空間認識図式のアドバイスを頂きました。

佐岡地区の風景は、多くの魅力ある疑問を投げつけ、その一つ一つが本研究を進める原動力でした。本研究をまとめたこれからも、里山が抱える課題に向き合い、考え続けて参ります。

最後になりましたが、6年間にわたる大学生活を支えてくださった家族に心から感謝申し上げます。

付録



図付録 中後入・有谷の石垣分布図